



T-ACT

つくばアクションプロジェクト

2018年度活動報告書



Tsukuba
Presentation
Participation
Collaboration
Knowledge
Art
Sports
Volunteer

PLAN?

DO!!

Let's think!!

Tsukuba Action Project
Social contributions
Region

Do you enjoy?

What to do?

ACTION!

CHECK?

Do! Do!! Do!!!

目次 -T-ACT 活動報告書-

はしがき

アクション / プラン

| | |
|--|----|
| Young Americans つくばスペシャル 2017 に参加しよう! (17012A) | 1 |
| 響け! つくばの調べーみんなの力を結集し、 ラター「マニフィカート」を演奏しよう! (17030A) | 3 |
| アダプテッドスポーツセミナー (17033A) | 7 |
| TSI プロジェクト (Tsukuba × Social Innovation) 大丈夫～誰でも自分らしく働き、幸せに暮らせる社会へ (17034A) | 9 |
| グローバルにボドゲ会 (17038A) | 12 |
| 第1回 アダプテッドスポーツワークショップ (17039A) | 14 |
| マイノリティって何?～私もあなたも、きっとみんなも～ (17040A) | 16 |
| つくば MVP Re. Vol.1～やどかり祭で Music Variety ～ (17042A) | 18 |
| これからの大学を考える ACADEMIC CAMP! (17043A) | 20 |
| ピアサポートでつながろう ーみんなで助け合えるキャンパスを目指してーPart2 (17044A) | 22 |
| グローバルにボドゲ会 2018 春 (17046A) | 24 |
| 盆 LIVE2018 (18001A) | 26 |
| ー瞬間のプレイがー生のつながりに変わる～一緒にダーツを始めよう～ (18002A) | 29 |
| 超学生団体新歓 (18003A) | 31 |
| 大人になってから生きづらくなる「児童虐待」を考える講演会を開きたい (18004A) | 33 |
| “Everyday Tsukuba Project” ～写真で迎える筑波大学～ (18005A) | 36 |
| 教材作成プロジェクト～ text tree ～ (18006A) | 38 |
| 人つくば～人文学系有志発表会～ (18007A) | 40 |
| 学内でフードバンク活動を手伝いませんか? (18009A) | 42 |
| あおぞら絵画遠足～日本を描きに出かけよう!～ (18010A) | 44 |
| つくばのカルチェ・ラタン (18011A) | 49 |
| 筑波大学における育児支援の環境を充実させたい! (18013A) | 51 |
| 宗教×生活 ～知りたい! あなたの世界～ (18014A) | 53 |
| 学生プレゼンバトル 2018 (18015A) | 55 |
| 筑波大学 TRPG 会 (18016A) | 57 |
| あなたの小説が読みたい! ー第十一回筑波学生文芸賞の作品及び一般選考委員の募集ー (18018A) | 59 |
| 数つくば (18019A) | 62 |
| 竹水鉄砲合戦～夏の陣～ /WATER GUN FIGHT (18020A) | 64 |
| 物つくば (18021A) | 71 |
| 地理つくば (18022A) | 73 |

| | |
|--|-----|
| 「きょうだい」って何？ きょうだい支援を考えてみよう！（18023A） | 75 |
| つくばから“お笑い”を発信したい！（18024A） | 78 |
| 第4回小中学生将棋大会（18026A） | 81 |
| 筑波大学非常用備蓄品倉庫って知ってる（18027P） | 83 |
| Library for all (LiFA)(18029A) | 85 |
| プロジェクト√（18030A） | 88 |
| インプロをやろう！（18032A） | 91 |
| アニメ心理分析入門（18035P） | 96 |
| つくば MVP Vol.3～あこぎな土曜日～（18036A） | 98 |
| ボランティア | |
| 平成30年度茨城県警察大学生サポーター（17029V） | 100 |
| 第12回つくば路100km徒歩の旅2018（17034V） | 101 |
| 一緒にサッカーしよう！（18001V） | 105 |
| 外国人児童・生徒の学習サポート（18002V） | 106 |
| 発達障がい児と遊んでくれる人募集！（託児・キャンプなど）（18004V） | 107 |
| 塾に行きたくても行けない子どもたちのための無料塾（18005V） | 108 |
| 【スクールフェロー】 | |
| 養護教諭の活動補助、職員室での仕事の補助ボランティア（18006V） | 110 |
| 龍ヶ崎市内の小学校で養護教諭のサポートボランティア募集！（18007V） | 111 |
| 高校生の「知りたい」をサポートしてください！（18009V） | 112 |
| 「ボードゲームのひろば」（18011V） | 114 |
| つくばサイエンスツアー小学生対象工作実験教室（18017V） | 116 |
| 第17回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦2018）語学ボランティア募集！（18020V） | 117 |
| 第11回 子どものための救命教室（18021V） | 119 |
| ☆スクールフェロー☆養護教諭の児童の健康管理にかかる教育活動サポート（18023V） | 120 |
| 外国籍子ども学習サポート教室（18024V） | 121 |
| NPO法人チャリティーサンタつくば支部 運営スタッフ募集（18026V） | 123 |
| ディキャンプクラブ（18031V） | 124 |
| 2018年度 実施状況報告 | 126 |

編集後記

※年度途中で、アクション・プランの報告書の様式が変更となり、新しい様式では成長度（自分ほどのくらい成長できたと感じますか？）と充実度（やりたいことができた充実感はありましたか？）を5段階で自己評価している。

※学生の学年は活動報告書提出時のものである。

はしがき

「つくばアクションプロジェクト」(T-ACT)の『活動報告書(2019年6月発行)』をお届けします。本プロジェクトは、2008年度(平成20年度)に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」に採択されて以来、学生の自主性と社会性の育成を図ることを目標に活動を続けてきました。2011年度末の学生支援GP終了後は、筑波大学における人間力育成支援事業の一環として継承され、また2013年度にはボランティアの枠が加わり、さらに2014年度にはT-ACT推進室が発足するなど、徐々に体制を整えながら継続してきました。令和元年の今年(2019年度)は、12年目の活動に入ったことになります。

本報告書には、主に昨年度に実施された企画・活動のうち、活動報告書が提出されたものが掲載されています。そのうち、T-ACTアクションおよびプランの企画が39件、T-ACTボランティアの活動が17件となっています。

T-ACTアクションについては、昨年度も文字通り多種多様な活動が実施されました。その中でも、ダイバーシティにかかわる企画が比較的目的立った年であったように思います。「アダプテッドスポーツ」「TSIプロジェクト 大丈夫～誰でも自分らしく働き、幸せに暮らせる社会へ」「マイノリティって何?」「大人になってから生きづらくなる「児童虐待」を考える講演会を開きたい」「筑波大学における育児支援の環境を充実させたい!」「「きょうだい」って何?」等など、障害の有無や性別に関して問題意識をもつ学生さんが、それぞれの現状を理解し、その知識を広く共有したいとの思いから、立ち上げてくれた企画であると理解しています。この学生発の流れが、今後大きなものになっていくか、注目したいと思います。

流れといえば、「人つくば～人文学系有志発表会」「数つくば」「物つくば」「地理つくば」などの「つくば」シリーズが初めて登場した年でもありました。「人つくば」の副題にありますように、人文学類の主専攻を超える学生間の学術的な発表会が企画されていますが、この企画に触発されて、「数学」「物理」「地理」の分野でも発表会をやってみようという輪が広がったようです。学術的な企画としては、これまで大学院生を中心とする「学生プレゼンバトル」がありましたが、学群レベルでも一つの流れを形成することになるのか、注目です。

T-ACTプランは、プランナーが教職員である企画で、例年ほとんど出てきませんが、昨年度は2件の力のこもった活動がありました。ぜひ、お目通しください。T-ACTボランティアについても多様な活動がありましたが、目立つのは子どもさんを対象としたものです。そのような見方でもう一度活動を見直してみると、逆に子どもや少年がかかわっていないのは、「一緒にサッカーをしよう!」と「世界湖沼会議語学ボランティア」ぐらいであることに気がつきます。「子どもは社会で育てる」という理念がさらに広まればと考えています。

昨年度、アクションの報告書の様式を一部変更しました(そのため、新旧の様式が混在しています)。新しい様式では、成長度や充実感を5段階で自己評価してもらおうという項目を設けました。多少遠慮して、2や3を付けている学生さんもいますが、堂々と5を付けた学生さんも多数おられます。また、「T-ACTを利用して感じたこと」に対して、T-ACTのスタッフが丁寧に、真摯に、親身に相談にのってくれたことを感謝するコメントが多数ありました。手前味噌になりますが、ここに記して、スタッフの皆様の労をねぎらいたいです。

今年度もT-ACTに皆様のこれまで以上のご支援とご助力をお願いいたします。

2019年6月

T-ACT 推進室長
加賀信広

● Young Americans つくばスペシャル2017に参加しよう！（17012A）

T-ACT プランナー 今吉 萌子（芸術専門学群3年）

活動目的

現在、社会のグローバル化にともない、大学生にもグローバルな人材として成長することが求められています。グローバル化が進むことにより、人々の日常生活にも影響や変化が生まれ、文化共生にまつわる問題も浮上しています。筑波大学は留学生や国際系サークルも多く、国際交流ができる環境はそろっているはずですが、一方でそのような環境や機会を有効に活用できていない学生が一定数いることも事実です。また、地域と一体になって国際化、多文化共生の可能性を探るチャンスというのは多くはありません。社会の国際化がさまざまな形で影響を与えていることから、問題の解決には、グローバルに考え、ローカルに行動することも重要になってきています。よって、世界22カ国で音楽ワークショップを行っているヤングアメリカンズを筑波大学に召還し（2017年9月22日～24日）、地域の子供たちと一緒に参加することによって、グローバルな視野とローカルな視野の両方に配慮することのできる「グローバル」な人材へと学生が成長する機会とすることを目標とします。さらに、ヤングアメリカンズの音楽ワークショップへの参加を通じて、自分の心を開いて表現することの喜びを体感するとともに、多様性、創造性を学ぶ機会としていきたいと思えます。さらに、昨年度の反省として、参加者同士のコミュニケーションが少なかった点を改善し、参加者同士のさらなる交流を図ることで学生間で国際交流や教育について考えを深められる場を提供することを目的としています。

活動計画

| | |
|-----------|--|
| 4月上旬 | 準備メンバー募集 |
| 4月第2週 | 第一回ミーティング |
| 5～6月 | イベント・説明会告知準備 |
| 5月下旬～6月上旬 | イベント告知開始、説明会準備 |
| 6月中～下旬 | 説明会の実施 |
| 7月上旬 | 参加者の募集・締め切り |
| 7月上旬～9月中旬 | ヤングアメリカンズとの交流会の計画・準備、当日運営メンバーの募集、参加学生向け説明会準備 |
| 7月中旬 | 参加学生向け説明会 |
| 7月下旬 | 参加学生同士の交流会 |
| 9月22日～24日 | ヤングアメリカンズつくばスペシャルに参加 |
| 9月下旬 | アンケート実施、反省会、報告会、感謝会 |

活動期間

平成29年4月1日～29年9月24日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：小林未歩（障害科学類1年）、川原沙菜（看護学類3年）、小出紗希（比較文化学類4年）、竹田美玲（教育学類4年）、並木孝充（比較文化学類3年）、戸田理香子（国際総合学類2年）、須田雄士（システム情報工学研究科修士課程1年）、古畑翼（比較文化学類3年）、砂子千皓（比較文化学類4年）、篠原美奈巳（比較文化学類4年）、染谷美也子（芸術専門学群2年）

P：渡和由（芸術系）

備考

当企画を運営する学生チームでは、NPO法人じぶん未来クラブが筑波大学で開催するワークショップの運営補助的な役割として携わる予定。

イベント保険はNPO法人じぶん未来クラブが加入。

企画協力：NPO法人じぶん未来クラブ

活動報告

実際の活動内容

本企画では、今年も目標人数の40人を上回る応募を頂き、無事イベントとして開催することができた。

活動期間中には、本企画について知ってもらうため、学生に向けた説明会を計3回行った。それに伴い SNS などでの広報宣伝にも特に力を入れ、例年を上回るスピードで参加学生を集めることが可能となった。

そのほかにも参加者説明会・勉強会・決起会や打ち上げなど、イベントを盛り上げるための企画を多く立案・成功させることができた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

昨年度までと開催時期が異なっていたため、各企画スケジュールなどを全て見直す必要があった点。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

各スケジュールに関して、昨年度までの反省を生かし事前に準備期間を長く儲けることでクオリティの向上につながった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

責任感のある仕事を通じて、より仲間への配慮や周囲の協力を実感することができた。自分自身、活動を通して「他人の体験・感動」をプロデュースする意識が生まれたと考えている。

参加者への影響

運営期間を共にしたメンバーそれぞれが考え、行動してくれたことが本企画成功の要因であったと考えている。本企画の運営は初めて、というメンバーが多い中で、全員が手探りながらもより良い企画を作り出そうと奮闘していたと感じる。

それら努力により、当日参加してくれた40人の学生にも貴重な経験を提供できたように思う。

未来のプランナーに伝えたいこと

大切なのは、根気とメンバーに感謝を常に忘れないこと・事務提出は遅れないように気をつけること。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

印刷機が使えること・親身に相談にのってくださることが良かったと感じています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

響け！つくばの調べーみんなの力を結集し、ラター「マニフィカート」を演奏しよう！（17030A）

T-ACT プランナー 川邊 貴英（教育研究科修士課程2年）

活動目的

○今までにない「Allつくば」な演奏会を実現しよう！

ヴァイオリンが弾けたり、歌が歌えたり…筑波大学には音楽を愛する人がたくさんいます。周辺地域に目を向ければ、さらにその数は増えるでしょう。

本プロジェクトは、つくばにいる音楽を愛する人々を「有機的に」結びつけるために発足しました。

○すべては演奏後の一杯のために…

本プロジェクトの特徴は、「有機的な」つながりを目指すことです。表面的な関係に終始するのではなく、より深い関係を志向します。

そのために、本プロジェクトのすべての段階において「一緒に食事して、楽しく雑談すること」を重視します。演奏だけでなく、演奏が終わった後も仲間と楽しく過ごすことで、自然と打ち解けることができるでしょう。

※本企画は未成年者の飲酒を助長するものではありません。未成年の参加者には名札へのシール添付を義務付けるなどして、飲酒防止措置を徹底します。

○第九の奇跡を再び！オーケストラと合唱のコラボレーションの可能性

今でこそ、年末になると日本全国で演奏される第九。その歴史をひもとくと、戦後の混乱期において人々をまとめ上げる原動力となっていました。第九によってもたらされる大きな感動…ぜひつくばでも、そのような感動を実現したいのです。

世界にはオーケストラと合唱のために書かれた素晴らしい曲がたくさんあります。ところが、実際に耳にする機会はそう多くありません。そのため、本プロジェクトでは第九に固執せずオーケストラと合唱のコラボレーションの可能性を追究したいと考えています。具体的には、ジョン・ラターの“Magnificat（マニフィカート）”に挑戦し、新たな感動の渦を起こします。

○自分の音楽観・人生観をより豊かに

本プロジェクトでは、たくさんの「出会い」があります。新しい人や新しい音楽に触れることで、自分自身の音楽や人生に大きな刺激がもたらされるでしょう。

活動計画

○本番について

- ・日時 2018年3月16日（金）18:00開場 18:30開演
- ・場所 ノバホール 大ホール
- ・指揮 佐々木雄一
- ・合唱指揮 河野陽介
- ・ソリスト 中本粽子
- ・後援 管弦楽団・男声合唱団メンネルコール・芸術系サークル連合会・つくば市合唱連盟
- ・演奏者 筑波大生を中心とした有志
- ・運営 本プロジェクトで組織された実行委員会が行う

○指揮者プロフィール

- ・指揮 佐々木雄一

1959年東京生まれ。5歳よりヴァイオリンをはじめ。

立教大学入学後、同大学でコンサートマスターを務める。1983年渡独、その後、ニューフィルハーモニーオーケストラの結成に参加。

在京のオーケストラ、室内楽団等での活動の傍ら、1989年に音楽集団 TOKYO Y'S CLUB を結成、弦楽四重奏を中心に様々な分野で演奏、指揮、編曲、レコーディング、プロデュース等を行っている。

特にジャズ、フュージョン系を中心とした「TOKYO Y'S CLUB LIVE」は各方面から弦楽四重奏の新しい試みとして注目を集め、全国各地でコンサート、ライブを積極的に展開している。1999年、日本クラウンレコードより1st Album「TOKYO Y'S CLUB」をリリース、日本初の本格的ジャズ系弦楽四重奏団のデビューとして高い評価を得、2001年には韓国でも発売が開始された。

ソリストとしてもリサイタルやオーケストラとの共演、レコーディング等幅広く活動。山下洋輔、マイケル・ナイマン、CHARITO、TOKU、佐藤允彦、原朋直、陳敏など数多くのアーティストとも共演している。2001年には南郷ジャズフェスティバルに参加、また、2002年には渡辺真知子25周年ツアーや映画「TAMALA 2010」のストリングアレンジを担当するなど活動の範囲はきわめて多岐にわたっている。

指揮者としては、吉祥寺フィルハーモニーオーケストラ常任指揮者をはじめフィルハーモニックアンサンブル管弦楽団、東京グリーン交響楽団等で長年にわたり指導にあたり、現在では、オーケストラ・ウィルの他、さつき管弦楽団、武蔵野室内合奏団の創立以来の常任指揮者を務め、西東京フィル、筑波大学、茨城大学等のオー

ケストラでも指導にあたっている。

これまでに指揮を森一夫、山岡重信、伴有雄の各氏に、ヴァイオリンを鈴木鎮一、森ゆう子、松井宏中の各氏に師事。

日本海外演奏協会会員、TOKYO Y'S CLUB 主宰。

○合唱指揮 河野陽介

茨城県神栖市出身・在住。千葉県立佐原高等学校卒。東京藝術大学音楽学部声楽科卒。声楽を寺谷千枝子、シュテファン・ゲンツ、渡邊明、渡邊一夫、坂本龍子の各氏に師事。

ソリストとして、ベートヴェン作曲「交響曲第九番」を中央区交響楽団と、フォーレ作曲「レクイエム」をアンサンブル金沢と共演。

合唱指導にも定評があり、佐野第九演奏会にて合唱指揮を務め、飯森範親氏、松尾葉子氏から絶賛を博した。全国各地で音楽活動を展開する傍ら、地方在住にこだわり地域に密着した文化芸術の振興に携わる。

現在、劇団四季「ノートルダムの鐘」、BS-TBS「日本名曲アルバム」出演中。NHK教育「ムジカ・ピッコリーノ」原語・歌唱指導。

○ソリスト 中本棕子

大阪音楽大学卒業。

日生劇場開場50周年記念オペラ「フィガロの結婚」でデビュー。

第50回記念なにわ芸術祭「新進音楽家競演会」新人奨励賞受賞。

佐渡裕プロデュースオペラ「セビリャの理髪師」ロジーナ役のカバーを務める他、様々なオペラ公演にて主要キャストを務める。

ドビュッシー歌曲リサイタル、R. シュトラウス歌曲リサイタルをそれぞれ記念イヤーに開催。

日本声楽家協会研究員・優秀者リサイタルに4度出演。

モーツァルト「レクイエム」、ベートーベン「第九」、オルフ「カルミナ・ブラーナ」等のソプラノソロを務める。

現在、桐朋学園大学大学院在籍（特待生）、日本声楽家協会研究員（特待生）。

○本番までのスケジュール

9月 実行委員会発足

演奏者募集

10月 演奏者募集

11月～ 練習・交流会

演奏会広報

3月 本番

11月から練習をはじめめるために、9月から演奏者の募集を行う。本番では100人を超える登壇者を見込んでいるため、最低でも2ヶ月間は演奏者の募集を行いたい。

○練習について

11月より隔週日曜日に行う予定。学内の教室のほか、春日交流センターなどの外部施設を利用する。

○運営について

本プロジェクトは、本学の課外活動団体である管弦楽団と男声合唱団メンネルコールの支援を受けながら運営する。両団体ともノバホールでの演奏実績があるので、そのノウハウを活用しながら円滑な運営を目指す。

○演奏会運営資金について

演奏会の規模が大きいこともあり、200万円ほどの経費がかかる。この経費は参加者からの集金によってまかなわれる予定である。

資金の管理は、管弦楽団と男声合唱団メンネルコールのノウハウを活かしながら細心の注意を払って行う。なお、本プロジェクトの予算も、両団の過去の実績値を基に算出したものである。

○開催場所

練習は筑波大学構内の教室のほか、つくば市の交流センターなどで行う。

本番はノバホール大ホールで行う。

活動期間

平成29年10月1日～30年3月31日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

○：三穂健太（生命環境科学研究科修士課程平成29年度修了）、井上桃伽（工学システム学類4年）、小島久樹（日本語・日本文化学類4年）、酒巻由梨奈（生命環境科学研究科修士課程2年）、八木陽帆（生命環境科学研究科修士課程1年）、鈴木一平（人文学類2年）、須賀佑実子（社会工学類平成29年度卒業）、今泉彩香（生

物理学類 4 年)、村田龍太郎(図書館情報メディア研究科修士課程 1 年)、長谷川輔(工学システム学類 3 年)、松本篤(心理学類 2 年)、山田健悟(比較文化学類 2 年)、相曽比奈子(日本語・日本文化学類平成 29 年度卒業)、吉田翔(生命環境科学研究科博士課程 2 年)、秦優希(人文社会科学研究科修士課程 2 年)

P: 佐藤聡(システム情報系)

備考

- ・ Facebook のイベントページを作成予定
- ・ 予算別途添付

活動報告

実際の活動内容

「心躍る、クラシック。」というコンセプトのもと、管弦楽と合唱のジョイント・コンサートを企画・運営を行った。

その際、①クラシック音楽の普及に貢献すること ②つくばの街および芸術文化の振興に寄与することという 2 つの目標を立て、企画を形作っていった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか? ⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

最も難しかったことは、演奏者の募集・確保である。

新しい企画に対する不信感・不安感、参加費の高さ、既存のサークル活動との競合といったようなことから、参加を渋られることがあった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

◎新しい企画に対する不信感・不安感の払拭のために

参加者の満足度を上げることに努めた。これは、マーケティングの「内部顧客を満足させることは、最終的に外部顧客の満足につながるという考え方」を応用したものである。具体的には練習にプロの指揮者を呼ぶことで、練習そのものを充実させたり、リアクションシートを配布して、細やかに参加者の意見をきける体制を整えた。

◎参加費の高さに対して

学群 1~3 年生に対し、減免措置をとった。当該学年の学生は、筑波大学の既存のサークルの活動費も払いつつ、このコンサートの参加費も払うことになるためである。

◎既存のサークル活動との競合

地域の社会人や本学 OB・OG などに声をかけた。筑波大の学生に対する、有効な手立ては打てなかった。

練習のようすを記録した動画配信等も行い、練習にすべて出なくても問題がないようには配慮をしたが、忙しさを理由に断られる状況は変わらなかった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

7 年間の学生生活の集大成となるコンサートだった。7 年間かけて積み上げてきた縁が一堂に会したような感覚に襲われた。

参加者への影響

実行委員に関して、一緒にコンサートを運営したことで自己肯定感の向上・達成感などを共有できたと思われる。(詳細は個別に執筆した報告書を参考にされたい)

参加者も口をそろえて「よいコンサートだった」と言っている様子を見ると、達成感の共有は果たされているようにみえた。

未来のプランナーに伝えたいこと

自分以外のすべての人に、青写真を伝え続けることが重要である。

「この企画に参加すると、こんなに楽しいことがある」と、常に情熱的に語り続けることだ。

企画の運営というものは決して楽しいものではない。

しかし、プランナー自身が(将来起こるであろう)楽しいことや嬉しいことを語り続けることで、今ある辛いことを乗り越える原動力をつくるべきだと思う。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

備品の貸し出しや印刷が、コンサート運営経費削減のために相当役に立った。

しかし、それよりよかったことは、黒田先生・飯島さん・加納さんが、それぞれの立場で相談に乗ってくださったことである。企画運営で思い悩んだ際には気軽に率直に相談できたので、悩みを一人で抱え込み、辛くなってしまうことは一切なかった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● アダプテッドスポーツセミナー (17033A)

T-ACT プランナー 新居 万里奈 (国際総合学類4年)

活動目的

現在の日本のスポーツは、学校の部活動レベルからプロレベルまでどのレベルにおいても結果主義であるように感じる。

勝ち負けだけでなく、もっとスポーツ、体を動かすこと自体を楽しめたらいいと考える。

そこで、年齢、性別、障害の有無、スポーツの得意不得意に関わらずみんなでスポーツを楽しもうという理念のアダプテッドスポーツについて深く知りたい、アダプテッドスポーツをもっと多くの人に知ってほしいという思いで申請する。

今回の申請では勉強会を行うことにするが、この勉強会では最終的な目標であるアダプテッドスポーツイベント開催に向けての人集めも兼ねている。

活動計画

・ミーティング

プランナー、オーガナイザーでのミーティングをオンラインで月2回、オフラインは必要に応じて行う。

・月に1、2回の少人数での勉強会

その際には澤江先生の研究室の院生さんや、ロービジョンフットサルチームに所属している方などをお招きする。(了承はいただいています)

(目的)・コアメンバーのアダプテッドスポーツ理解を深める

・多くの人にアダプテッドスポーツについて知ってもらう

・アダプテッドスポーツセミナーに向けての人集め

・アダプテッドスポーツセミナー

2018年2月末を目途に、興味関心のある参加者を募り、セミナーを開催する。

(目的)・多くの人にアダプテッドスポーツを知ってもらう

勉強会もセミナーも、学内掲示や SNS を利用して参加者を募る。

また、セミナーについては計画が進み次第別途申請する。

・活動場所

・図書館のセミナー室

・オンライン

活動期間

平成29年10月1日～30年2月28日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：西美乃里 (国際総合学類2年)、池田朋夏 (障害科学類2年)

P：澤江幸則 (体育系)

活動報告

活動成果

1か月に1回を目標に、アダプテッドスポーツや障がい者スポーツに関係している人をゲストとしてお招きし、簡単に説明していただいた後、メンバーや参加者からの質問に答えていただき、課題について議論しました。

月1回を目標にしていたのですが、1月は開催することが出来ませんでした。

しかし、開催できた計3回のセミナーを通じて2月に主催したアダプテッドスポーツワークショップへのモチベーションを向上させたり、各メンバーの想いを強めたりできました。

今後の課題

誰をいつまでにどのようにして招待するかを明確に決めることが出来ず、ギリギリに開催が決まったセミナーでは、メンバーの予定が合わなく全員参加が難しかったです。

人が少ないこともあり、一人のメンバーへの責任が集中しがちでもありました。

経験者からのメッセージ

活動場所の確保（中央図書館のセミナールームなど）は、1週間前に確実にしておいたほうがいいです。

運営者側から見たパーティシパントの変化

当初より、アダプテッドスポーツや障がい者スポーツへの関心と知識が深まりました。

● TSIプロジェクト(Tsukuba×Social Innovation)大丈夫～誰でも自分らしく働き、幸せに暮らせる社会へ(17034A)

T-ACT プランナー 興津 桃子 (障害科学類3年)

活動目的

就労支援を行う団体でのインターンシップを通じて、働きづらさや生きづらさを感じている人が社会には多くいることを知った。うつ病や引きこもり、リストラ、身体的・精神的特性など、その原因は様々であるが、そのすべてが環境的要因とすることができる。また、現在、一般に「就労支援」という「障がい者」等の特定の対象者向けの取り組みと捉えられがちであるが、先に述べた要因のように、社会で働くすべての人がいつ働きづらさや生きづらさを感じるようになるかわからない時代である。すなわち、現代社会において、就労支援とは障がい者等特定の対象者に向けた仕組みではなく、社会で働くすべての人が対象になりうる仕組みなのである。このことを考えると、就労支援の考え方や取り組みなどの周知が十分とは言えないのが現状である。就労支援のイメージを変え、自分の将来を考えるきっかけを作るためにこのような講演会を企画した。

さらに、働きづらさを感じる人が増えている現代社会では、就労困難者への支援は従来通りの仕組みだけでは解決できない大きな社会課題となってきた。そこで、働き方・生き方そのものを変え、誰もが働いて幸せに暮らせる社会を作るための取り組みを広げようと活動している方々に、実践に即した知見をお話いただくことで、この取り組みが一人でも多くの人の幸せにつながるきっかけを作りたいと考え、企画を進めている次第である。

活動計画

『TSIプロジェクト(Tsukuba×Social Innovation)大丈夫～誰もが自分らしく働き、幸せに暮らせる社会へ』

本企画では、障がい者雇用のコンサルティングを通して、社会で暮らすすべての人々が自分らしく働き、幸せに生きるための選択肢を広げようと活動されている方々にご登壇いただき、障がい者雇用や就労支援について、また、新しい働き方や自分らしい生き方についてお話ししていただきます。

本企画は、

- ・学生
- ・大学の先生方
- ・キャリア支援に携わる方
- ・その他本企画に興味を持ってくださった方

など、多くの方々に「障がい者雇用／新しい働き方」に興味を持っていただけることを願っています！

福祉を学んでいる学生のみなさんにとっては、「福祉×働き方」として障がい者雇用の先端となる取り組みを知ることでできる貴重な機会になることと思います！また、福祉以外の分野の学生のみなさんにとっても、新しい働き方に向けた取り組みを知ることで、これからの社会への新たなイメージを持ち、自分の将来や生き方について視野を広げる機会にできることと思います！

また、学生だけでなく、大学の関係者の方々や実際に就労を支援する活動に携わるの方々にとっては、障がい者雇用の分野で行われている新たな取り組みについて知っていただき、今後のご自身にとって貴重な出会いの機会となることと思います。

企画の詳細は下記の通りです。

《日時》

2018年2月17日(土) 13:00 受付開始、13:30開演 16:30終了

《場所》

筑波大学第二エリア

*詳しい場所につきましては、後日再度ご連絡させていただきます。

《参加費》

無料

《プログラム》

第一部成澤様の講演

第二部パネルディスカッション

※ご登壇者皆様に「障がい者雇用から見た新しい働き方」に関するお話しをしていただきます！

第三部交流会

ご登壇者の方々と実際に少人数のグループになって意見交換や質疑応答などをしていただけます！自分が気になっていること、講演を聞いた感想など、自由に会話を楽しんでください！

《ご登壇者一覧》

☆成澤俊輔氏 (NPO 法人 Future Dream Achievement 理事長)

『世界一明るい視覚障がい者』障がい者雇用のコンサルティングを通して働き方改革を推進中

☆岩田圭市氏 (株式会社リクルートホールディングス次世代事業開発室)

就労困難者向けの学習トレーニングプログラムを開発

☆牧山将蔵氏

障がい者雇用のコンサルティング事業を展開、研修経験も多数

☆細越美和氏（ウエストコーストインターナショナル 代表取締役社長）

海外留学プログラムを活用して若者の社会復帰・就労支援を展開

※ご登壇者の方々の詳しいご紹介は点線（-----）以下をご参照ください。

【ご登壇者のご紹介】

☆成澤俊輔氏（NPO 法人 FDA（Future Dream Achievement）理事長）

●経歴

1985年佐賀県生まれ（現在32歳）

埼玉県立大学社会福祉学科卒

3歳の時に先天的難病である網膜色素変性症と診断され、20代前半で視力を失う。

幼少期を海外で過ごし、この頃から自身の障害による孤独感を感じ続け、大学に7年間在籍し、うち2年間引きこもりを経験する。

大学在学中に経営コンサルティング会社での激務を経験する。

2011年12月にNPO 法人 FDA 事務局長に就任。

2013年3月には症候性癲癇となり、生死の境目を体験する。

その後、「世界一明るい視覚障がい者」というキャッチコピーとともに活動中。

2016年8月 NPO 法人 FDA 理事長へ就任。

学生のうちに出会った経営コンサルティングの能力を活かし、現在はNPO 法人 FDA の運営とともに、障がい者雇用のコンサルティングを通して、企業との連携や行政との連携を図りながら働き方改革・生き方改革を進めている。講演会などでも全国を飛び回り、困難を抱えている人に一秒でも早く自身の取り組みを広げようと活動している。

また、多くの人の頼りになりたいと活動するとともに、一人一人の変化を見逃さず、FDA の利用者の面談にも力を入れている。一人一人のニーズを聞き出し、その人が幸せに暮らすための取り組みを日々続けていらっしやる方である。

☆岩田圭市氏（株式会社リクルートホールディングス次世代事業開発室）

●経歴

2009年株式会社リクルートに入社し、「じゃらん」「ホットペッパーグルメ」等のWEB ディレクター、新領域の事業開発等を担当。

2016年身近なメンバーがメンタル不調に苦しんでいたことをきっかけに、就労困難者支援の学習プログラム「knowbe」を企画、社内事業化。

同年10月より、プロジェクトリーダーとして事業を推進している。

☆牧山将蔵氏

●経歴

C&E コンサルティング代表

大学卒業後、大手PC メーカー、IT ベンチャーでの就労経験を経て2013年に研修講師業としてC&E コンサルティングを設立。これと兼任で2015年より株式会社 NANAORO へ参画。自身の障がいと、障がいをクローズとして就労した経験をふまえたコンサルティング、講師業、営業職に従事。

☆細越美和氏（ウエストコーストインターナショナル 代表取締役社長）

●経歴

海外留学プログラムを通じて、若者の社会復帰支援事業を展開。

活動期間

平成29年9月24日～30年2月17日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：五十田莉菜（障害科学類3年）、原千咲季（障害科学類3年）、山下菜月（障害科学類3年）

P：八重田淳（人間系）

備考

ご参加いただく学外の講演者の方々には、ご自身の営利活動の広報や、活動への参加者を募集するようなことは行わないよう、約束していただきます。

活動報告

活動成果

就労支援や障がい者雇用の分野で働き方の改革に向けた革新的な取り組みをされている方々を講師としてお招きし、講演会を開催。障がい者雇用の分野において、働き先の不足やミスマッチングなどの課題があるにも関わらず、社会からの関心の薄さや他人事のようなイメージに違和感を覚え、就労支援などを身近に感じてもらうことや新しい取り組みを知ってもらうことを目的に企画した。講師の方々の講演に加え、パネルディスカッションや交流会としての意見交換の時間を設けるなど、一方向の情報提供にならないようなイベントとして開催した。約3時間のプログラムで、40～50人の参加を目標としており、実際には32人と参加者数は目標に到達できなかったが、アンケートでは参加者の9割以上の参加者が「満足した」と回答してくれた。また、8割以上の参加者がこの分野にさらに興味を持ったと回答してくれており、企画の目的は達成していると考えられる。さらに、企画の目的には入れていなかったが、本企画が参加者同士の交流にもつながっていたように見え、想像を超えたイベントの効果があったことは嬉しかった。

今後の課題

スケジュール感にもう少し余裕を持たせたらよかった。9月に企画を思い立ったが、いろいろあって本格的に企画の中身を詰められるようになったのは12月になってからだった。12月から1月末にかけて企画を進め、広報を開始できたのが1月中旬から2月の頭にかけてであったため、宣伝期間としては少し余裕がなかった。より幅広く宣伝をするためにも、2ヶ月前にはある程度イベント内容が形になっていたらよかった。

経験者からのメッセージ

1人でやるのはとてもしんどいです！企画を始めてしばらくはほとんど1人で企画を進めていたため、なかなかうまく進められませんでした。協力してくれる仲間を集めたことで、自分の仕事も減って余裕が出るだけでなく、自分にはない視点から意見やアドバイスをくれる人がいる心強さや安心感を強く感じました！やりたいことがあるのなら、それを積極的に周りの友達に伝えて、協力者を増やしていきましょう！

運営者側から見たパーティシパントの変化

障がい者雇用という分野に今まで以上に興味を持ってくれた。自分の企画ややりたいことにたくさん力を貸してくれてとても嬉しかった。「講師としてお招きした人に会えてよかった」と、企画に協力してくれた学生にも新たな出会いや発見の場を提供できたことはとてもよかった。

T-ACTに関する感想

0からの企画にご協力いただいて本当に感謝しています。

ただ、大学の風量もあるのかもしれませんが、もう少し外部の団体や人に寛大であると学生の新たな知見や交流の場をより作れるのではないかなと感じました。

● グローバルにボードゲ会 (17038A)

T-ACT プランナー 高野 大 (比較文化学類4年)

活動目的

筑波大学ならではの交流の在り方として、留学生も巻き込んだ地域交流をしてみたい。世界各国のボードゲームを留学生と楽しむことで言語の壁を越えた交流を目指す。

つくばテーブルゲーム交流協会では、ボードゲームを利用した大学生と地域住民との交流活動をしているが、これまで留学生の参加は少ない。今回会場を留学生の暮らす宿舎にする等の工夫を行い、より留学生の参加しやすいイベントにする。

活動計画

新しくできた留学生向け宿舎であるグローバルビレッジで、ボードゲーム会を開催する。

ボードゲームの用意、当日の運営はつくばテーブルゲーム交流協会が担い、留学生への広報は Omochi Language Club が担う。

主催：つくばテーブルゲーム交流協会

共催：つくばグローバルアカデミックサービス株式会社 (※1)

協力：Omochi Language Club (※2)

場所：グローバルビレッジコミュニティステーション 2 階フロア

対象：学生・留学生・地域住民

目的：ボードゲームを利用した、留学生と学生さらには地域住民との交流

※1 筑波大学に委託されグローバルビレッジの運営を行う会社

※2 留学生とのチャットコミュニケーションをする学生団体。特に留学生向けの広報を担う

スケジュール

12月末広報開始

2/17 (土) 開催

会場を借りる時間：9：00-21：00

イベントの開催時間：10：00-20：00

参加者の希望に合わせて、多様なボードゲームを楽しむ

使用するボードゲームはつくばテーブルゲーム交流協会のメンバーが用意する

コミュニティステーション 1 階にポスター掲示を行い、受付は 2 階入り口でつくばテーブルゲーム交流協会のメンバーが行い、学外者 / 学内者の確認をする。

飲み物、おやつ等も管理会社の協力のもと用意し、休憩・チャットスペースを確保する。予算5000円。

つくばテーブルゲーム交流協会が企画運営に際して行う具体的な活動

受付、ボードゲームの説明、参加者相互の交流の促進、ボードゲームのマッチング等

活動場所

グローバルビレッジコミュニティステーション 2 階フロア

グローバルビレッジを運営するつくばグローバルアカデミックサービス株式会社の協力が得られることになっている。

活動期間

平成29年12月25日～30年 2 月23日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：福田哲郎 (比較文化学類 3 年)、亀沢和史 (工学システム学類 3 年)、吉川健人 (生物学類 3 年)、大草有里枝 (国際総合学類 3 年)

P：及川哲平 (学術情報部情報基盤課)

活動報告

実際の活動内容

2月17日10:00~20:00、筑波大学学生宿舎 Global Village にてゲーム会を行った。

活動の目的は、留学生・日本人学生・地域住民が言語の壁を越えて交流する場を創生することにあった。当日は、上にあげた三者がたどたどしくではあったが互いに交流を深めようとしている姿が伺えた。

遊ばれていたゲームについて、言語依存の低いゲームばかりだったかというそうではなく、むしろ言語依存の高いゲームが多かったように感じる。

いくつか例をあげるとすれば、「お邪魔者」「二つの街の物語」「ボナンザ」等である。

「お邪魔者」は相手の正体を見破るゲームであり、会話・口調等が重要になってくるゲームである。

「二つの街の物語」は隣り合った二人で一つの街を作り上げていくゲームであり、話し合いが必要である。また、「ボナンザ」は交渉によって持ち札を交換してポイントを稼ぐゲームである。

このように、普通であれば同じ母語話者で行うようなゲームであっても留学生と本気で遊べたのは大きな成果であった。勿論言語依存の低い、カードに描かれた絵が支持するコマを素早く取る「おぼけキャッチ」や、同じ色のカードを積み上げていく「ペンギンパーティー」等でも盛り上がった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒71%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

集合時間が適当だった(オーガナイザー)→ギリギリの対応が目立ってしまった

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

急いで集まるようにみんなに指示した

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

留学生にもゲーム会の需要があるということが判明した。喜び

寝坊したメンバーがいた。激怒

英語が話せるともっと楽しかったかな。哀しみ

でも、たくさんゲームで遊べた。楽しい

参加者への影響

その後のゲーム会に留学生が参加してくれた。

この活動がきっかけになって、今まで関わりのなかった人たちが関わられたという事はとても嬉しいことである。また、参加した日本人学生の中には「英語頑張らないと…」と言っている者もいた。

ゲームが一つの動機になって、このような気持ちを興させたという事実も喜ばしいことである。

未来のプランナーに伝えたいこと

やりたいと思ったらとりあえずやってみて、でもうまくいかないからそれはそれでいいじゃん。同じように頑張っている学生を T-ACT で見つけると、失敗しても少し元気が出る。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

グロビの方と知り合いになれた。学内・学外の多様な人とつながることのできる環境が T-ACT にはあった。

Omochi Language Club の協力があって留学生に広報することができた。T-ACT 利用学生間の交流があったおかげで、T-ACT 発の団体によるコラボレーションが実現した。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5

● 第1回 アダプテッドスポーツワークショップ (17039A)

T-ACT プランナー 池田 朋夏 (障害科学類1年)

活動目的

2017年10月より、ゲストを招いての小さな勉強会、メンバーでのミーティングを重ねてきた(17033A アダプテッドスポーツセミナー)。その中で、メンバー内でのアダプテッドスポーツへの理解、興味、議論を深めてきた。そして今度は、まだまだ認知度が高いとはいえないアダプテッドスポーツを多くの人に知ってもらい、スポーツを身近に感じてもらいたいと強く思うようになった。そこでアダプテッドスポーツを気軽に体験できるワークショップを開催したい。

ワークショップの参加者にスポーツに対するイメージを広げてもらい、「スポーツは楽しい!」と体感してもらうことが目的である。

活動計画

- ・1～2月(イベントへの準備)
 - 開催場所の確定
 - コンテンツの具体化
 - 必要な物のリストアップ
 - 広報活動
 - 場所の下見、当日配置の決定
- ・ワークショップ当日のスケジュール
 - アイスブレイク(15分)
 - グループディスカッション(10分)
 - 全体共有(8分)
 - アダプテッドスポーツ紹介(10分)
 - 質疑応答(5分)
 - スポーツのルールを考えよう(15分)
 - 全体共有(5分)
 - 休憩(10分)
 - 実践タイム(40分)
 - 振り返りタイム(10分)
 - 今後の宣伝(5分)
 - 講師陣からのまとめ(10分)
 - アンケート記入(5分)
- ・2～3月(イベント後の振り返り)
 - 収穫、反省を踏まえ次回の活動を考える。
 - 今まで勉強会に協力してくださった方にも報告する。
- ・基本的には筑波大生を対象にするが、広報活動により外部の方にも興味をもっていただけた場合、参加可能とする。
- ・当日の進行は基本的には学生で行い、アダプテッドスポーツ紹介・質疑応答・まとめ、については澤江先生の協力を打診中である。
- ・イベント開催場所(予定・要相談)
 - 中央体育館・体操場
- ・イベント開催日
 - 2018年2月17日(土) 14:00～17:00

活動期間

平成30年1月10日～30年3月31日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O: 新居万里奈(国際総合学類3年)、鈴木葵(教育学類2年)、西美乃里(国際総合学類1年)
P: 澤江幸則(体育系)

活動報告

活動成果

コアメンバー以外での初めてのイベントとなった。ワークショップ当日は、アイスブレイク、グループディスカッション、アダプテッドスポーツ紹介、アクティビティ、実践、まとめと続いた。今回のワークショップの目的は参加者全員のスポーツに対するイメージを広げること、参加者全員に「スポーツは楽しい！」と感じてもらうことだった。イベント終了後のアンケート結果によると、参加者全員が上の2つの目的を達成してくれた。運営側でありながら、ワークショップが始まると参加者の方と一緒にスポーツを楽しむことができメンバー一同大満足のワークショップとなった。

今後の課題

2つの課題が見つかった。1つは広報。運営をしていくなかで、当日の内容はミーティングを重ねるにつれてしっかり深めていけたが、広報活動は直前でバタバタしてしまった。ポスター掲示、SNS利用、地元誌への掲載など複数の方法で広報を行い、どれも一定程度効果は得られたが、規模を大きくするにあたっては動き始めを早くすることが必要不可欠だと思った。2つ目は、対象者の設定。当初は筑波大生メインで行う予定だったが、結果的に学外の方が半分以上を占める結果となった。小中学生や大人、大学生など、対象が変わると内容や説明方法など変更すべき点が多くなるため、さまざまな場合を想定する必要があると思った。

経験者からのメッセージ

頼れるオーガナイザー、パートナーを見つけられたら、イベント成功間違いありません。イベントが近づくにつれて忙しくなり、不安になってしまうかもしれませんが、意外と何とかなるものです。運営側が楽しむ、満足することが第一だと思うので、イベント開催までの過程も楽しつつ頑張ってください。

運営者側から見たパーティシパントの変化

ほとんどが面識のない人同士で、最初は静かな雰囲気だったがアイスブレイクをきっかけに多少打ち解け、その後のグループディスカッションあたりからは活発な話し合いができていた。アクティビティからは、もう皆さん夢中で、大人も子どもも関係なく笑顔で活動できていた。「また開催してほしい！」など前向きな声もたくさんいただき、スポーツの新たな楽しみ方を知っていただけたと思う。

T-ACT に関する感想

個人的には初めての運営だったため、広報をはじめ、たくさんアドバイスを頂きありがたかったです。準備が進めば進むほど、T-ACT フォーラムにも行きやすく、相談しやすくなっていました。今回は時期的にも他の似た系統のイベントと日にちが重なってしまったため、そのあたりもアドバイスいただければ検討の余地があったのかなと思います。企画案から当日準備まで全ての段階でご協力いただきありがとうございました。

● マイノリティって何？～私もあなたも、きっとみんなも～ (17040A)

T-ACT プランナー 三浦 惇 (障害科学類3年)

活動目的

社会には様々なマイノリティに属する人々が存在する。国籍や肌の色、障害やセクシュアリティなどを包括的に考えた時、人は誰でもマイノリティに属しうるのだ。今回の企画では、どのような特徴を持つ人が社会のなかでマイノリティとなりうるのか、また自分はどの面でマジョリティでどの面でマイノリティであるかを考え、ディスカッションを通して様々な特徴を持つ人と共に生きる姿勢の大切さを訴えていきたいと考えた。

活動計画

当日の流れは

1. マイノリティに関する基礎知識の説明 (18:30~18:45)
2. グループごとに「自分が所属しているであろうマイノリティ」「現代社会で差別されているマイノリティとそうでないマイノリティの違い」「自分が所属するマイノリティが理由で差別を受けたら納得できるか」を話し合ってもらおう。(説明18:45~19:00・ディスカッション19:00~19:40)
3. 話し合いで出た意見を共有する (19:40~20:00)
4. まとめを行う (20:00~20:15)

という流れを予定している。()内はあくまで目安

宣伝はポスター、web サイトを用いて1月初めから行う。

一月下旬にはリハーサルも行いたい。

活動場所

1C405

活動期間

平成29年11月17日~30年2月15日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O : Passos Couteiro Pedro (国際総合学類 4年)、藤間友里亜 (心理学類 3年)、内田瞬哉 (障害科学類 2年)、弓野詩恵莉 (心理学類 1年)、三上真央 (人文学類 1年)

P : 加藤靖佳 (人間系)

備考

現状使うものはパソコンとプロジェクターのみ。

現段階ではどちらも当てがあるので借りる予定はない。

活動報告

実際の活動内容

ワークショップ形式でマイノリティについて知識を深め、ディスカッションを通してお互いの意見を交換した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか? ⇒ 80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

メンバーが思うように動いてくれなかったり、指示が通らなかったりした。当日のドタキャン。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

全体に対してではなく個人メッセージで指示を出した。

元々ドタキャンにはある程度対応できるようにしておいたのが功を奏した。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

自分の思いを相手に伝えることの難しさを知った。また、世の中には絶対に相容れない考え方もあると分かった。

参加者への影響

マイノリティを特別視するのではなく、同じ目線に立って意見を交わすことで、相手も自分と同じ人間であるとかんげりようになった人はいたようだ。

未来のプランナーに伝えたいこと

広報活動はやりすぎなくらいで丁度いい。妥協厳禁

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

具体的にどのような順序で動けばいいのかを丁寧に説明してくれたので、初めてでも企画を動かしやすいかった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒2

つくば MVP Re. Vol.1～やどかり祭で Music Variety～ (17042A)

T-ACT プランナー 飯沼 天空 (比較文化学類2年)

活動目的

自分一人でギターの練習を始めたが、時々誰かと演奏することも楽しそうだと考えることがある。その時に、例えばドラムは軽音部でロックをやって、バイオリンはオーケストラでクラシックを演奏する、というようにそれぞれの楽器で演奏する楽器の組み合わせや曲のジャンルが固定されていることに思い至った。しかし、エレキギターでバッハを演奏することも、琴でビートルズをやることも不可能ではないはずだと考えた。そこで、様々な楽器(声、手拍子など、「人の身体」も含め)を一堂に会し、皆で一つの楽曲を作り上げることができれば、観客とも一緒に今までにはなかった新しい音楽の楽しみ方ができ、演奏する側も新たな刺激が得られるのではないかと思った。

「つくば MVP (ミュージック)」は「つくば Music Variety Project (つくば音楽多様性プロジェクト)」の略。

1年目の2017年は、雙峰祭でのステージを目標に活動してきたが、あいにくの天候のために残念な結果となってしまった。

2年目の2018年は、活動の回数・幅を広げることを目標として活動する。初回の今回は、やどかり祭で初ステージと共に、つくば MVP の存在のアピールも兼ねたいと考える。

活動計画

1月：メンバー確定と曲決め

2・3月：練習

4月・5月：練習、やどかり祭企画団体事務、宣伝

5月下旬(予定)：やどかり祭でのステージパフォーマンス
並行して次回活動に向けての広報活動も行う。

活動費として、一人1500円、おおよそ1万3千円程度の予算を確保し、教養楽器購入、スタジオ使用料等に充てる。

活動場所

第2エリアの教室を中心に活動。

活動期間

平成30年1月22日～30年5月31日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：長部世理菜(比較文化学類2年)、武田爽(比較文化学類2年)、楊欣海(比較文化学類2年)、阿部光児(比較文化学類2年)、山田啓喜(比較文化学類2年)、稗田真衣(人文学類2年)、刑部朱音(人文学類2年)、高橋日和(知識情報・図書館学類2年)

P：小川美登里(人文社会系)

活動報告

実際の活動内容

宿舍祭でのステージパフォーマンスを目指し毎週2～3回教室を使用して練習を行った。バンド形式で3～4曲練習した。

人数が揃うことがなく、宿舍祭参加を辞退した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒10%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

練習日程を決める際、全員の予定がうまく合わず、少人数で少しずつ練習していかざるを得なかった。また、実際の練習日に人数が集まらず予定通りの練習が出来なかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

前回の企画から参加している人を中心に何回か話し合いを行ったが、うまく事態を収拾できなかった。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

グループで何か目標に向かって活動を行うことの困難さを痛感した。

参加者への影響

昨年からつくば MVP に参加してくれていた人としては、これからどうしたらいいか、改善を考えてくれている。初参加の場合、終始戸惑っていた。

一度落ち着いて、肩の力を抜いて音楽を楽しめるようしばらく考えていくことが必要だと感じた。

未来のプランナーに伝えたいこと

何か一つに向かって必死に頑張ろうとする企画、あるいはステージパフォーマンスを企画として行う場合には、グループで活動していることを忘れない方が良いでしょう。メンバーそれぞれに別の学生生活があり、そこの折り合いをどうつけていくか、一緒になって考える必要があると思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

ポスターの使用や活動していく上での人脈、相談など拠点としてのメリットを感じた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3**やりたいことができた充実感がありましたか？⇒2**

● これからの大学を考える ACADEMIC CAMP! (17043A)

T-ACT プランナー 青山 俊之 (人文社会科学研究科修士課程1年)

活動目的

2020年に向けた教育改革が進む中で大学においても入試制度の変更や学部再編成といったさまざまな変革が行われている。「大学」を捉える上では、政治経済社会に加えて学術が行われてきた歴史、そして目まぐるしい速度で発展する科学技術に対するまなざしといったさまざまな観点から見る事が望ましい。そこで、本企画では便宜的に大学を「学問・地域・教育」といった3つのサブテーマに分けて、ワークショップの企画などを行う。参加者はプランナー青山が全国47都道府県を旅し、各都道府県から1名ずつ集めてきており、大学生に限らず、大学院生、教職員、さらに高校生も参加することで、分野の垣根だけではなく、地域、立場の垣根を越えた交流の場を生み出すことを目標とする。さまざまな立場の人が集うことで、一意的な考え方の声にするのではなく、これからの見据えた上で、それぞれの人が主体的に、またよりよく活動できるためのきっかけとすることを最終的な目的としている。

活動計画

▼基本情報

一般募集開始：2月15日～3月15日

実施日：3月29-30日

参加費：9,000円

※会場である里山ホテルときわ路にて宿泊する場合は、別途、参加者の皆様により里山ホテルときわ路様に直接支払っていただきます(6,500円)。

参加者：各都道府県1人のアンバサダー、北海道、長野、茨城から招待する高校生、筑波大生スタッフ、一般募集による参加者(2018年2月現在50名、80名前後を見込んでいます)

▼タイムスケジュール

【ワークショップ一日目】

13:30 開会式

14:00 WS1:これまでの「大学」を学び、考える

14:30 WS1-A:これまでの「大学×学問」を学び、考える

15:30 WS1-B:これまでの「大学×地域」を学び、考える

16:30 WS1-C:これまでの「大学×教育」を学び、考える

17:30 部屋移動

18:00 夕食

【ワークショップ二日目】

09:30 WS2:これからの大学を想像・創造する

12:00 自由時間(昼食等)

13:15 閉会式

14:00 会場発

16:30 東京着

【運営スタッフの動き】

10:00 運営スタッフAチームおよびアンバサダー集合(東京駅)

10:30 東京駅発(スタッフがレンタルしたバスにて)

11:00 運営スタッフBチーム会場入り

13:00 運営スタッフAチームおよびアンバサダー会場着

※各チームとも会場着後、準備と運営を行う

▼WS概要

会場は里山ホテルのイベント会場にて全員同じ空間で行います。基本的に分野や立場の異なる4人一組にてグループを設け、一日目には「これまでの大学」を整理するためのWSを、二日目にはグループをばらし個々の目的関心に合う人同士にて「これからの大学」を考えるためのアイデアソンを行う予定。

活動期間

平成30年2月15日～30年3月31日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：中山智仁（数理工学物質科学研究科修士課程2年）、大平拓実（国際総合学類4年）、園山明里（国際総合学類4年）、伊藤春花（体育専門学群4年）
P：井出里咲子（人文社会系）

備考

- ・『入門学術メディア Share Study』は、「人から始まる学問の見える化」を掲げ、主に高校生や大学1、2年生向けに学問の入り口となるような機会づくりを Web メディア運営を通して行っている団体として本企画のプランナーである青山が2016年から立ち上げました。（URL：<https://share-study.net/academic-camp/>）
- ・オーガナイザーの役割としては高校生へのWSにおける補助やイベント全体を通じた付き添いを行うつもりです。当日の細々とした活動の補助としても協力して頂きます。
- ・本イベントにおけるアンバサダーとは、全国47都道府県から各1人は参加して頂けるために本企画のプランナーである青山によって引き合わせられた運営スタッフです。遠方から参加して頂くことを条件に交通費の一部補助などを出すことになっており、当日においては各テーマ「学問・地域・教育」におけるWSのファシリテーターとして議論をリードして頂くことになっています。

活動報告**実際の活動内容**

80名を想定して企画したのもだったが、参加者数は40名強に留まってしまったこと、社会的な問題提起につなげることを狙って行ったものだったがそれには至らなかったこと。一方で、二日間を通じたWSで新規のアイデアが生まれ、終了後も継続した話し合いが行えていることには意義があった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒50%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

- ①参加者の活動における問題意識の差をできる限りオフラインにおけるコミュニケーションを行ったが、活動を持続的に行っていく上でオンライン上のコミュニケーションが創発的に起こせなかったこと。
- ②メンバーにおける各々の活動が重なり、準備を十全に行えなかったこと。
- ③2日を通して行ったイベントで、参加者の疲れが一日目の夜に出てしまい、思うような運営ができなかったこと

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ③に関しては、二日目に予定を変更し、合間のコミュニケーションを取る時間を設け調節したが、運営側のその意図も十全に伝えきれなかったこともやや問題となった。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

学生同士のコミュニティに限らずに、ネットワークをつなげて活動を展開するにはそれ相応の現実的な対処が必要であり、制限や制約などをかしながら行わざるを得ないことを改めて自覚したこと（その必要がなくとも問題意識を持って行動する意欲を持つ人に出会いたかったが、その能力や意志を持つ人はすでにさまざまな活動をしているか、単純にマイノリティーであるという発見を経験的に理解）

参加者への影響

アカデミックな話題で集まり、議論を交わすことの喜びと意義を認識したという意見を数多くいただけたこと。

未来のプランナーに伝えたいこと

なんのために、誰がどうして、いつ、どこで、なにを、どのようにという思考と実践の繰り返しが大事だと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

法に関する相談や、運営における雑談などを通して、企画実施に向けた姿勢を改めることができたこと

自分は何のくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

ピアサポートでつながろうーみんなで助け合えるキャンパスを目指してーPart2(17044A)

T-ACT プランナー 佐藤 ひかり (人間総合科学研究科博士前期課程1年)

活動目的

ピアサポートとは、学生同士の相互援助活動のことです。

「悩みはあるけどたいしたことないし…」 「困ってはいるけど、学生相談室に行くほどじゃないなあ…」 と、学生生活で悩みを抱えていても、相談機関を利用しにくいと感じている学生は少なくないのではないのでしょうか。

そういった方に、もっと気軽な同じ学生に相談できる場を提供するピアサポート活動は、他の多くの大学では制度として確立し、実施されています。

そういったピアサポート制度を本学にも導入することを目的として、前回の活動では、ピアサポート相談ポストの設置・運営を行い、相談ポストを通じた相談活動をはじめました。

今回の活動では、引き続きピアサポート相談ポストを運営していくとともに、本学の実情に即した新たなピアサポート活動や、ピアサポーター制度についての検討、可能なところから活動の実施を目指します。

活動計画

基本的な活動としては、ピアサポート相談ポストの運営と、今後のピアサポート活動についての話し合いを行います。そして、可能なところから実際の活動を行っていきます。

具体的には、以下のような活動を行います。

1. 定期的なミーティング (1～2週間に1回程度の会合)
2. ピアサポート相談ポストの運営 (用紙の回収、お返事、掲示)

※誹謗中傷・自傷他害など重大な問題、学生でまかなえないような相談が書き込まれていた場合の対処についてですが、相談ポストには「筑波大学ピアサポートチーム」が運営していることを明記しています。そうした、専門家ではない学生が運営していると分かった上でなお投函されたものであるならば、それは、専門家ではなく、同じ立場である学生に答えてほしいからこそ投函されたものであると思います。もちろん、まずはパートナーの先生方に対処について相談し、ご意見をいただきますが、その上でオーガナイザー複数人で相談し、できるだけ誠実によく考えてお返事を書きたいと考えています。また、何通もそういった重大な問題について投函があるようでしたら重大な問題についてはポストに投函せず、保健管理センターなどへの相談を勧めるなど注意書きを書くことなど、制限やルール決めをしようと考えています。なお、4か月相談ポストを運営して今のところ、学生でまかなえないような相談はありません。

活動場所

保健管理センターグループワーク室

活動期間

平成30年3月1日～30年8月31日

対象者

学生及び教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：本多茉莉 (人間総合科学研究科博士前期課程1年)、常盤みなみ (心理学類2年)、尾崎楓子 (心理学類2年)、山近紗也加 (心理学類2年)、三井鴻志郎 (心理学類2年)、櫻井菜月 (芸術専門学群3年)、王東皓 (システム情報工学研究科博士前期課程1年)

P：杉江征 (人間系)、田中崇恵 (人間系)、田附あえか (人間系)、慶野遥香 (人間系)

備考

必要な経費については、パートナーと相談して工面する。

活動報告

実際の活動内容

1. 定期的なミーティング (1か月に1回程度)
2. ピアサポート相談ポスト (つぶやきポスト) の運営 (2週間に1回程度話し合いを行い、お返事を書き、掲示)
※新たに行ったこととしてはご意見カード (つぶやきではなく、相談ポストに対する意見や感想を書き込む用紙。お返事はしないことを明記しています) と、バックナンバー (過去のつぶやきをコピーしアルバム

にまとめ公開)の作成を行いました。

3. ぴあのわへの参加
4. スカイプ交流会への参加
5. 運営ルールについての話し合い (新規のオーガナイザーが増えてきたので、なんのために活動を行っているのか、目的や目標、具体的な活動について、既存のオーガナイザーが説明し意思疎通を図る会を行いました)

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

・相談ポストに「死にたい」というつぶやきが一通入っており、どう対応すべきか悩みました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

まずはパートナーの先生にすぐ連絡し、一度自分たちで考えてみるようご助言いただきました。その後、オーガナイザー全員で「死にたい」というつぶやきがあったことを共有、いったん、答えを待っていただくようお返事を書き (パートナーの先生にみていただいた上で) 掲示した後、各々が一度「死にたい」に対するお返事を考え、共有しました。その上で、代表として掲示するお返事を投票で決め、パートナーの先生にみていただき、修正した上で掲示しました。それに対するリアクションは今のところありません。パートナーの先生の協力のもと、情報共有を徹底したうえで、オーガナイザーの中で話し合いを行い、早めに対応できたかと思えます。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

3月にぴあのわに参加し、他校のピアサポートチームを見たことで、自分達のチームには目標だったりルールだったり方向付けだったり、明文化されたものがないことに気が付かされました。そのころ、新しいオーガナイザーが数人参加するようになってくれたこともあり、どういう気持ちで何を目的に自分がT-ACTをはじめ、今この活動をやっているのかということを書き残して後輩に伝える機会を設けられたことは、活動を次につなげていくために、お互いにとっていい機会だったのではないかと思います。

新しいオーガナイザーが増えたことでお返事の幅も広がり、どう答えるかの話し合いも活発になったように思います。学年や所属が違うメンバー同士でもお互いの意見を率直にいえる空気で活動ができたことはいい経験になりました。

参加者への影響

ご意見カードという形で相談ポストに投函した人や見ている人からのご意見を書いてもらうアンケートのようなものをつぶやきの用紙と一緒に置いたところ、いくつか好意的なご意見をいただきました。つぶやいた方の力になれたらいいと、同じ学生の立場からお返事を書かせていただいておりますが、そのお返事がつぶやいた方の助けになれていることもある、とご意見カードから実感できました。好意的なご意見をくださった方は、つぶやきを書いた方だけでなく、見ている方もいっしょに、書いた人だけではなく見ている方の力になれている部分があるようです。

そうしたご意見をいただくことで、お返事を書いているオーガナイザーも、少しでも人の助けになれていると嬉しく元気をもらっています。そして、これからも、つぶやいた方や見ている方の力になれるお返事を書けるよう、共感し考え、積極的に話し合ういいサイクルができていくように思います。

未来のプランナーに伝えたいこと

特には思いつきません。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

Twitterでポストの更新を知らせていますが、その際、リツイートなどで相談ポストの宣伝にご協力くださりありがとうございます。今後ともよろしく願っています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒4



● グローバルにボードゲ会2018春 (17046A)

T-ACT プランナー 亀沢 和史 (工学システム学類4年)

活動目的

筑波大学グローバルビレッジコミュニティステーション2階において学生、大学教職員、留学生、地域住民等を対象にテーブルゲームで遊ぶ会（グローバルにボードゲ会）を開催することが主な目的である。

2018年2月17日にT-ACT企画として「グローバルにボードゲ会」の第一回をつくばテーブルゲーム交流協会の主催で行った。

第一回グローバルにボードゲ会では学生、大学教職員、留学生、地域住民（小学生から大人まで）と幅広い層からおおよそ30名程の参加があり盛況であった。

前回のグローバルにボードゲ会は単発の企画であったが、幅広い層の人々がテーブルゲームを通し年齢、性別、国籍に関係なく交流できる場は意義あるものであると考え、参加者からも「ぜひ継続して行ってほしい」との声があったため、定期的に「グローバルにボードゲ会」を開催していくことをつくばテーブルゲーム交流協会として決定した。

本企画は2018年に定期的に筑波大学グローバルビレッジコミュニティステーション2階で「グローバルにボードゲ会」を開催することを活動目的とする。

活動計画

筑波大学グローバルビレッジコミュニティステーション2階において学生、大学教職員、留学生、地域住民等を対象にテーブルゲームで遊ぶ会（グローバルにボードゲ会）を開催する。

イベントの運営は「第一回グローバルにボードゲ会」を踏襲して行う。

「グローバルにボードゲ会」はつくばテーブルゲーム交流協会の主催で開催し、運営、テーブルゲームの準備、テーブルゲームの紹介、説明をつくばテーブルゲーム交流協会のメンバー、および有志の参加者で行う。

スケジュール予定

- 4月上旬第二回 グローバルにボードゲ会
- 5月 第三回 グローバルにボードゲ会
- 6月 第四回 グローバルにボードゲ会
- 7月 第五回 グローバルにボードゲ会
- 8月 第六回 グローバルにボードゲ会
- 9月 第七回 グローバルにボードゲ会

活動場所

筑波大学グローバルビレッジコミュニティステーション2階

活動期間

平成30年4月1日～30年9月30日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：高野大（比較文化学類4年）、福田哲郎（比較文化学類4年）、中山香介（数理物質科学研究科博士前期課程2年）

P：及川哲平（学術情報部情報基盤課）

活動報告

実際の活動内容

筑波大学グローバルビレッジコミュニティステーション2階において学生、大学職員、留学生、地域住民等を対象にボードゲーム *1 で遊ぶ会（ボードゲ会）を「つくばテーブルゲーム交流協会 *2」の主催で数回開催した。

*1 今回の企画では主にユーロゲーム（ドイツゲーム）と言われるジャンルのボードゲームを中心に扱った。

*2 つくばテーブルゲーム交流協会

2016年12月に筑波大生の有志が集まり発足した地域ボランティア団体。

「発足から10年後の2027年までにつくば市を『テーブルゲームのまち』にすること」を目標に掲げる。つくば市内でのテーブルゲーム（ボードゲームなど）関連イベントの企画運営。

テーブルゲームが持つ魅力の発信。
テーブルゲームを用いた社会貢献活動、テーブルゲームの開発。
等の活動を行っている。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

事前の告知不足。参加者の不足。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

参加者が予定より少なかったがその分、運営スタッフが参加者に対して手厚い対応ができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

ボードゲームの持つ魅力について再認識した。イベントの広報活動の重要性を痛感した。

参加者への影響

ボードゲームを通じた地域住民と学生の交流の機会が得られた。参加者にはボードゲームの楽しさに触れていただけたと思う。

未来のプランナーに伝えたいこと

ボードゲームは楽しいですよ！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

諸々の手続きが円滑に進められた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3

● 盆 LIVE2018 (18001A)

T-ACT プランナー 小田島 実結 (比較文化学類3年)

活動目的

「つくばに集う大学生、留学生、地域の方や外国人が、お祭りを通して交流できる場をつくりたい！」という思いからスタートして、今年で第4回目の開催になります！！盆 LIVE は、日本の伝統である盆踊りとLIVEを掛け合わせた、古くて新しいエンターテインメントです。曲目は古典から、洋楽、J-POP、歌謡曲、子供、アニメ曲と多岐に渡り、音楽やアートのパフォーマンスや出店が華を添えます。誰もが気軽に参加して楽しめる、そんなお祭りを目指しつつ、つくば市のさらなる活性化や、人々の交流発展に繋げていきます。

活動計画

活動内容は、9月に開催予定のお祭りを成功させるべく、週1回ミーティングを行って、運営を進めていきます。

実行委員の仕事を大まかに分けると、以下の3つになります。

総務・・・書類や備品、会計等を担う

企画・・・踊りや演奏などのパフォーマンス、会場装飾、出店交渉、祭当日のスケジュールを考える

広報・・・SNS やピラ、ポスターなどで情報発信

【活動の流れ】

4月 新メンバー募集

関係者や団体さんへ挨拶

公園管理事務所へ挨拶

5月 企画内容を詰める

出店交渉や出演依頼（出店はキッチンカー、出演は筑波大生で音楽・芸術活動を行っている人を中心に考えています）

6月 広報活動

協賛交渉

後援申請（市役所、教育委員会）

踊りの練習開始

7月 ポスター・チラシデザイン完成・入稿

タオル・Tシャツ・うちわ発注

グローバルヴィレッジ夏祭り参加（26日）

トワイライト音楽祭への参加（28日）

消防への届け出

公園管理会社へ挨拶

当日スタッフの募集

8月 商工会青年部の方々に挨拶

常世の國祭り（11日）、刈間盆踊り大会（18日）参加

ワークショップ開催（19日）

広報活動

当日の流れ確認

9月 ワークショップ開催（1日）踊りの練習会（学生に広報して一緒に踊る、一の矢宿舎、17日）

各業務調整

MC 等台本制作・リハーサル

22日 本番開催予定。開催後、お礼・挨拶周り、報告書作成と反省

以降引き継ぎや挨拶

お祭りは研究学園公園の石畳部分を借りて行います。出店は現時点で8店舗程度を予定しています。来場数は一昨年1500人、昨年500人（台風のため）ほどだったので、今年は2000人を目指して広報していく予定です。

運営スタッフは10人程度、当日スタッフなどの協力者は20人以上を目標に集めたいと思っています。当日スタッフに関しては当日の朝から撤退（20時）までが拘束時間になります。もちろん前日準備や後片付けを手伝ってくださる方も大歓迎です！

やることは多岐に渡りますが、楽しみながら運営を進めています！

お祭りや踊りが好きな方、もっと地域の人と関わりたい、スキルを生かしたい人という方大歓迎です！！

活動場所

ミーティングは基本的に中央図書館等で行います

活動期間

平成30年4月1日～30年9月30日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：木邨弥生（比較文化学類3年）、開田健太郎（社会学類3年）、芹川瑠美（芸術専門学類2年）、阿部光多（心理学類2年）、周俊杰（システム情報工学研究科博士前期課程1年）、高野大（比較文化学類4年）、喜瀬沙織（比較文化学類4年）、福田哲郎（比較文化学類4年）、野崎凌太（比較文化学類4年）、飯村ちはる（比較文化学類4年）、高田夏子（比較文化学類1年）、荒木優里（比較文化学類1年）、岩崎良平（比較文化学類1年）、須藤恵吾（比較文化学類1年）、関口大輝（比較文化学類1年）、坂本茉優（日本語・日本文学類1年）、神原智佳（社会工学類1年）

P：木村周平（人文社会系）

備考

お祭り本番の開催予定

盆LIVE2018

日時：2017年9月22日（予備日23日）

15時～20時

場所：研究学園駅前公園

13：00 キッチンカー販売開始

15：00 パフォーマンス（お笑いサークルDONPAPA）

15：30 開会

オープニングアクト（吉瀬三日月囃保存会）

踊りの練習

16：30 パフォーマンス①

17：00 盆踊り「みんなで踊ろう☆ぼぼんが盆」

18：00 パフォーマンス②

18：40 盆踊り「踊ら NAIGHT ね☆ぼぼんが盆」

19：30 閉会

（20：00 お客様帰宅 21：00 完全撤収）

※予算は60万円程度で、現在は、筑波大学社会貢献プロジェクト等の助成金の活用を考えています。

活動報告**実際の活動内容**

2018.4 新歓活動

2018.5 新歓活動

市役所にて後援名義申請、駐車場使用依頼メインビジュアル作成開始

出店交渉開始

2018.6 消防署にて露店開設届提出おどれんの開始

ボランティア団体登録とボランティア活動保険の申し込み

2018.7 協賛交渉

うちわ・Tシャツ・タオル発注チラシ第1版完成

グローバルビレッジ夏祭り参加

2018.8 盆LIVEの中でトワイライト音楽祭を開催することが決定公園・都市整備株式会社との打ち合わせ

当日スタッフの募集開始チラシ第2版完成

常世の國祭り・苺間盆踊り大会参加

プログラム・開演後のスケジュール決定

2018.9 ポスター・チラシ最終版完成、配布開始公園周辺への挨拶

準備スケジュール作成会場図等本決定

前日準備・本番・片付け

<当日>

13：00 トワイライト音楽祭イン盆LIVE軽食販売開始

15：00 パフォーマンスお笑い集団DONPAPA

- 15:30 開会
オープニングアクト
- 16:30 パフォーマンス吉瀬三日月囃子保存会
- 17:00 盆踊り第一部「みんなで踊ろう☆ぼんが盆」
- 18:00 パフォーマンスそうらさん&飯沼くん
- 18:40 盆踊り第二部「踊ら NIGHT ね☆ぼんが盆」
- 19:30 閉会
- <出店店舗>
- アリーズ・ケバブ
- エスフーズ
- Lax
- もっくんカフェ
- 鉄板物語
- クレープソルテ



企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒85%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

多くの人間が他の活動を抱えており、またこの活動も強く参加を義務付けるものでもないため、やらなければならないことはあるのに手の空いている人間がいないことがある。それが広報の手薄さに現れる。また、負担の偏りが見られてもミーティングが少ないことで知識の共有が迅速に行われなかったため他の人が代わることができなくなってしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

解決できているかは微妙だが、オーガナイザーの人数を増やせたことで、上記の現象が起きても開催に漕ぎつけることはできた。また、Google Drive の活用で後者の解決を図りたかったがまだ不十分である。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自らの限界を知る体験。当然ではあるが、そこそこ要領よく生きてきても、1人でこの企画を成功させる手腕もなければリーダーの資質もないし、キャパシティも足りない。助けてくれる人の存在は不可欠でいつも感謝するべし。でもこうしたい!という発想や理想は捨ててはいけなくて、それをしたら自分で自分の人生をつまらなくしてるのと同義なのだと思う。

正直、私がプランナーでよかったのかはわからないが、少なくとも私は楽しかった。オーガナイザーのみんなも楽しいと思ってくれていたら十分。

参加者への影響

特に1年生は運営の面で先輩方に多くのことを教わり、かなり成長したと思う。また、もともと色々な意見を出してくれるメンバー達だったが、終了後の反省会では、いい意味で遠慮がなくなり鋭い意見もたくさん出してくれた。

最初は踊りを不思議そうな顔で教わっていたのに、本番ではキラキラとした笑顔で踊ってくれていた。

未来のプランナーに伝えたいこと

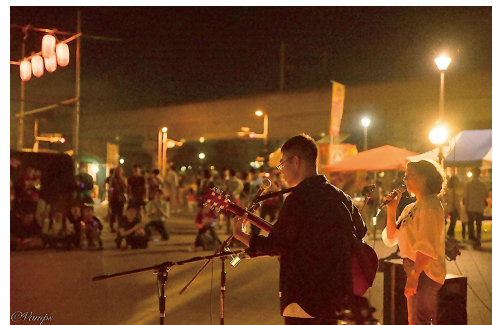
自分だけで何かを成そうと思わない。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

頻繁に場所・もの・印刷等提供していただけて本当にありがとうございました。私たちでは考え及ばなかった部分をご指摘・アドバイス頂けるのが助かりました。また実利的な面というT-ACTに認証されると学内での広報活動がぐっと楽になるのがよかったです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5



● 一瞬のプレイが一生のつながりに変わる～一緒にダーツを始めよう～ (18002A)

T-ACT プランナー 山田 裕道 (体育専門学群3年)

活動目的

筑波大学における『競技としてのダーツ』の普及と競技を通しての成長や生涯にわたる人間関係の構築

1. メンバー同士での練習会や試合を通しての技術向上
2. 外部のメジャー大会への出場やプロ資格の受検
3. 競技への向き合い方や試合に必要な精神力向上による人間力の向上

活動計画

- 4月～ メンバー募集 (目標10名)、チラシ配布や SNS を利用
 活動内容の告知用 SNS 「Facebook」「Twitter」等の立上げ
 サークルとしての組織構築
- 5月～9月 練習会開始
 ダーツプロ資格を保持する外部協力者 (店舗マネージャー) による指導
 練習日は、平日 (月～金) の17時から19時の2時間
 メンバー間のリーグ戦や大会の企画・実施
- 9月 活動報告及び正式にサークルとしての申請

活動場所

naked bar (ネイキッドバー)

つくば市天久保1-10-18

筑波大学近隣にあるダーツバー。営業時間外においての活動場所として、店舗を利用させていただける協力を得ております。

設備として、競技に必要となるダーツマシン3台。プロジェクターや音響設備もあり、会議や打ち合わせなどを行えます。

活動期間

平成30年4月1日～30年9月30日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O: 吉田悠人 (体育専門学群4年)

P: 國部雅大 (体育系)

活動報告

実際の活動内容

平日に練習会を開催

ダーツ大会への出場

ラジオ出演

勝手につくば大使への取材協力

ウォーク (株) への取材協力

STUDENT による広報活動

ポスター、SNS による広報活動

雙峰祭への出店 (予定)

プロダーツプレイヤーの輩出 (2名)

ダーツサークル化に成功

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

組織の目的、運営上のルールの理解をさせた上で行動に移してもらうための説明、リーダーシップの発揮が困難であった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

組織の目的（方向性）を揺るぎない軸として定め、それに沿って説明を行うことによって論理的で矛盾がないように運営を進めることができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

活動目的の一番のポイントは筑波大生へのダーツ文化、魅力の普及でした。この数ヶ月で多くの学生に我々の活動を知ってもらい当初の目標であった10名の加入者を達成、さらに最終目標であるサークル化にも成功したため大変有意義な活動となりました。私自信は組織の長としてダーツの上達（プロ資格取得）はもちろんのこと、リーダーシップをとる立場としての成長が出来たと感じています。

参加者への影響

ダーツがほぼ初心者の方がほとんどでしたがダーツの面白さ、魅力を少しずつ知り、現在では自主的に練習意欲を見せる者もいるほどの変化がみられました。当初は運営側の意見を受け身で聞くものがほとんどでしたが最近では自主的に運営について改善意見を出してくれる者も増え、組織としての一体感が出てきたように感じます。

未来のプランナーに伝えたいこと

運営を行うに当たって、計画を立てることの重要性を理解して欲しいと感じました。

目的と目標の違いを理解すること、目的を揺るぎないものとして設定すること、これさえ出来れば如何なる問題に直面しても目的（方向性）に沿って論理的に解決できるからです。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

T-ACT を利用することで学内でのポスター掲示や広報雑誌、ラジオなど多くの方法で宣伝を行うことが出来たので良かったと思いました。また T-ACT の先生方が相談や活動のサポートをしてくれたため円滑に活動を進めることができ、良かったと思います。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5

● 超学生団体新歓（18003A）

T-ACT プランナー 内田 麟太郎（生物資源学類3年）

活動目的

筑波大学内には数多くの学生団体が存在している。学生生活の向上を図るもの、地域の人々との関わりを作るもの、行政や企業と協力し、プランディングやイベントの企画を行うものなど、目的は様々である。

このような学生団体は活動のための人員を募集しているが、人材の分野が偏ったり、そもそも新生がその団体を知る機会が少ない。幅広い人材を得られる場があれば、団体の運営に非常に有益だろう。

そこで、筑波大学内の学生団体を集めて合同で新歓を行い、新生や「何かをやりたい」と感じている在生とマッチングをするのがこの企画の目的である。

また、学生団体が複数集まることで交流を産み、横の繋がりを強化して筑波大学の学生活動を活性化、ひいてはつくば市全体を活性化すること、新生が入学の段階でこうした団体と関わることによって、より豊かな学生生活を送れるようにすることも目的とする。

活動計画

グローバルビレッジの共用スペースにて、学生団体所属の学生がパネル展示およびスライドによるプレゼンを行う。

団体数は14団体を予定。飲食代は参加団体から出していただく。

軽食を出すことを予定している。

予算は参加団体数によって決まるので現在作成中。

宣伝は3月中ごろから開始する。ポスターを学内に貼るだけでなく、新生の学類ラインやSNS等で宣伝を行う。

【開催日時】

平成30年4月22日（日）

17:00～

【活動場所】

グローバルビレッジ共用棟2階交流スペース

活動期間

平成30年3月1日～30年4月22日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：高橋理恵子（生物資源学類3年）、東浦冴映（生物資源学類2年）、門田楊子（生物資源学類2年）

P：湯澤規子（生命環境系）

活動報告

実際の活動内容

筑波大学内の学生団体が16団体参加する合同新歓。新生が学生団体に感じているハードルを低くし、学生団体と学生を繋げることが目的である。また、これまで交流の少なかった他分野の学生団体同士の交流も深めることにより、学生団体同士の活動の活性化、ひいては筑波大学の学生活動の活性化を目指す。

当日はグローバルビレッジの交流スペースにて、各学生団体によるスライド発表、ポスター展示を行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

広報不足

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

ビラの配布、SNSでの広報

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

大きなイベントを企画するのは初めてだったので、用意や当日の動きなど、まだまだ反省すべき点が多く見つかりました。ただ、当日来てくれた人や参加団体の方など、非常に多くの方との繋がりも生まれ、自分にとっては有意義な時間、最高のイベントになったと思います。

参加者への影響

この企画を通して学生団体に入りたいと思ってくれた人がいたと、複数の団体から報告をいただきました。

未来のプランナーに伝えたいこと

広報が最も重要視すべきことだと思います。いかにイベントに来てもらうか、いかに手伝ってくれる仲間を集めるか、それがイベントの失敗成功を決めると思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

ポスターの印刷、看板等の備品の貸し出しなど、とても手厚い補助をしていただきました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5**やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4**

● 大人になってから生きづらくなる「児童虐待」を考える講演会を開きたい (18004A)

T-ACT プランナー 山口 和紀 (障害科学類2年)

活動目的

※はじめに※

この企画は「児童虐待」をテーマに扱う企画です。精神的にストレスを感じることもあるかもしれません。その場合は無理をせず、読み進めることを中断されるようお願いいたします。

この企画では児童虐待を考える講演会を開きます。児童虐待は日本社会が解決しなければならない大きな問題の一つです。

平成28年に全国210ヵ所の児童相談所が扱った児童虐待の件数は、12万2578件という非常に大きなものでした。この数字は児童相談所が扱った件数、つまり認知された件数に限られたものです。したがって、実際には、この数倍の児童虐待が誰にも分からないようなところで起きていると考えることが出来るでしょう。これは日本社会において非常に大きな問題だと言わざるを得ません。

私はこの問題をどうにか解決しなければならないと危機感を持っています。この問題を解決するために、今回は今一生さんを講師としてお招きし、児童虐待についての講演会を行って頂きます。今一生さんは2017年に『日本一醜い親への手紙 そんな親なら捨てちゃえば?』を編著者という立場で作りあげられました。この本は1997年に同様に出版された『日本一醜い親へ手紙』の続編という位置づけです。このように、今一生さんは20年間に渡って虐待をテーマに活動をされてきました。

児童虐待の問題を「虐待する親が悪い」と、親に責任を帰すことは簡単なことです。しかし、実際には「社会構造」にも問題があります。例えば、児童虐待の要因として「育児不安」があると言われます。「育児不安」はその親だけに責任があるのでしょうか。きっと、違うはずですが。育児不安を持つ親を孤立させず一緒に子育てをしていくことは社会の役割です。社会の役割が機能しておらず、親の育児不安を助長し、虐待が発生してしまったと考える方が妥当です。社会構造に問題があり、それが原因で虐待が発生している側面があるということです。このことから、社会構造を変えなければ児童虐待の問題は無くならないと考えることが出来ます。

上記の通り、児童虐待を日本から無くすために「社会構造」そのものを変えていかなければなりません。そして少しでも社会構造をいい方向に変えていくために、より多くの人に児童虐待の現状を伝えるべきです。日本の有権者数は1億人程度です。その中の10分の1の人数にあたる1千万人に児童虐待に対して危機感を持ってもらえれば、法律をはじめとした社会の仕組みを変えることが確実にできるでしょう。そこまでいかずとも、一人でも多くの人に児童虐待の現実を知ってもらうことが、社会をいい方向へ動かすために必要なことだと考えます。それに加えて、講演会の参加者には、その現状についての理解も安易なものではなく、深い理解をしていただきたいと考えています。そのために講師である今氏には、二つのテーマに絞って話をさせていただきます。

一つ目は「大人になっても児童虐待で苦しむ人は多い」というテーマです。児童虐待は大人になっても苦しみが続くことがあります。大人になって親から離れれば、虐待からは解放されるでしょう。ですが、その苦しみからは解放されないことも多いのです。中には大人になってから「自分は虐待された。」と気が付く人もいます。その数は決して少ないものではありません。中には生きづらさを抱えたまま、そのことに気が付かない人もいます。私はこれを大きな問題だと捉えています。今氏には講演会でまずこのことを扱っていただきます。

参加者の皆さんには、大人になってから児童虐待で苦しむ人は多いということを知ってもらいたいと考えています。このことを知ってもらいたいというのが今回の講演会の目的になります。しかし、自分の生きづらさの正体は「虐待」が原因であったと考えるようになるひともいるかもしれないと考えています。今回の講演会は「虐待が自分の生きづらさの原因である」と考えるようになるを目的にしたものではありませんが、そのこと自体は良いことだと考えています。自分が受けていた虐待に気が付くことには大きなメリットがあるはずですが。それは自分の生きづらさに「対処」できるようになるというものです。例えば、自助グループに参加して少しずつ問題に向き合うなどということも可能になるでしょう。もし、それに気が付かないままであれば、なんとなく生きづらさを抱えたまま生きていくこととなります。モヤモヤとした「対処」のしようがない生きづらさです。この問題を解消できるというのはメリットと言えるでしょう。ただし、これは会の運営において精神保健上の必要な配慮を行わなければ、生じるデメリットが大きすぎると言わざるを得ません。この点については、具体的な活動計画欄において後述します。

二つ目のテーマは「ソーシャルビジネス」です。「環境・貧困などの社会的課題の解決を図るための取り組みを持続可能な事業として展開すること。」と定義されます。私は、小中高と教育を受けてくるなかで、「ソーシャルビジネス」というものに触れたことはありませんでした。ほとんどの方もきっとそうだと思います。社会企業は「どれだけ社会にいい影響を与えられたか。」を活動の成功の物差しにします。「ビジネス」と「福祉」を融合したような形と捉えてください。このようなソーシャルビジネスの例を交えて、「児童虐待」をどう解決するかを、今一生さんにはお話しさせていただきます。

現在の日本社会には大きな問題が山積しています。その中でも児童虐待は大きな問題です。私は児童虐待をこの日本から無くしたいと考えています。講師の今氏も危機感を持って児童虐待の問題に取り組んでいます。今回

の講演会で学んだことはきっと皆さんの役に立つでしょう。そして、参加者の皆さんそれぞれが社会問題の解決に向けて、一歩を踏み出すための起爆剤になればうれしい限りです。

活動計画

【活動の内容】 「児童虐待」を考える講演会を行う

【日時】 平成30年 5月12日・13日

【場所】 Tsukuba Place Lab

【予想来場者数】 総計25人

【講師】 今一生

具体的な内容

・上記のイベントにかかわる費用の捻出（詳しくは、予算書に記載してあります。）

・広報

など

【企画の実施上必要な配慮について】

「児童虐待」を扱う以上は、参加者の精神保健上の配慮を欠かすことができません。特に被虐待者であれば「フラッシュバック」が起きてしまうこともあるかもしれません。また、講演を聞く中で自分が虐待されていたということに気が付く人がいるかもしれません。そのことがその人の心を深く傷つけてしまう恐れもあります。これらのリスクについて、現時点で考えうる配慮を下に記します。

私は、「意図しない気づき」への配慮の必要性が最も高いと考えます。「意図しない気づき」とは、先述のように「自分の生きづらさの原因が虐待であったと考えるようになる」ことを指します。これは参加者にかなりの精神的ショックを与える可能性があります。これに対しては、ポスターやチラシといった広報の段階で精神的なショックを感じることがあるかもしれないと書き、それを周知します。また、虐待に興味がある人をターゲットに絞った宣伝の方法をとります。わかりやすく言えば、「軽い」感じではなく、「重い」会であることが分かるような形です。これによって、「虐待」に興味がある人や、もしかしたら自分が虐待されていたかもしれないと既に気が付いている層がメインの参加者になるはずですが、これは「意図しない気づき」をある程度防止する役目を果たすはずだと考えます。

次に、会の運営すべてに共通する配慮です。今回の講演会は「虐待」という精神的にストレスの大きいテーマを扱います。虐待されていなかったような人の心にも大きなストレスやショックを与えてしまうことがあるかもしれません。このリスクに対する配慮として、心の準備が出来ていない状態で、いきなり重い話をされるということが最大限少なくなるような運営や広報を行います。例えば先ほどと同様に、チラシやポスターの段階で「精神的にストレスがかかる重い話をしますよ。」ということは周知します。会場でも講演会を始める前に「精神的に大きなストレスを感じる可能性がある」ということはしっかりと参加者の皆さんにお伝えします。これによってある程度、心の準備をした状態で講演が聞けるのではないかと考えます。

講演会の広報や始まる前の段階で考えうる限りの配慮をしたとしても、講演会の最中に大きなストレスを感じてしまう人もいるかもしれません。そのような場合にもすぐにその場から逃げ出せるような工夫をするべきだと考えます。もし、講演会の最中に抜け出したくなれば、すぐに抜け出せるように「気分が悪くなったらスタッフに声をかけてください。」などと参加者への周知を徹底するというのがまず考えられる策です。

「虐待」というテーマを扱う以上、講演会の前やその最中だけ配慮をして終わりということではできません。講演会の後のことも真剣に考える必要があります。なぜなら、やはり精神的にストレスのかかるテーマでありそれが悪いほうに向かってしまう可能性があるからです。具体的には、フラッシュバックを引き起こす可能性や、精神的に落ち込んでしまう可能性などが考えられるはずですが、このリスクへの対策については、筑波大生の参加者には保健管理センターの「精神保健相談」の連絡先を渡します。筑波大学外の参加者には、心の相談ダイヤルなどの紹介をします。（ただし、各関係機関には現時点では承諾は得ていません。今後、承諾を得る予定です。）

以上が現時点で具体的にならされている策です。開催までの間にさらなる対策を講じるために、専門家に相談するなどの努力も継続していきます。

活動場所

イベント

Tsukuba Place Lab（〒305-0005茨城県つくば市天久保3丁目21-3 2階）

通常の活動

- ①人間学群ラウンジ
- ②T-ACT フォーラム

活動期間

平成30年2月17日～30年5月13日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：尾崎柊子（障害科学類 1 年）、高野惣一（障害科学類 2 年）、西航生（障害科学類 2 年）、中村惇之介（障害科学類 2 年）、中村初音（障害科学類 2 年）、湯本智美（障害科学類 2 年）、三井鴻志郎（心理学類 2 年）、江崎友磨（心理学類 2 年）

P：大村美保（人間系）

活動報告**実際の活動内容**

大人になってから生きづらくなるをテーマに児童虐待の講演会を実施

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

イベントを企画して実施したことがなかったので何をどうするか、暗中模索だった。また最も苦心したのは参加者を集めることだった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

黒田先生を始め T-ACT の皆さんに手助けを頂いて、企画・実施ともになんとか乗り切った。参加者集めはチラシを配ったり、ポスターを張ったりといろいろしてはみたが、もっとも効果があったのは SNS での宣伝だったようだ。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

最も良かったことはいろいろな人と話が出来たことだと思う。講師の今一生さんとは特に深い話が出来て良かった。詳しくは書けないが、虐待に興味関心を持って活動している弁護士の方や、ソーシャルビジネスの枠組みで就労支援を行おうとしている院生の先輩と話をすることが出来た。これは貴重な体験になったと感じる。

参加者への影響

運営した仲間とは仲良くなれた。また、互いに考えていることが分かったので今後、なにかをするときに協力しあえる関係になれたと感じる。

未来のプランナーに伝えたいことが

普通なことをやっても面白くないと思うので、どうせなら派手に面白い企画をやってみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

良かったと感じたのは企画実施に必要なものがほとんどそろっていることです。また、黒田先生をはじめとする T-ACT の皆さんのサポートも心強いです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

“Everyday Tsukuba Project” ～写真で迎える筑波大学～ (18005A)

T-ACT プランナー 古畑 翼 (比較文化学類4年)

活動目的

私は普段筑波大学の同窓交流を活性化させる学生団体で活動している。

卒業後、あまり大学との接点を持たなかったり、大学の情報について関心が無かったりする OBOG に、どのように大学に振り向いてもらおうか考えているときに、以下の記事を見たことがきっかけでこの企画を着想した。

ニューズウィーク日本版 2018年3月9日「日本の写真は『自撮り、食べ物、可愛いペットが多い』」

< <https://www.newsweekjapan.jp/stories/culture/2018/03/post-9697.php> >より

記事によると、Everyday プロジェクトというものがあり、それはインスタグラムの Everyday Africa から始まった。日常を通してステレオタイプでない人々の生活と物語を伝えていくものであり、また各国の「観光局推薦」的でない写真を中心にしたドキュメントであるという。また、それに乗っかって最近スタートした「Everyday Japan Chronicle」は、日本の写真を時系列順に並べて公開したものだという。

このように、様々な年代の筑波大学や大学周辺(飲食店など)の写真を集めて公開したら、懐かしく感じて大学時代の思い出や大学への興味が蘇る OBOG が増えるのではないかと考えた。入れ替わりの激しいつくばの町並みは、たとえ「『観光局推薦』的でない」何気ない一枚であっても十分インパクトを与えるし、どの年代に大学に所属していたかで反応が異なるという面白さもある。

これにより、OBOG にノスタルジアを与え、筑波大学への「心理的な里帰り」を誘発することが目標である。また、学園祭や同窓会への参加などの物理的な「里帰り」にも繋がれば尚良いと思っている。

また、1枚の写真を通して抱く印象は年代によって当然異なる。SNS 上で写真を公開すれば、コメントを交わすことによって年代の異なる同窓生たちが筑波大学の歴史やお互いの物語を迎えることが出来る。こうした同窓交流の新たな形を実現することもひとつの趣旨である。

活動計画

- ①筑波大学開学当初から大学に勤めている人や、大学周辺に住んでいる人のなかで、移り変わりの激しい街並み・大学の写真を集めている「収集家」や、写真好きの学生、大学新聞、OB/OG の力を借りて写真を集める。
- ②集めた写真は Instagram のアカウントを開設し、「#everydaytsukuba」を付けて投稿する。
- ③投稿は、オーガナイザーだけでなく、アカウントを共有して多くの協力がそれぞれ自分でもできるようにする。
- ④最後に展覧会を行う。

企画の趣旨の一つである写真を通じた同窓交流を実現するために、展覧会は近隣の OBOG を招いた交流サロンと同時に行う。懐かしい写真をひとつのコンテンツとして、同窓の和が OBOG 相互や学生との間に広がることを期待する。

活動場所

展覧会は、OBOG が公共交通機関を使って参加できるように、アクセスの良いグローバルビレッジを使用しに行く。(9月4日現在集会願を支援室に提出済)

活動期間 2018年5月1日～2018年9月30日

対象者

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：和田桃乃(システム情報工学研究科博士前期課程2年)、鈴木祐悟(物理学類4年)、福田哲郎(比較文化学類4年)、天野夏織(芸術専門学群3年)、須藤優実(看護学類3年)、石山智隆(比較文化学類3年)、安部健司(比較文化学類3年)、有野航太(比較文化学類3年)、長部世理菜(比較文化学類2年)

P：小屋一平(グローバル・commons機構)

活動報告

実際の活動内容

様々な年代の筑波大学や大学周辺の写真を集め、SNS (instagram、Facebook、Twitter) で公開した。写真の内訳は大学内の写真が圧倒的だった。収集元は主に大学 OB、パートナー、現役学生、留学生、大学広報室。中には1期生で、開学当初の貴重な写真を多数提供していただいた方もおり、各種 SNS にて大きな反響が寄せられた。コメント欄で卒業生同士の会話が生まれただけでなく、投稿した写真について、自分たちも把握していなかった情報を卒業生からのコメントで知ることが出来た。一方、大学周辺の街並みや店舗についての写真は少数

に留まった。

9/29に活動の集大成として、グローバル・ビレッジにて写真展を行い、筑波大生、大学OBOG、大学職員合わせて20名程度が互いに写真を通して交流する機会となった。先述した1期生のOBにも参加していただいたが、その方は十数年ぶりにつくばを訪れたと言っており、企画目的として掲げた「物理的里帰り」の例の一つ実現することが出来た。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ・写真の提供元が限られてしまい、やや投稿が停滞してしまった。
- ・「写真を掲載するにあたって許可は取れているのか？」との指摘を受けた。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・繰り返し写真の提供をSNS上で呼びかけた他、施設部、広報室、大学新聞等、学内の公的機関や他団体にも積極的にアプローチした。結果、広報室から写真の提供を受けただけでなく、大学公式instagram「@university_of_tsukuba」に#everydaytsukubaをつけて写真を投稿していただいた。
- ・写真の持つ光の力（遠くに居ても「心理的里帰り」ができる、卒業生の思い出を想起させる、等）だけでなく、影の役割にも注目しなければならない必要性を改めて認識できた。使用する写真については十分吟味することとし、学内写真については大学公認の一般活動団体として責任を持って現状通り投稿、学外写真については関係各所に問い合わせることとした。（TXについては、関係者より「外観の写真を投稿する分にはこちらで制限をかけることが出来ないので掲載することは構わない。構内の写真を載せたい場合はひと声かけてくれればよい」との回答を得た。）

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自分がふと思いついて実行した企画を通じて色々な方から反響が寄せられ、実際に現役学生と卒業生、卒業生同士が結びつく体験を実現でき、自分が思っていたよりも高い影響力を持つ企画であったことを実感した。同時に自分にとっても筑波大学の歴史やなりたち、私たちの「いま」がどのように形作られてきたのかを学ぶ事のできる機会となった。その他、写真提供者の方との交流やチラシを自分自身慣れない「Illustrator」を使用して作成したことを通じてクリエイターへのリスペクトを表すことの重要性を痛感した。

反省としては、最後の写真展が準備不足であり、またスタッフの数も限られていたということもあって写真展運営者のオーガナイザーにかなり負担をかけてしまった。将来に渡って継続する企画にするために運営する側が疲弊しない努力をプランナーとして実践しなければならなかった。

参加者への影響

昔の学内写真と現在の姿を比較するためにオーガナイザーと実施した撮影会にて、今とは変わりつつ、面影を残した昔の筑波大学の写真を見て感動し、笑顔になる姿を見て、今も昔も学生に愛される筑波大学と現役学生を写真が繋いでくれたような気がした。

写真展の自由懇談時間にて、実際に卒業生同士、学生と卒業生が写真を通じて結び付けられ、そこから新たな企画やアイデアの芽が生まれる姿を見ることが出来た。先述のように、1期生のOBは十数年ぶりにつくばを訪れたと言い、「つくばも変わったね」と笑顔で声をかけていただいたのが印象的だった。

未来のプランナーに伝えたいこと

企画に参加してくれた全ての人を笑顔にする努力を惜しまないでください。それだけで必ず良い企画になります。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

写真展用の写真印刷、当日の物品貸出といった物資的な部分でも大いに助けていただいたが、黒田先生より広報の仕方、写真使用の留意点、団体としての運営方法等、企画の全面的な助言、指導を受けられたことは今後の団体運営にも確実に繋がる良い機会となった。また、サポーターや他企画のプランナーとの交流を通じて企画のファンを獲得することが出来た。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

教材作成プロジェクト～text tree～ (18006A)

T-ACT プランナー 石川 美穂 (教育研究科修士課程1年)

活動目的

学習者の意欲関心を促進するような教材をカードにし、この教材カードを使った教授方法等を検討し、教材開発を進めていきたい。

8月、9月に一般向けに実践・発表を行う予定でいる。

活動計画

- ・教材作成会
7月中毎週水曜日12時半～15時半
教材作成、ミーティング等
- ・8月4日 d-lab2018ラウンドテーブルにて発表
- ・9月22日教材作成フォーラム開催予定

活動場所

教材作成会→筑波大学中央図書館セミナー室 D
d-lab2018→8月4日聖心グローバルプラザ
教材作成フォーラム→9月22日 bivi つくばにて開催予定

活動期間

平成30年4月28日～30年9月30日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：谷崎瑞穂 (教育研究科修士課程1年)、永野恭子 (人文社会科学研究科博士前期課程1年)、川村理絵 (教育研究科修士課程1年)
P：野村港二 (生命環境系)

備考

開発教育全国研究集会に参加される人は参加費4000円と各自現地までの交通費を負担して頂きます。

活動報告

実際の活動内容

教材作成研究会の実施
現職教員を講師に招いての教材研究会
d-lab に向けての準備
開発教育協会主催 d-lab2018ラウンドテーブルに参加

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

参加者のニーズが教材を知りたいことにあり、作りたいと思う人が少なかったため、結局教材作成よりも勉強会の機会をつくる方が主流になってしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

上記のように当初とは主旨を少し変更したが、d-lab の発表には当選していたので私自身の最後の目標値はぶれずにすんだ。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

何回か研究会を開いたり d-lab での発表を通じて交流や視野が広がったり教材作成における今後の課題も得ることができた。

研究会でも勉強会のような私が主導で行うものは上手くいったが、実際に作成してもらうといったこちらが主導でないものを動かすのが難しいと感じた。

一緒に活動はしなかったが、他にも独自で教材作成をしているという人が声をかけてくれたりして交流の幅が広がったこと。

参加者への影響

教材を作成する上での問題点を共有できた。

今後は個人的に連携をとり、もっと活動の規模を大きくしていきたいと考える。

未来のプランナーに伝えたいこと

T-ACT は活動の土台かと思います。ここでの活動が終着点と思わず、色々試してみると良いと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

コピー代金がかからない。

活動しなくてはと思う原動力。

とりあえずやってみたという学生の達成感。

思った以上に T-ACT の知名度があまり高くなく、事務室をはじめ学生にもまず T-ACT とは何？というところから毎回説明しなければならなかったのもう少し学内に浸透させておいて貰えた方がやりやすかったかもしれない。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3

● 人つくば～人文学系有志発表会～（18007A）

T-ACT プランナー 片山 千波（人文学類2年）

活動目的

- ・人文学類内での主専攻内外の繋がりが弱いので、他専攻でも参加・聴講しやすい形の他分野を学ぶ学友との交流を深める発表会をすることでお互いを錬磨していきたいと思ったため。
- ・上記に加えて、個別性が高い研究をしていることの多い人文系学生間で、他分野を学ぶことで新たな方向性を見つめる足掛かりがあればよいと思ったため。

活動計画

- ・専攻ごとに分かれた専門性の高い個別の発表会の運営（各専攻の発表会の時期が被らないように、企画承認後からおよそ一か月ごとの周期で開催したい）
- ・人文学類としての発表会、また日本語・日本文化学類、比較文化学類と合同で行う人文・文化学群横断の発表会企画の運営（上記の企画に被らない時期での開催が好ましい。春 ABC モジュール後）

◎発表会の形式について

発表制限時間のなかで各発表者が自分の専門分野についてまとめてきた内容について発表する。制限時間内であれば、自分の原稿の研究発表でも自分の研究対象の魅力の紹介でも可。という形式。

◎参加者・登壇者の区別について

登壇者は原則各専攻内（学類企画の場合は学類内、学群企画では学群内）に限るものとし、参加者（聴講者）には制限を設けず、専攻外・他学類でも来場しやすいような雰囲気づくりをする予定。

活動場所

- ・1C210/310や1D201/204のような第一エリアの大教室、および2A411/412

活動期間

平成30年4月25日～30年10月25日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：岩瀬冴衣（人文学類3年）、丸小野社太（人文学類2年）、清水秀馬（知識情報・図書館学類2年）
P：土井裕人（人文社会系）

備考

- ・予定希望人数・最低必要人数は一度の集会に集まる人数を想定したものです。
- ・活動日時は主に休日の日中から開始し、なるべく終了時刻が遅くならないようにする。

活動報告

実際の活動内容

4月28日「第一回歴つくば」

5月27日「第一回言つくば」

6月9日「第二回哲つくば」

7月7日「人つくばの休み時間」

7月22日「第二回歴つくば」

11月2～4日「ひとつつくば（雙峰祭企画展示）」

を実施。それぞれの企画ごとに主催者を立て、独自性を出して行った。

・歴つくば

ある程度時間に余裕を持たせ、一人一人がゆったりと発表できるような体系化を図った。第一回、第二回のスパンを短くし、登壇のニーズにこたえる工夫もなされた。歴史学の用語の共有は、歴史学徒同士でも時代が異なると図りづらくなる部分があるので、その問題点をどの様に解消していくかの場づくりが今後の目標だと考えられる。

・言つくば

言語学に関する登壇者を募り、様々なアプローチ（辞書の紹介、留学先からのビデオ発表等）によって他の分野にはない多様性を示した。第一回の運営の中心は現在三年生の学生であったため、今後どのように開催をつなげていくかが課題であると考えられる。



・哲つくば

哲学の性質をいかし、文系に留まらない登壇者（数学・工学・生物学等）を招いて実施した。短い時間で感覚を共有する部門と長い時間で専門性を深める部門をつくることでメリハリをつけた。学問分野の多様性を維持しながら、学術性をどのように高めていくのが今後の課題であると考えられる。

・人文つくばの休み時間

「テーマ」を決めて、それに合わせた発表を複数の学問から行うことで言語学・哲学・歴史学の三者を含めた包括的な立場を確立させた。参加者と発表者が意見を交わす時間を設けることで、双方向コミュニケーションを可能とした。第二回でどの様の方針組みをしていくかが今後の課題になる。

・ひとつくば（雙峰祭企画展示）

人文社会学系の学生・院生の研究論文集「雙峰論叢」の配布。ポスター展示。研究に関係する本等をキャプション付きで展示した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

プランナーとオーガナイザの連携。

また、ひとつの企画として申請をしているので方向性（実施方法やコンセプト）をどこまですり合わせるか。集客、特に登壇・発表・寄稿者の人員募集方法

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

プランナーとオーガナイザーは無理に連携を図りすぎず、緩い連携を取った。

コンセプトは、ある程度（人文社会学系の学問の周知と共有）だけは念頭に置きつつも、それ以外の点に関しては個性を重要視した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

色々な人に関わる機会になったと考えます。それは、自分の企画に登壇してくださる方もそうですし、「面白そうだったので参加しました」というような方との交流、卒業生の方からの応援メールをいただいたり、また、他の〇〇つくばという形式で企画を立ち上げる方々との交流が増えたように感じました。それは、新しい人とあまり関わりたくないと考えてしまう自分にとっては、ある種の苦痛である部分もありましたし、特に、同じ系統の企画を立ち上げる方々と多少の確執を一方的に感じてしまう場面もありました。しかし、それもまた社会の縮図を感じる機会。という仰々しい言い回しになってしまっていますが、人間関係をどのように築くのか、どのように感情を処理すればよいのかを考える機会になったと思います。

また、個々人の価値観を知ることができたのも勉強になったと思います。それは特に学問や研究に対しての価値観ですが、個々の学問が独立していると考える人や、学生の研究に対してネガティブな感情をいただく方がいることを知ることができました。そのような方々にどのようにアプローチをしていくか、むしろ、それは間違った考え方なのかということにも目を向けていきたいです。

参加者への影響

理系の方から文系学問がどのようなことをしているのかわからなかったが、少し触れることができた。とはなしてくれた。運営側は企画力よりも、トラブルシューティング能力が上がったように思われる。

とっさのトラブルを納める能力というのはなかなか鍛えることができないものなので、善い機会になったと思う。

未来のプランナーに伝えたいこと

あらゆる能力が付くと思います。自分が思ってもみない意見が寄せられて視野を広げるには企画を作ることが一番最適解かもしれません。そんな人たちとの交流関係が広がるので、いろんなことにチャレンジできると良いと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

T-act 自体のシステムを上手く使うことができたかどうかは自分の今後の課題であるが、T-act を使用することで、活動に対して真剣に向き合うことができたと思う（途中で物事を投げだしてしまうことがおおいので、そうならなかったのは「T-act を利用している」という気持ちがあったからだと考える）。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● 学内でフードバンク活動を手伝いませんか？ (18009A)

T-ACT プランナー 緒方 圭輔 (生物資源学類2年)

活動目的

フードバンクとは、まだ食べられるのに、さまざまな理由で捨ててしまう食品を食べ物に困っている施設や人に届ける活動のことである。現在日本にはフードバンク活動を行っている団体は100以上あり、もちろん茨城県にも「フードバンク茨城」という NPO 法人が存在するが、その存在も活動もあまり知られていないのが現状である。

今回の企画では、フードバンク活動に貢献すると共に、大学生という若い世代からの認知度を高める目的で、学内で実際にフードバンク活動を行いたい。そこで、フードバンク茨城にご協力をいただき、「きずな BOX」というものを学内に設置したい。きずな BOX とは、フードバンク茨城に寄付する食品（常温保存が可能かつ賞味期限が2か月以上のものに限る）を集める回収ボックスである。その申請方法の相談や設置後の宣伝等の活動を、T-ACT の力を借りて行いたいと考えている。

活動計画

きずな BOX について大学に説明し、活動の概要と目的を理解してもらう。
そのために

- ・すでにきずな BOX を設置している施設に管理の現状を聞いてみる。
→基本的には電話でお話を伺う。直接施設に出向くことがあれば、交通手段は自転車にすること、夜21時までは家にかえるようにすること、また出先で怪我などしてしまった場合には応急処置をするまたは病院に連絡をすることなどに留意する。
- ・学生にとってきずな BOX は需要があるのかアンケートで調べる。
→アンケートではあらかじめきずな BOX の説明をしておく。質問の項目は①フードバンク茨城を知っているかどうか、②きずな BOX を知っているかどうか、③学内にきずな BOX を置くことに賛成か否か、④もし学内に置くのであればどこに置くのがいいと思うか（記述）の4点。
- ・実際の管理体制について検討する。
→食品の集まったきずな BOX の回収を、フードバンク茨城に依頼する連絡はプランナーとオーガナイザーで担う。大学には最低限の監視と、フードバンク茨城に提出するきずな BOX 設置の申請書の送付をお願いする方針で進める。
- ・設置が決定したあとはポスターや SNS、学内メディアなどを活用し、活動の宣伝と利用の推進を図る。

活動場所

こういった企画を扱っている学内の部署。
実際にきずな BOX の設置を考えているのは学生控室、中央図書館、宿舎の共同利用センターなど。

活動期間

平成30年3月23日～30年8月3日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：宮竹千晶（生物資源学類2年）、馬場由佳（生物資源学類2年）、水木陽菜（生物資源学類2年）、北島佳奈（生物資源学類2年）、泉沢遙（生物資源学類2年）、門田楊子（生物資源学類2年）、内田早紀（生物資源学類2年）、吉川枝里（生物資源学類1年）、松浦奈々帆（生物資源学類1年）
P：源川拓磨（環境工学系）

活動報告

実際の活動内容

フードバンク茨城が県内で設置を進めている食品回収ボックス「きずな BOX」の設置申請までを行った。大学のどの機関に話せばよいか、どう話せばよいかなどを T-ACT にサポートしてもらいながら進めた。ただ、実際に設置するまでには及ばなかった。これからも引き続き続けていく。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒40%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

オーガナイザーに企画の共有をするタイミングが遅かった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

少しずつ進度を共有するようにした。次にどう動くかなど、オーガナイザーからも意見を取り入れた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

複数人から意見を取り入れることの大切さを今更ながら強く感じた。自分に今までなかった視点が生まれることもあるし、そのほうが結局よい形になることが多い。

参加者への影響

なし。

未来のプランナーに伝えたいこと

やはり相談はプロにすべし。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

さまざまな活動の企画を手伝うプロの方々なので、本当に多くを学ばせてもらった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3

● あおぞら絵画遠足～日本を描きに出かけよう！～ (18010A)

T-ACT プランナー 大森 春歌 (芸術専門学群1年)

活動目的

私は、高校時代に有志を募って10人前後の写生会を企画し、約1年半で10回の開催を実現させました。この写生会は、画力向上を目的として始めたものですが、会を重ねるごとにメンバー同士の交流が生まれ、絵を描くことを通して得る出会いの価値の大きさも実感できる機会となりました。各々の熱意が広がり、学年を超えた交流、活発な意見交換、意識向上の場として成長し、仲間とのつながりも深まり、地元の方などと交流する機会にもなったのです。

運営側は開催地の検討やしおりの作成、企画などで美術を使った人と人とのつなぎ方を模索することができ、参加者は新たな画材を使って、普段とは異なる表現に挑戦したり、1日中作品と自分の意思で向き合うことで新鮮な感動や充実感を味わえたりしました。これらは私たちにできる、遠足の開催という方法で芸術に主体的に関わったからこそ得られたものであると思います。

そして現在、その中心メンバーだった7人が、京都、尾道、徳島、沖縄、岡山など全国各地の大学に散らばっています。そこで、各々の大学でそれぞれ仲間を集め、他大学合同の写生会を実現させたいと考えています。ただ絵を描きに旅行に行くのではなく、写生会という場が、人々の交流をうみ、アートが、各々の参加者の世界を広げるツールになる事を目的としています。しかしそのような規模の開催にあたっては、どのような準備が必要で、どうすれば、参加者にとって有意義なものになるのか、正直よくわかりません。そこで、T-ACTのお力をお借りしたいのです。

活動計画

・スケジュール

《1日目》

- 10:00 京都駅に集合
- 10:08 電車乗車《烏丸線 国際会館行き ② 京都駅～四条駅 3分 210円》
- 10:17 KAEDE GUEST HOUSE 到着 荷物を預ける
- 10:37 バス乗車《市営バス 錦林車庫行き 四条高倉～錦林車庫 5分 230円》
- 11:02 バス停着。徒歩で昼食（お蕎麦屋さん「そば処越後」）へ
- 12:00 昼食後、哲学の道へ。諸説明
- 12:30 グループに分かれ、各自写生（随時パノラマ作品制作）in 哲学の道
- 17:00 再集合（バス停「法然院町」かな）
- 17:19 徒歩で夕食（湯豆腐屋さん「通りゃんせ」）到着「湯葉巻き御前」
- 19:01 《市営バス 京都外大行き 銀閣寺前～四条高倉 24分 230円》
- 19:31 宿泊施設（「KAEDE GUEST HOUSE」）に到着。
- 20:00 共有スペースに集まる（パノラマ発表・作品共有・情報交換）
- 21:30 解散、1日目終了

《2日目》

- 7:00 集合
《徒歩にて鴨川へ（道中、コンビニなどで朝ごはん調達）》
- 7:30 鴨川のほとりで朝ピクニック
- 8:02 出発
《祇園四条駅～蹴上駅 京都本線 2分、山上駅乗り換え東西線 4分 360円》
- 8:23 南禅寺到着、庭園を見学
- 10:00 各自プチ写生
- 12:00 一旦集合、グループごとにまとまって河原町へ
～河原町周辺で食べ歩き&お土産タイム～（マップをしおりに掲載）各自疎水へ
- 14:00 琵琶湖疎水にて写生
- 16:30 集合（場所未定）・解散式
《徒歩 1～2分》
- 17:00 蹴上駅。集合・解散

・パノラマ企画について

～流れ～

哲学の道で班に分かれる→班ごとに自由に写生スポットへ→4時間半の間のどこかで班ごとにパノラマ企画を実施（→外向きの輪になって1人1人写生をする→約30分くらいで完成）→他の場所で写生→20時から「KAEDE GUEST HOUSE」の共有スペースに作品を持ち寄る→班ごとに作品をつなげて発表、共有

- *当初と予定を変更しグループごとに実施。
- *写生時間内ならどこでいつ行っても構わない。
- *画材、紙の素材、大きさは自由。つなげ方も各班自由。
- ・予算：計7390円位（交通820円、宿2070円、銭湯430円）
+各自お土産代、京都までの往復の旅費
- ・現在の参加者：筑波（5）、京都（6）、岡山（4）、尾道（3）、神奈川（1）計18人

活動場所

- ・場所：東山（①哲学の道 ②南禅寺→琵琶湖疎水）

哲学の道

東山山麓の若王子神社付近から銀閣寺まで続く疎水沿いの遊歩道。自然を感じられ、休憩場所も充実している。混まずに京都を堪能できる穴場。京都駅からバスが電車で30分程度

南禅寺

枯山水の庭園である「方丈庭園」、疎水の水路閣、京都市内を一望できる「三門」など、名所が多くある。三門の楼上には狩野派の天神屋鳳凰が描かれている。水を使った絵の具の使用は一部、禁止の場所も。

琵琶湖疎水

4キロにわたり疎水沿いに整備された遊歩道がある。「ねじりまんぼ」という螺旋状に積まれたレンガのトンネルも見所。

- ・宿泊地…「KAEDE GUEST HOUSE」
混合ドミトリー 1つのベッドにつき2070円。団体ごとに予約
- ・食事
- ①昼：そば処越後
夜：湯豆腐の店「お菜ところ」の湯葉巻き御前
- ②朝：鴨川でピクニック
（道中、セブンかフレスコで購入）
昼：河原町で自由に食べ歩き

活動期間

平成30年4月25日～30年9月14日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：能勢結（芸術専門学群1年）、樫村宙子（芸術専門学群1年）
P：小山慎一（芸術系）

活動報告

実際の活動内容

- ・実際のスケジュール

《1日目》

- 5：17 大学会館（15・筑波大学、19・病院、30・センター）6：55東京駅日本橋口着1180円（ICだと800円）
- 7：30 東京（当駅始発）18番ホーム東海道新幹線のぞみ11号博多行き 2時間18分13080円
- 9：48 京都着計14260円（13880円）
- 10：00 京都駅に集合（新幹線中央口改札前）
- 10：30 電車乗車《烏丸線国際会館行き②京都駅～四条駅 3分210円》
- 10：33 KAEDE GUEST HOUSE 到着荷物を預ける
- 11：15 バス乗車《市営バス錦林車庫行き四条高倉～錦林車庫 5分230円》
- 11：30 バス停着。徒歩で昼食（お蕎麦屋さん「そば処越後」）へ
- 12：50 昼食後、哲学の道へ。諸説明
- 13：00 グループに分かれ、各自写生（随時共同作品制作）in 哲学の道
- 16：30 再集合（カフェの前集合）《徒歩4分》
- 16：35 「錦林浴場」到着、入浴（入らない人は、「カフェふうじええ」《徒歩4分》）
- 17：20 集合《徒歩6分》
- 17：30 夕食（湯豆腐屋さん「通りゃんせ」）到着「湯葉巻き御前」
- 18：00 出発。蹴上駅へ《徒歩14分》

- 18：30 電車乗車《蹴上駅～烏丸御池（東西線）～四条駅（烏丸線）》
 19：30 宿泊施設（「KAEDE GUEST HOUSE」）に到着。
 20：00 ロビーの共有スペースに集まる、集金
 20：30 共同制作発表・作品共有・情報交換
 23：00 解散、1日目終了
 《2日目》
 6：00 緊急打ち合わせ
 6：30 コンビニでご飯調達、朝食
 7：15 チェックアウト
 8：10 四条駅着。電車乗車《四条駅～蹴上駅》
 8：35 南禅寺到着、散策、集合写真、庭園を見学
 10：00 許可証をもらう、水路閣で写生 or 庭園見学
 11：30 集合（水路閣）、作品見せ合い
 12：00 蹴上駅へ《蹴上～三条10分210円》
 12：45 河原町の商店街に到着。食べ歩き&お土産
 13：30 集合（稲荷前）
 13：50 2人と別れる、三条駅へ、電車乗車《三条～蹴上》
 14：00 琵琶湖疏水にて写生
 16：00 集合（疎水入り口）、集合写真《徒歩1～2分》蹴上駅へ
 16：04 《蹴上駅～三条駅東西線3分太秦天神川行210円》
 16：08 三条駅到着《徒歩3分》
 16：11 「京はやしや」到着。最後にお茶
 16：30 鴨川で作品の見せ合い
 16：40 三条駅へ《徒歩2分》
 16：47 電車乗車《三条駅～烏丸御池～四条駅東西線、烏丸線210円》
 17：00 《徒歩5分》「KAEDE GUEST HOUSE」で荷物を受け取り、一本締めをし解散

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒75%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ・2日目が雨天だったため、予定を変更しなくてはならなかった
- ・少し遅刻した人が1人、大幅に3時間の遅刻が1人いた
- ・予定が押して、ご飯の予約に間に合わなかった
- ・用意していた名札、カードが1セット足りなかった
- ・道に迷った

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・2日目の朝に急遽打ち合わせをし、予定を組み直した。
- ・前者は電車を一本遅らせて待った。後者には最寄り駅までの行き方を送付し自力で来てもらい、写生地まで他の参加者を案内した後、駅まで迎えに行った。
- ・電話を入れ、急いだ
- ・急遽あり合わせで作った
- ・頑張って探した

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私にとっては高校時代から続けている大変思い入れのある企画だったため、開催前は楽しみより、不安の方が大きかったです。普段はあまり集団の先頭に立つような人間ではないですし、このような規模でうまくいくのか、参加者は楽しんでもらえるのか、かなり不安でした。週に

1回の会議や予約やスケジュール作り、他の予定で忙しい中で時間を作るのは大変だったし、直前に問題が見つかったりもして慌てました。

そんな中なんとか開催にこぎつけ、バタバタしたところもありましたが、自分自身もたくさんの素敵な人と出会え、純粹に制作を楽しむことができました。開催中にふと、画材を肩からぶら下げた16人がぞろぞろと歩いているのを見て、その特殊で素敵な光景に感慨をおぼえました。そして住んでる県も、出身も、専攻もバラバラの17人が一つの理想のために京都に集まってくれたことをとてもありがたく思いました。さらに、作品の共有タイムを設けた際、お互いの作品を見て、質問したり、感心したり笑いあったりしている姿がとても印象的でし

た。この企画を実現させることができよかったですと心から思い、その価値を感じる事ができました。私にとっても、参加者にとっても、制作、交流の両面において貴重な機会になったと思います。そしてそのような場を提供できたことに大きなやりがいを感じると同時に、力を貸してくださった、T-ACTの方々や、他のメンバーに心から感謝いたします。そして、この企画は、アートは人と人をポジティブにつなぐツールであるということ強く再認識させてくれました。

また、企画を次に繋げるため、下記に反省点を並べておきます。

《反省点》

【準備】

- ・ 集金は事前に学校ごとにしてきて当日代表者からもらう
- ・ 下見で一回同じコースをめぐる
- ・ 名札などの備品は数を確認し、予備を持っていく
- ・ 雨天時の予定はもっと早めに
- ・ 運営側のスタッフを増やすか

企画 / 運営 / 現地リサーチ / 道案内 / 広報・しおり / 交流タイム / 記録・カメラなど？

【スケジュール】

- ・ 写生時間が短くて、あまり量がかけない
- ・ 写生時間をもっと増やしたい
- ・ タイムスケジュールは移動時間や待ち時間をもっと考慮
- ・ 待ち時間を減らして効率的に

【移動】

- ・ 移動時間が長い
- ・ 道順を事前にもっと調べる
- ・ 移動は最小限に。大人数のためロスが大きい

【参加者側】

- ・ 事前にイメージや描きたいものを決める
- ・ 作品の計画や自分なりの目的を練る

【場所】

- ・ 写生地、宿泊地、ご飯がもっと近いのがベスト
- ・ 駅周辺で写生地と宿泊地を
- ・ 雨でも行ければベスト

【交流タイム】

- ・ 交流タイムに最後まで参加してくれない人が結構いた
- ・ お互いのことをよく知らずに終わった人も
- ・ 共同制作企画をもっと魅力的にしたい
- ・ 交流タイムの場所、もっと広くて話がはずむ場所に
- ・ もっと交流タイム盛り上げたい

【広報】

- ・ ポスターとしおりのリンク
- ・ ポスターフィーチャーできなくて、申し訳なかった

【その他】

- ・ お金の集金をもっとスムーズに
- ・ すぐに連絡できる体制をとっておく

参加者への影響

多くの参加者が開催後、肯定的な感想を寄せてくれました！

【参加者の声 1】 遠足すごく楽しかったです。

色んな人の絵が見れて、話が聞けて、貴重な体験でした。普段写生できない場所で描けたのも嬉しかったです。共同制作とか、時間が決まっていたりとか、珍しいシチュエーションで描いて、新鮮な絵が生まれたのが良かったです。次も参加したいです。さらにたくさん or じっくり絵が描けたらいいなと思います。

企画してくれた皆さん、一緒に遠足した皆さんありがとうございました！

【参加者の声 2】

めちゃ楽しかったです！！他の大学で、しかもけっこう離れたとこの人たちと知り合う機会なんてそうそうないので、貴重な体験でした。ほんとに素敵な企画です、あおぞら絵画遠足。

個人的に私はしおりの「未来へ…」のページが好きで、「『日本を描きに』が、いつか『世界を描きに』になって果ては『宇宙を描きに』なんて大きくなっちゃったら」ってところが読むたびわくわくしちゃうんだよね。ほんとに実現したいよね！作品展もぜひやりたい！

もっとみんなの作品見たくなったり、いろんな話をしてみたくなったりよ！同世代でこんな頑張ってる人もいる

んだ！って、自分も頑張らなきゃと思いました…、(*´-´)

未来のプランナーに伝えたいこと

楽しみながら、自分の理想を実現させていってください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

- ・ 初期段階で、企画の詰めが甘いところを的確に指摘していただけたのが良かったです。
- ・ 基本的に、私がやりたいことを一緒に考えてくれ、否定や強制がなかったのが良かったです。
- ・ 大量の印刷を無料でさせていただけたのがかなり助かりました

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



つくばのカルチャー・ラタン (18011A)

T-ACT プランナー 陳 怡菁 (知識情報・図書館学類2年)

活動目的

学内の科学コミュニケーションや異分野コミュニケーションの不足に解決するために、筑波大学学生が組織したつくば院生ネットワークは、今まで学生プレゼンバトル、プレゼンひろば、ザ・プレゼンテーションなどの活動を開催してきました。このたびは、新しい企画としてこれまでの企画よりさらに不特定多数の人々との接点を作るために、セミナーの定期開催を行いたいと思います。

目標：

1. わかりやすい方法で科学を提示することにより、学内の中で最新の科学発展にアクセスできます。
2. 学内外の人々に、学内の研究を紹介する。
3. 科学的問題に関するコミュニケーションを向上するための観点や議論を活性化、科学的なプロセスの理解に役立てる。
4. 大学の枠を超えて、学内外で科学を推進する。

活動計画

異分野セミナーの1~2回開催：

放課後に、1分プレゼンが中心となるワークショップを行う。今話題になるテーマを一つ取り上げ、それに沿って自分の分野でどんな解釈をするのかを、スライド一枚で1分間喋る。全ての人が終わったら団体討論。

1回目：平成30年7月9日 18：30~20：00

筑波大学中央図書館2階 チャートフレーム

1回目の様子を見て2回目以降の開催を決めます。

活動場所

筑波大学中央図書館2階 チャートフレーム

活動期間

平成30年6月1日~30年11月30日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：安藤潤人（システム情報工学研究科博士後期課程2年）、讃井知（システム情報工学研究科博士後期課程2年）

P：逸村裕（図書館情報メディア系）

活動報告

実際の活動内容

放課後に「人間関係」をテーマとし、1分プレゼンが中心となるワークショップを行った。それに沿って、物理学、教育学、言語学、心理学からのアプローチを行い、7人は自分の分野でどんな解釈をするのかをスライド一枚で1分間喋った。そのあと二時間程度の団体討論を行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

広報できる時間が少なく、ポスターとSNSでの発信を行ったが、人集めは困難でした。また、実際に活動の中、見学者も数名がいたが、学術的な雰囲気が強すぎて参加しにくいという意見をもらった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

SNSで発信する頻度を上げ、知り合いにも積極的に声かけた。最後に、TGN以外に2名の参加者がいた。雰囲気が堅すぎて入りにくい問題について、次回イベント開催するとき修正していきたいと思う。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

院生ネットワークのメンバーは大体院生で、忙しそうで新しい企画をやろうと言うにはなかなか勇気が必要であったが、実際に企画を提出した時、メンバーの協力をもらい、なんとなく無事に企画を終わらせた。

参加者への影響

今回のイベントに通じて、さらに今までない企画をやろうとメンバーから意見があった。学内の科学コミュニケーションだけではなく、グループの活性化にも繋がった。

未来のプランナーに伝えたいこと

企画をやる時とりあえず言ってみて、それをディスカッションにより練り上げ、さらに良い企画を作れることと繋がる。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

大きいポスターを無料で印刷できたこと。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4**やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4**

● 筑波大学における育児支援の環境を充実させたい！（18013A）

T-ACT プランナー 北原 有唯（人間総合科学研究科3年制博士課程3年）

活動目的

○きっかけと動機

筑波大学は開かれた大学であることを掲げ、積極的に世界各地から学生を受け入れ、国際化および価値観の多様化が急速に進んでいます。

優れた人材の確保とその研究活動を支えるためには家族のケアが欠かせません。しかし筑波大学には育児中の学生向けのサポートが少なく、母国を問わず多くの学生が自助努力で問題を解決しています。

保護者の役割を担っている学生は、家族をケアする負担が大きく学業時間の確保が難しい場合があります。特に留学生は、言葉の壁や生活習慣の違いなどから日本人学生以上に育児サポートが必要です。

多くの学生が研究活動と育児の両立を目指して努力する姿を見て、なにか手助けになる行動を起こしたいと思い本活動の実施に至りました。

以上より育児中の学生が学業・研究活動に専念できる環境を大学内に整えることは、喫緊の課題と考え今活動を行います。

○本活動の意義

孤立しがちな研究生生活と育児ですが、本活動を通して育児中の学生同士が知り合うことで学生コミュニティの育児サポートが増えることが考えられます。

育児を通して、様々な背景を持った親同士・子ども同士の交流することで相互扶助の関係のみならず、共生的価値の創出ができると期待されます。

大学内における育児支援の環境が充実することは、小さい子供を持つ世界中の志の高い若い人材を歓迎するというメッセージとして発信することができます。

それは、様々な背景を持つ人々に開かれた集団であろうとする筑波大学の姿勢を世界に強くアピールできると考えています。

○最終的な目標

安心して子育てを行いながら学業・研究活動に専念できる筑波大学を実現する。

○今後果たされる目標

- ・一人でも多くの筑波大学の関係者が、大学における育児支援の必要性について理解を深めること。
- ・学生の育児利用を目的としたチャイルドケアルームの設置が筑波キャンパス内に複数箇所設置される。（実績はD棟715）
- ・自助グループを組織して学生が子どもを預けることができるようになり、学業・研究時間が確保できるようになる。
- ・筑波大学に通う保護者と子ども達が、大学の環境と資源を利用して様々な経験と価値観に触れることができる。

活動計画

○活動計画

①筑波大学の関係者に学生の育児支援の必要性を知ってもらう広報活動を行う。

【具体策】

- ・筑波大学新聞とのタイアップにより全学的に情報を発信する。
- ・T-ACT 企画により、育児支援の必要性について知らせるポスターを学内に掲示する。
- ・総合研究棟D棟7階に設置されたチャイルドケアルームを新聞やT-ACTを通して先行事例として紹介し、大学内に育児室の設置が促進される。

②育児支援に関する意見交換会を実施する。

学業・研究時間に集中できる時間を捻出するために、先行事例のチャイルドケアルームを有効に活用できる育児支援について学生同士で意見交換会を行う。特に安全管理、運営方法などの点について重点的に検討したい。

意見交換会は6、7月の毎週火曜12:00~13:00

総合研究棟D7階ラウンジにておこなう。

子どもも一緒にお昼ご飯を食べながらゆったりと意見を交換できるように配慮する。

活動場所

本部総合研究棟D715

その他、全学においてニーズがある箇所で開催する。

活動期間

平成30年5月31日～30年8月31日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：Gunsmaa Gerelmaa（人間総合科学研究科3年制博士課程3年）

P：堀愛（医学医療系）

活動報告

実際の活動内容

ミーティングで検討されたこと及び意見

1. 学業を行うにあたり、どのような育児サポートが必要か。
→子どもが安全にすることができる居場所の確保、安心して預けられる保育者の確保、保育費の確保が必要である。
2. 私たちにできることは何か。
育児を行っている学生に対する理解を深めるため、情報を発信する。
→HP開設する。
当事者同士の交流を深め、ネットワークを構築する。
→信頼関係が構築できれば子どもをお互いに預けられる。育児への協力者を増やすことができる。現段階では、ミーティングを通して友人作りのみだった。

結論

育児を行う学生に対する環境の改善、私たちからの情報発信、学生同士の信頼関係の構築は一朝一夕には成り得ない。今後も無理せず活動を継続することで、筑波大学がFamily Friendly Campusとなるための一助となりたい。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒65%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

広報が難しい。限られた人にしか検討会に来てもらえない。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

HP作成と公開

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

学業をしながら育児・家事をこなす方は大変忙しく、検討会に集合することが難しかった。

参加者への影響

独身の若い学生にも問題意識を持ってもらえた。

未来のプランナーに伝えたいこと

地味に長く活動を続けることが大切だと思う。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

相談役の先生が親身になってくださり色々な挑戦ができた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3

● 宗教×生活 ～知りたい！あなたの世界～ (18014A)

T-ACT プランナー 松田 顕栄 (人文社会科学研究科一貫性博士課程1年)

活動目的

私は今年から院で宗教間対話を研究しており、大学での“宗教者：何かしらの信仰をもつ者”の間での交流会、講演会、または特に海外からこられた信仰者のニーズをすくい取ることで、より信仰と勉学の両立ができるよう援助する組織があったら面白そうだと思い企画してみました。

活動計画

<生活の中に隠れている宗教的伝統や価値観をシェア、および座談会>

内容：自分の住む社会や文化の中で行われている慣習の中に隠されたある宗教的な意味や価値を共有する。特に日本以外の国や自分と違う文化圏や宗教を持つ者では、生活様式はもちろん、世界をどのように捉えるかも変わってくる。従って、異文化や多様な価値観の間での相互理解を深めることができる。

方式：

1. プレゼンターが発表（事前に企画側が依頼して立てる）：20～30分
2. 質疑応答（プレゼンの内容に対して）：10～15分
3. 3～4人のグループディスカッション：40～60分
(宗教×生活に関するテーマについて自由に議論)
4. 各グループの議論内容の共有：10～15分

【時間 約90～120分】

[集会のルール]

- ☆この集まりの目的はお互いの「世界」に触れ、相互理解すること
- ☆ここでの「世界」とは、生活に根差した宗教観や異なった価値観のこと
- ☆自分の価値観の押し付け（布教目的）、相手に対する誹謗中傷はNG
- ☆成人した大人として、相互尊重した態度で意見交換することを求める

活動場所

学内の空いている教室

活動期間

平成30年5月14日～30年7月22日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：伊藤 匠（人文社会科学研究科一貫性博士課程1年）

P：保呂篤彦（人文社会系）

活動報告

実際の活動内容

<順序>

1. プレゼンターの発表
2. 質疑応答
3. グループディスカッション

<集会のルール>

- *この集まりの目的はお互いの「世界」に触れ、相互理解すること
- *ここでいう「世界」とは、生活に根ざした宗教観や異なった価値観のこと
- *自分の価値観の押しつけ（布教目的）、相手に対する誹謗中傷は禁止
- *成人した大人として、相互尊重した態度で意見交換する

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

宗教観という日本社会ではかなり敏感な分野における話し合いなので、まず第一に自分の宗教の布教目的で参加する人が現れるのではないかと心配があった。そのために、まずはお互いをよく知っているゼミや同じ科の先輩を中心に人を集めたので、少人数でしかできなかったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

日本ではなく、“韓国における宗教と生活”という題名でプレゼンをし話しあった。他国における生活と宗教の関係をみていくことで日本の状況と自然と比べてみたり、質問もたくさん出てきてディスカッションが活性化された。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

どれくらいの人たちがこの企画の意義について共感してくれるか未知数であった。しかし宗教学を学んでいる大学院生が参加者であったというのが大きな要因であったとはいえ、新しい発見があったとか、おもしろかったという反応を受けて、生活の中に隠れている宗教的価値観を掘り起こしてみるという作業が、自分の無為意識の内に行っている行為や価値判断を反省的に振り返るにおいても有用であると感じた。

参加者への影響

今回は韓国の生活に及ぼす宗教という内容だったので、隣の国でありながら価値観が大きく違う日本人と韓国人の違いについて考える機会となった。

未来のプランナーに伝えたいこと

プレゼンの内容を軸にして質疑応答、そしてディスカッションをすればお互いの宗教の布教をしあうということにはなりにくいと思う。大事なことは各宗教が大切にしている価値観を攻撃したり中傷しないような言葉や表現を控えること。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

やりたいと思っても、それぞれ忙しい大学生・院生たちをどう集めればいいのかよくわからなかったが、T-ACT という仕組みがあることで周りの人たちに働きかけやすくなった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒4

● 学生プレゼンバトル2018 (18015A)

T-ACT プランナー 永野 恭子 (人文社会科学研究科修士課程1年)

活動目的

- ・ 学問や研究は、特定の学問・研究領域の学生や研究者だけのものではありません。あらゆる人に、あらゆる学問や研究に触れ、たのしむ資格があります。その一方で、学生や研究者には、自らの取り組んでいる学問や研究の魅力を異分野の学生・研究者や一般の方に向けてわかりやすく伝え、学問や研究の成果をひろく社会に還元することが求められています。学生プレゼンバトルは、学群生や院生が異分野の学生・研究者や一般の方に向けてプレゼンテーションを行う機会であるとともに、あらゆる人があらゆる学問や研究に触れる機会です。
- ・ 学生プレゼンバトルの目的は、①プレゼンターである学群生や院生が、学問や研究の魅力を、異分野の学生・研究者や一般の方に向けて伝えるスキルを高めることです。②プレゼンターと異分野の学生・研究者の間の異分野コミュニケーション、およびプレゼンターと一般の方の間の科学コミュニケーションを実現することです。

活動計画

学群生や院生が、自らの取り組んでいる学問または研究の魅力を異分野の学生・研究者、一般の方に向けてわかりやすく伝える、学生プレゼンバトルを行います。予選を行い、11月の雙峰祭に本戦を行います。

以下予定

6月後半・9月前半(夏季休業前と後)

学生プレゼンバトルの広報として運営メンバーによるプレゼン(デモプレ)を実施。

10月

学園祭広報に合わせてプレゼンターを募集。

10月第3週頃 平日18:30~

学生プレゼンバトル予選実施。応募数に合わせて、数日に分けて実施する。

☆流れ

1人22分×最大3名 それぞれ遅くとも20時には終了する。予選最終日に本戦出場者決定。

11月3日 13:00-16:30(予定)

本戦

本戦出場者を3名とし、プレゼンを行う。1人22分×3名+ゲストプレゼン 3時間程度の予定。

ゲストは筑波大学内の先生にお願いする。

活動場所

企画の本戦は大学会館のホール。予選は図書館で行う予定。

ミーティングは基本的に1ヶ月に1度、中央図書館のセミナー室やチャットフレームで行います。予選、本戦の準備が近づくこと、それに伴ってより頻繁に行う予定です。

活動期間

平成30年5月5日~30年11月5日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O: 安藤潤人(システム情報工学研究科博士後期課程2年)、讃井知(システム情報工学研究科博士後期課程2年)

P: 逸村裕(図書館情報メディア系)

活動報告

実際の活動内容

10月16日-18日に中央図書館チャットフレームCにて予選を実施。観客に審査をしてもらい上位3名が本選出場。のべ審査員数40名

11月3日大学会館ホールにて本選を実施。予選同様、観客が審査。審査員数40名。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

人員不足。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

運営内で連絡をとりあい、仕事を分担

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

様々な人と関わりを持てる機会だったので面白かったです。ただ、運営の人員が少なくかなり自分の使った印象。

参加者への影響

学群生からの参加が多く、大学院・学類を超えた関わり合いが出来た。

未来のプランナーに伝えたいこと

時代が関わりつつあるので広報の仕方は要工夫。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

カラー印刷が有り難いです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒3



● 筑波大学 TRPG 会 (18016A)

T-ACT プランナー 荒井 はつね (心理学類2年)

活動目的

TRPG というのは、あるシナリオ内で自分が作成したキャラクターを演じて、仲間と協力してミッションをこなしていく RPG というゲームを、テーブルを挟み、実際に対面で人と言葉を交わして行うゲームです。TRPG はあくまでゲームジャンルの総括名であり、その中にまたいくつものゲームが存在します。その様々なゲームを幅広く行い、知見を広めて行くことも 1 つの目的です。また、この TRPG を通して、仲間との協力の大切さを学んだり、非日常的な体験をしたり、思考の柔軟性を高めたりなど、日々の大学生活に刺激を与えたいと考えています。また色々な学類の大学生や教職員との交流を通して、人脈の形成にも繋がるとも考えています。

活動計画

TRPG は個人差はありますが、基本 1 セッションで 2 時間から長いもので 4 時間を要します。

そして、TRPG を行う前に、そのセッションで行われるシナリオ内で自分が演じるキャラクターを作成するのに約 30 分から 1 時間ほどかかります。

これらを通して 1 セッション合計で要する時間は 3 時間から 5 時間ほどです。

また、必要人数ですが、これは行う TRPG の種類によって異なるのですが、4 人から 6 人が平均だと考えています。

例えば 1 回の集会で参加人数が 20 人ほどいたら、それを 4～5 つのグループに分けて、そのグループで TRPG を 1 セッション行い、またグループを分けて 2 セッション目を行い、時間が許せば 3 セッション目を行う、というのが理想とするところです。

この集会は、時間がかかることが想定されますので、土日祝日などの休日を使って月に 1、2 回行えたらと考えています。

そして、必要な物品に関してですが、TRPG ではキャラクターを作成する際にキャラクターシートという印刷物を用います。この印刷物は T-ACT の印刷機をお借りして行いたいと考えています。

また、TRPG は長時間の思考を有します。そのために、飲み物やお菓子類などが必要となります。これは各自の持ち寄りを予定していますので、経費はかからないものと考えます。

活動場所

活動計画でも述べたように、集会は時間がかかるものだと考えられるので、準備の時間含めて 10 時間から 21 時まで借りられ、テーブル席が 4～5 つあり、飲食可能な教室などを活動場所にしたいと考えています。

活動期間

2018年6月11日～2018年12月10日

対象者

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：森田万葉（障害科学類 2 年）、國光円歌（心理学類 2 年）、柳沢萌菜（心理学類 2 年）、大内理聖（心理学類 2 年）

P：一谷幸雄（人間系）



活動報告

実際の活動内容

10～15名の参加者を募って、1グループ3～5人でテーブルを囲い、TRPGを行う活動。

TRPGとは、テーブルを挟んだ参加者同士が対話を通して協力し合い、1つのシナリオをクリアに導いていくゲームです。活動は全部で3回行いました。

場所はつくばサテライトオフィスで主に行い、人は毎回15名ほど集まりました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒95%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

グループで分かれてゲームを行うこともあり、時間の調整が難しかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

グループのゲーム進行役とリアルタイムで連絡を取り合い、終わりの時間などを調節した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

対話で行うゲームなので、さまざまな人の性質を感じることができた。

また自分が得意な人、苦手な人の対応などがはっきりし、より柔軟な人間関係を築けるようになった。

参加者への影響

態度や行動で、人を傷つけてしまうことがあるので、自分の言動を見直すための良い影響となった。

未来のプランナーに伝えたいこと

人との連携を大事にし、オーガナイザー1人で抱え込まないことが大切です。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

人との連携の取り方、仕事の分担、など社会に出る上で必要なスキルを身に付けることができたと思う。これらは勉強だけでは身につけられないので、貴重な体験だった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

● あなたの小説が読みたい！—第十一回筑波学生文芸賞の作品及び一般選考委員の募集— (18018A)

T-ACT プランナー 箱崎 玲音 (知識情報・図書館学類3年)

活動目的

小説を書くこと・読むことに興味を持つ学生の活動及び交流の活発化を手助けしたい。またつくばに関わる、筑波大学外の学生との交流のきっかけにしたい。最終的にはつくばに関わる学生全体の創作活動の活性化を目指す。

今年度は新たにテーマ部門を設置し、つくばに関わりの深い「宇宙」をテーマとした。文芸に興味のある学生が宇宙に興味を持つ、あるいは宇宙に興味のある学生が文芸に興味を持つきっかけになれば良いと思う。

活動計画

| | |
|-------------|--|
| 5月1日 | 作品募集開始 |
| 6月 | 一般選考委員(パーティシパント)向け説明会&選考体験会 |
| 7月 | 一般選考委員(パーティシパント)向け説明会 |
| 7月15日 | 作品募集締め切り |
| 8月 | 一次選考:集まった作品を筑波学生文芸賞運営委員(オーガナイザー)のみで選考する。 |
| 9月 | 最終選考:一次選考通過作品を一般選考委員(パーティシパント)と共に選考し、受賞作を決定する。一般選考委員参加者との交流及びアンケートを行う。 |
| 10月 | 受賞作を発表・受賞作掲載冊子を編集する(オーガナイザーのみ) |
| 11月3日~11月4日 | 雙峰祭にて冊子配布。筑波学生文芸賞運営委員(オーガナイザー)のみで最終振り返りを行い、活動報告書をまとめる。 |

活動場所

ミーティングは主に大学図書館のセミナー室で行っている。

パーティシパント向けの説明会もセミナー室で行うことを検討中。(昨年度は教室で行なっていた)

活動期間

平成30年5月1日~30年11月1日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O: 饒波美香(知識情報・図書館学類3年)、三井鴻志郎(心理学類2年)、小川奈々(知識情報・図書館学類2年)

P: 綿抜豊昭(図書館情報メディア系)

活動報告

実際の活動内容

5月

- ・作品募集開始(募集期間7月末まで)
 - 看板・ポスター・HP・Twitterにより告知
 - 締め切り前の7月上旬にもポスター・Twitterで再告知
- ・茗溪会に助成金の申請

6・7月

- ・一般選考委員募集
 - 計3回の説明会を開催
 - ポスター・HP・Twitter・大学HPの掲示板・チラシにより告知
- ・協賛依頼準備
 - 協賛案の検討・協賛依頼書など各種書類の作成

8月

- ・作品選考
 - 8月はじめに一次選考、8月末に二次選考
- ・協賛依頼(メール・訪問など)

9月

・受賞者インタビュー・解説など各種原稿の執筆

10月

・冊子の編集・入稿
→入稿後、表紙の差し替え発生

11月

・冊子の配布（筑波大学の学園祭）
→約300/500部
・大学図書館・市立図書館への寄贈
・T-ACT 経由でラジオ出演

12月

・フィードバックの送付（予定）

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒60%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

①メンバーの意識の問題

“なあなあ”な空気感が全体を通してあったと思う。予定があると事前に連絡があったメンバーの欠席はともかく、日々のミーティングで無断欠席や遅刻が多々見られた。そもそものメンバーが少ないということもあり、私以外のメンバーが一人も集まらなかったこともあった。9月末にメ切を設けていた解説等の原稿が揃ったのは、10月半ばになってからだった。私個人としても、重要な申請や報告を忘れることがあったため、他のメンバーに強く出ることもできずにいた。

ミーティング外の報連相も致命的にできていなかったように感じる。LINE グループで連絡を取っているのだが、自分のやりたくない仕事の話題には返信をしない、あるいは他メンバーの出方を伺っているうちに返信の機会を逃すメンバーが多い。仕事を誰に割り振るか、どのように片付けるか判断する立場としては、断るならばはっきりと断ってくれたほうがありがたいのだが、この無反応のために初動が遅れるケースが多々あった。

②活動資金の不足

今年の春の時点で、活動資金は10万円以上不足していた。助成金は例年減少傾向にあり期待ができず、その他の収入方法も検討中であるものの、机上の空論の域を出なかった。

③パーティシパントの不足

昨年度に引き続き、一般選考委員が集まらないことが大きな問題となった。

④学園祭企画登録の申請忘れ

私のスケジュール管理ミス。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

①メンバーの意識の問題

はじめのうちは自分に自信がない、下手な言い方をしたら嫌われるかもしれないという恐れから口を噤んでいたのだが、資金問題の話し合いがミーティング参加人数の少なさで進まない、メンバー内の返信の遅さがT-ACTの広報依頼など外部とのやり取りに支障をきたしかねないなどの危機感を感じるようになったので、ミーティングで問題点としてははっきりと指摘した。結果、出席については改善が見られた。連絡についてはややマシにはなったが、まだ改善されたとは言いきれないので、連絡およびその返事がない場合には、その都度こちらからアクションを起こして、それらを促すようにした。明確に不満を示されてはいないが、やり方がやや強引な感じが否めないのも、もっと角の立たない方法があればな、と思う。

②活動資金の問題

助成金の申請額や内容の見直しを行い、改善した結果、助成額は昨年より倍以上に回復した。また、協賛については運よく茗溪会の方に協賛していただけた。OBについては、一つ上の代以上には遡ることができなかったが、昨年の先輩方に多く支援いただけた。今後については、今連絡が取れる代の名簿などをしっかり作り、毎年少しずつ頼れる人数を増やしていけたらと思う。

しかし、余裕を持った入稿ができなかったこと、入稿後に表紙原稿のミスが発覚し差し替えたことなどが原因で想定よりも費用が高んだため、結局それなりの額を自費で賄うことになってしまった。

③パーティシパントの不足

未解決。計三回の説明会を計画したが、参加者は合計で一人のみであり、その一人も活動の参加には至らなかった。

説明会への参加者の不足については、広報の不足が挙げられると思う。T-ACTでの広報を前提に動いていたが、資金の問題で承認に至らずにT-ACT経由の広報が不可能となった。それが判明してから、学生生活課経由の広報の申請を行ったために、例年よりも広報の時期が遅れ、期間も短くならざるを得なかった。また、資金も

問題の解決を優先課題として動いていたため、広報がやや疎かとなった。

説明会の参加者を活動の参加に持ち込めなかった点については、説明会での私の進行、場の空気づくりが下手だったからではないかと思う。普段ムードメーカーをしているメンバーが欠席だったこともあり空気が重く、私の緊張が場の空気に伝染してしまったようにも感じた。

④学園祭の企画登録忘れ

学園祭実行委員会に連絡を取ったが、締め切り後の参加は認めてもらえず、T-ACTのブースに参加させていただくことで、どうにか事なきを得た。T-ACTの方のご協力がなければ致命的なミスとなり得た問題である。年度のはじめに活動の一連の流れを整理、メンバーで共有するなどして、誰かが仕事を忘れても他のメンバーが指摘できるような環境にしたい。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

この活動も代表も二年目だが、去年は頼れる先輩がいた。本当の意味で団体の代表となった今年は、去年の先輩の偉大さを感じるとともに、己の不甲斐なさを痛感させられる一年だった。自分の管理能力の甘さや計画性の無さが露呈することが多く、他のメンバーから頼りない代表だと思われるのではないかと悩んだ。また、私は自分にも他人にも甘い傾向がある人間であり、それが団体全体の“ななあ”な空気に繋がってしまったのではないかと反省している。

しかし、そのような中でも解決しなければいけない問題があり、それらを乗り越えるためには、こうした自分の弱さと向き合い闘うことは避けては通れない道だった。未だ自分の欠点を完全に克服したとは言いがたいが、少なくとも自分の問題点を認識し、少しでも改善しようと足掻いたことは、自らの成長に繋がったのではないかと思う。

参加者への影響

運営委員（オーガナイザー）

どちらかという、昨年度よりも活動に消極的になったように思う。全員活動二年目なので昨年よりも緊張感がなくなったためなのか、先輩がいなくなった後の私の統率力なのか、あるいはその両方が原因として考えられる。

各々の成長については、私は正直あまり感じ取ることができなかったが、何か一つでも得られることがあったならよいと思う。

未来のプランナーに伝えたいこと

広報や機材の貸出など、T-ACTは様々な支援をしてくれますが、何よりも積極的に受けるべきサポートは相談であると思います。どうしたらいいかわからないことは勿論、本当にこれでいいのか心配なこと、いくつか案は出ているが決めかねていることなど、日々の活動や話し合いで少しでも行き詰まったら、団体の外に意見を求めると非常に参考になるでしょう。（プランナー＝まとめ役とは限らないかもしれませんが、）団体をまとめるうえでの悩みなど、メンバーには相談しにくいことも思い切って吐き出してみると、楽になるのではないのでしょうか。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

資金問題についての相談に乗っていただき、大変参考になりました。ラジオなどの広報の機会や、文化祭のスタンプラリーなど、活動の周知や文化祭での集客に直結するようなサポートも非常にありがたかったです。

他のT-ACT企画と交流したり協力したりする機会があると素敵だなと思います。上・下半期末の活動報告会は少し場が硬いので、もう少し気軽に参加できるような交流会があると嬉しいです。

自分はこのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒2

● 数つくば (18019A)

T-ACT プランナー 大崎 俊輔 (情報科学類1年)

活動目的

哲つくば、歴つくば、言つくばなどなど、主に文系色の強いものばかりでしたが、物つくばを開催すると聞いて、数学でもやりたいと思ったのがきっかけです。

各回毎の最終目標としては、各自が決めたお題を当日に様々な形式で参加して頂いた方々の前で発表することで、数学の面白さ、素晴らしさを最大限にアピールすること。

数つくば(仮)の目標としては、回を重ねて、できるだけ多くの人に参加して貰えるようにし多くの人が登壇して、自分の興味のある分野などについて話せるような環境を作りたい。

活動計画

開催半月前までには講演者の登録を完了。

開催一週間前には内容と大体の時間を決定して講演者より知らせて貰い時間調整。

当日(7月15日)は、各自が持ち込んだ内容を講演したりするなど。

オーガナイザーと企画者は12:00ほどから準備。それ以外の登壇者や公聴者は13:00に来てもらうかたち。

発表は各々に予め時間を聞いておき、各々の発表後に準備の時間を含め、5分~10分程度の休憩を取りたい。

纏めると

12:00~教室準備

13:00~数つくば はじまり

13:05~最初の登壇者

14:00~休憩

14:05~2番目の登壇者

///

18:00終了

ただ、登壇者の人数と発表時間によって午前中から始めたり、終了時間の変更がある可能性がある。

おおよそは個人作業となるが、論理的な間違いなどが講演中に発覚するなどしたら大変なので、発表前日ないし数日前には一度何らかの形で確認したい。

活動場所

最終的な発表は教室を借りて、それ以外は図書館のセミナー室などを借りて行いたい。

当日の教室候補 人数が未定なため教室の大きさがどれぐらいのものが良いのかは分からない

ただ、設備面からいうと3A204が良いと思う。

規模的には、1D204が良いと思う。

活動期間

平成30年6月15日~30年7月15日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O: 山口博将 (情報科学類1年)、比江森友太 (物理学類1年)

P: 塩川浩昭 (計算科学研究センター)

備考

時間を決めて講演するような形式だけでなく、問題を出してその場で参加者に解いて貰ったりするなど、講演というよりも授業形式などでできるというのが数学だからこそやれる特徴だと思っており、講演という形式に留まらず、色々なスタイルで発表者各々にやって貰いたい。

勿論、数学者や数学史、数学について今している研究についてなども話して貰いたい。

当日の終了時間は登壇者によります。

HP、画像は後ほど作るかもしれません。

活動報告

実際の活動内容

教室で登壇者による数学に関する講演など。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

ピンマイクが繋がらなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

登壇者などに対応したが解決できなかった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

人が思った以上に当日少なかったことは登壇者に対しても、申し訳なかったと思っている。

ただ、前後して、参加したいという事を伝えてくれた方や、教職の授業の休み時間中のみ参加してくれた方などがあり、日付をもう少し調整する余裕を持てていればと思った。

Twitterでの反応を見ていると、次があるならぜひ聞きに行きたいという方も見受けられたので、2回目を開催したいと思っている。

参加者への影響

学内循環バスの整理券の読み方を話された方がいた。その後、バスに乗るたびに整理券のデータを読み取るようになった人がいる。

二人完全情報ゲームが無限の場合について話された方がおり、その方が話し終わった後では、やっと理解できたと参加者から声が上がっており、登壇者も喜んでいた。

未来のプランナーに伝えたいこと

時間には余裕をもってプランを立てよう

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

機材が借りられることや、ポスターを無料で印刷できたことが良かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

● 竹水鉄砲合戦～夏の陣～ /WATER GUN FIGHT (18020A)

T-ACT プランナー 大草 有里枝 (国際総合学類4年)

活動目的

【やりたいと思ったきっかけ】

小さいころ大好きで良く見ていた、某テレビ番組の水鉄砲合戦を今自分の手で再現したい…！！という思いがこの企画の始まりである。また（おそらく）最後の夏休み、だれかを巻き込んで全力で楽しいことをしたいという思いもあった。

【これを通して私がやりたいこと】

- ①日本人学生、留学生、地域の方（子供からお年寄りまで）とさまざまな人をつなぎ、みんなで楽しむ
- ②地域の年配の方から日本の昔の遊びを学び、体験する
- ③できるだけ環境に優しく、工夫して遊ぶ

活動計画

台風12号の影響で29日に延期予定です。

Due to the typhoon this event will be postponed until 29th.

当イベントに興味を持って下さった皆さまへ＜ English below＞

この度、当イベントに興味を持って下さりありがとうございます！

以下イベントの概要と注意事項および、申し込むフォームへのリンクがありますので、順にお読みください。

【イベント概要】

日 時…7月28日（順延7月29日）10：00-15：30

場 所…虹の広場（アクセス等は下の「活動場所」をご覧ください。）

参加費…300円

参加者…40人程度（運営10人＋日本人学生10人＋留学生10人＋地域の方10人）

スケジュール

10：00-10：30 受付・参加費回収

10：30-10：40 イベントの説明

10：40-12：00 竹水鉄砲づくり

12：00-13：00 お昼ごはん（食べに行く・買いに行く・食べ物を持ってくる）

13：00-15：00 水鉄砲合戦

15：00-15：30 会場のゴミ拾い・写真撮影

15：30 解散

＜補足説明＞

①竹水鉄砲づくり

5人1グループで工具を使いながら水鉄砲を作っていく。基本的には自分の分は自分で作る。（お子さんが作る際は、保護者が運営スタッフがのこぎりや鋸を使いサポートする）

②水鉄砲合戦

日本人学生、留学生、地域の方を混ぜたチームでゲームを行う。

【注意事項】

＜安全に対する配慮について＞

当イベントでは竹水鉄砲を作る際にのこぎりや鋸などの工具を使ったり、水鉄砲合戦で会場を走り回ったりします。その際にケガや事故が発生してしまう可能性があります。

またイベント当日、かなり気温があがり、熱中症になりやすい状況になることも予測されます。

当イベントではそうしたけがや事故が起きた際のコピーを保障するために、レクリエーション保険に加入しております。また、ケガや事故を未然に防ぐための安全配慮、および軽度のケガに対する応急処置を行います。

なお、会場近くに自動販売機がありませんので飲み物は多めにご持参いただき、こまめな水分補給をお願いいたします。

＜昼ごはんについて＞

昼食時間に買いに行くか、ご持参いただきたいと思います。こちらで用意はありませんので、あらかじめご了承ください。

歩いて行ける最も近くのコンビニは、一の矢宿舎の共用棟内にあります。歩いて5分程度です。当日スタッフに尋ねてください。

＜トイレについて＞

会場にはトイレがありません。一の矢宿舎の共用棟内のトイレや学内の建物のトイレをご利用いただくこととなります。

< 駐車場について >

筑波大学構内の駐車場がご利用いただけます。会場や駐車場までのアクセスは「活動場所」を参照ください。

< 貴重品の管理 >

自己責任でお願いいたします。

< 観覧歓迎 >**< 申込多数の場合について >**

当イベントでは定員を30名としています。申し込み多数の際には、先着順での対応となりますのであらかじめご了承ください。

参加が確定された方には24日までに申込時にご入力いただいた連絡先にご連絡いたします。

< 雨天時の対応について >

悪天候でイベントが実施できない場合は当日28日の午前8時までに、ご記入いただいた連絡先にご連絡いたします。28日に実施できない場合、29日に順延となります。29日も悪天候でイベントが実施できないと判断した場合、同様に29日の午前8時までにご連絡いたします。

< 10歳未満のお子さんの参加について >

安全の観点から、水鉄砲を作って合戦に参加できるのは10歳以上からとしています。あらかじめご了承ください。

また、小さなお子さんのためにミニプールを用意する予定でありましたが、こちらの都合で取りやめることにしました。申し訳ございません。

< 肖像権について >

イベント当日、広報媒体*および報告書*に掲載するための写真撮影をスタッフが行います。写真に写りたくない・掲載されたくないという方がおりましたら、イベント当日の受付時にお申し出ください。

お申し出がなかった場合、広告媒体や報告書の掲載の同意があったものとみなします。

* 広報媒体：当イベントの Facebook・twitter アカウント、T-ACT ウェブサイトを指します。

* 報告書：T-ACT への活動報告書

To those who are interested in this event

Thank you for having your interest in our event!

Please read the abstract of it and relevant terms and conditions below. In the end, you can check the link for the application.

【abstract of this event】

Date 7/28 10:00-15:30

Note: The weather is not suitable for a water gun fight, it will be hosted the next day 29th.

Place: Niji no Hiroba (check the access below "活動場所")

Participation fee: 300yen

Participants: about 40 people, consist of about 10 staff, 10 Japanese students, 10 international students and 10 local residents

Schedule:

10:00-10:30 reception and collection of participation fee

10:30-10:40 explanation about this event

10:40-12:00 making water guns from bamboo

12:00-13:00 lunch time-please go to grocery store to get some food or bring your own lunch

13:00-15:00 water gun fight

15:00-15:30 cleaning the event place and taking photos

15:30 finish

Supplementary information

1 making water guns from bamboo

In groups of 5 we will make water guns from bamboo by tools. Basically each person will make a water gun by himself. When small child does it, however, his parents or staff will support him.

2 Water gun fight

Each team has Japanese students, international students and local residents for sure.

【relevant terms and conditions】

[About risk management]

During this event as we are going to use a gimlet to make bamboo water gun there is a risk of accidents or injuries occurring. In addition, as it is a hot day a heat stroke may also occur so please take rests when needed.

We have recreational insurance to compensate for the cost of injuries or accidents that would

happen during the event. In addition, we are going to be careful not to cause some accidents and take care of minor injuries by ourselves if necessary.

Please bring more drinks because there is no vending machine near the event place, and stay hydrated during the event.

[About lunch]

Please go buying your lunch or bring it. We will not serve lunch. Thank you for your understanding.

The nearest convenient store is in Ichinoya community center. It takes about 5 minutes from the event place by walk. Please ask the staff how to go there on that day.

[About parking]

Parking at the university is available for free. You can check access to parking area or event place below “活動場所”

[About valuables]

Please keep your valuables at your own risk.

[Viewers are welcome]

[In case of too many participants]

The participants are limited to 30. If many participants above it apply for our event, we will accept the participants on a first come first served basis. We will contact you by 24th if you can join our event.

[About weather conditions]

If the weather is not suitable for a water gun fight, it will be hosted the next day. Then we will announce the postponement by e-mail or call you by 8am on 28th. Moreover, if the weather is not good on 29th too, we will announce in the same way.

[In case of participation of kids under 10 years of age]

In terms of security, we judge kids under 10 years of age are not old enough to make water guns or have a water fight. We appreciate your understanding. Besides we were planning to have a mini pool for small kids, but we have decided not to do. I'm so sorry.

[Regarding image rights]

We will take pictures or videos to post them in our twitter and Facebook account or T-ACT website. If you refuse it, tell the staff in front desk on the day. Without it, we will recognize you accept our use of pictures or videos in our post.

活動場所

虹の広場（筑波大学構内）〒305-0006茨城県つくば市天王台 1 丁目

【自転車でお越しの場合】

虹の広場周辺にご自由にとめられます。

【バスでお越しの場合】

筑波大学循環バスがご利用いただけます。「虹の広場前」というバス停がありますので、そちらで下車していただき、小高い丘のように見える斜面をのぼってきてください。

【車でお越しの場合】

当日、筑波大学本部北駐車場が無料でご利用いただけます。ゲートは解放されているので、そのままこちらの駐車場に向かってください。

東大通沿いの T のモニュメントのある交差点から大学構内に入っていただき、TARA センターというバス停を通り過ぎた先の右手に本部北駐車場があります。

下の地図の青い線を参考にしてください。

また、駐車場から会場までは赤い線に従って会場に向かってください。

Niji no Hiroba (on campus)

[by bicycle]

Anywhere around the park is available.

[by bus]

University Loop-line On-campus Bus is useful. We have a bus stop called "Niji no Hiroba". You can see a small hill there so please walk it up.

活動期間

平成30年 6月14日～30年 8月12日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：小林陽一郎（数理物質科学研究科修士課程2年）、荒井怜奈（生命環境科学研究科修士課程1年）、長島俊太郎（応用理工学類2年）、前川正樹（人文学類2年）、木崎由実子（芸術専門学群2年）、長谷部紫苑（生物資源学類1年）、三田村美穂（国際総合学類4年）、杉山仁実（国際総合学類4年）、佐々木唯（人文社会科学研究所修士課程1年）

P：鈴木大三（システム情報系）

活動報告**実際の活動内容**

日時…順延7月29日 10:00-15:30 場所…虹の広場

参加費…300円

参加者…34人（学生スタッフ7人・地域のサポーター3人+日本人学生8人・留学生6人・地域の方5人+観客5人）スケジュール

- 10:00-10:30 受付・参加費回収
- 10:30-10:40 イベントの説明
- 10:40-12:00 竹水鉄砲づくり
- 12:00-13:10 お昼ごはん（食べに行く・買いに行く・食べ物を持って来る）・水汲み
- 13:10-13:20 スイカ割り
- 13:20-13:30 アイスブレイク
- 13:30-14:20 水鉄砲合戦（ゲーム①チ-ム戦）
- 14:20-14:50 水汲み・休憩
- 14:50-15:10 水鉄砲合戦（ゲーム②全員で合戦）
- 15:10-15:40 ゴミ拾い・写真撮影
- 15:40 参加者解散
- 16:30 スタッフ解散

<補足説明>

①竹水鉄砲づくり

5人1グループで工具を使いながら水鉄砲を作っていく。（実際は4人×4チームでやりました。）基本的には自分の分は自分で作る。（お子さんが作る際は、保護者か運営スタッフがのこぎりや錐を使いサポートする）

②水鉄砲合戦

日本人学生、留学生、地域の方を混ぜたチームでゲームを行う。一回目のゲームは6人程度×3チームで総当たり戦をしました。二回目のゲームでは私以外の全員が参加し、水風船も入れて合戦をおこないました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

困ったことはいろいろありましたが、整理すると

- ①運営スタッフとのコミュニケーション
- ②初めてのことで先を見通せなかったこと
- ③道具集め
- ④地域のサポーター集め

自身の感覚としては上の二つが特に難しかったです。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか**①運営スタッフとのコミュニケーション**

始める前からこれが一番難しいだろうと思っていましたが、やはり難しかったです。しかも今まで関わったことのない人たちと0を1にしなければならない、準備期間が1か月半しかなかったということもあり、余計に難しかったです。正直解決できたのか分かりません。個人的には同じ熱量で、同じ行動力でやれる仲間がほしかったのですが、そこまで巻き込むことはできなかったように思います。発起人として、自分の本気を見せて少しずつ巻き込んでいだけで精一杯でした。それでも、すこしずつ私を理解してくれる人や動いてくれる人が増えていきました。今までの私には自分や企画自体に自信がなくてここまでコミットすることはできなかったと思います。まず自分が本気になってひたすら行動する姿勢を見せることができたこと、そして少しずつ人を巻き込ん

でいけるようになったのは個人的には成長だと思います。

ただ、これからも引き続き課題であると思うのは、自分はどういう人間であるのかを伝えたり、困っているときに助けてほしいといえたりなど、素直にコンスタントに自分を開示すること、世間話などを通してお互いのことを知る努力をすること・時間をもつこと、人として魅力的で、ついていきたいと思ってもらえるリーダーになることが必要なのではないかと考えています。

②初めてのことはばかりで先を見通せなかったこと

竹で水鉄砲を作って遊んだら楽しそうというイメージだけはありましたが、これまで竹で水鉄砲をつくったことも、水鉄砲を使ったゲームを作ったこともありませんでした。やったことなく何も分からなかったのも、やってみるしかありませんでした。コネでなんとか竹を入手して、ビデオを見ながら見よう見まねで水鉄砲を作って、でもうまく飛ばなくて。ゲームの方も思っているよりなんか面白くない。どうしたらチームメイトと協力する展開を生めたり、もっとわくわくするようなゲームになるだろうか…など考えながらひたすら試行錯誤でした。計画をたてようもたてられず、たてたところどううまくいくこともそれ通りにはいかなかったです。それでもとにかくやるしかない、やりながら修正していくしかありませんでした。先がなかなか見通せなくて辛い瞬間もありましたが、それでも少しずつ進んでいるという感覚があって救われました。

③道具集め

ありとあらゆるつながりを駆使して探すよりほかなかったです。簡単にあきらめないうで、できるまでやればいだけなんだと気づかされました。

④地域のサポーター集め

地域の方とのコネがなかったので、苦労しました。ですが、なんとかつながりを手繰り寄せたり、たまたま関係ができたということがあると、最終的には4人の方に大変お世話になりました。③と同様、あきらめないうでできることはなんでもやること、素直に聞いて頼んでみることの大切さを知りました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

まず「大草、最近水鉄砲、水鉄砲ってどうしたんや？あほか？」と思われているかと思います。

はい、私はあほみたいなことをしたかったのです。あほみたいだけど、楽しかったらいいじゃないかと思ったのです。

就活を通してこれまでのことを振り返ったとき、大きくなるにつれ、笑いすぎて死にそうになることも、めっちゃめっちゃわくわくすることも少なくなっていたことに気づきました。

なんでだろう、と思いました。

わたしの答えは「まず『自分』が面白いと思うことを分かっていない・やっていない」でした。

私は自分がイベント企画・運営をするのが好きなのは知っていました。誕生日でも友達の集まりでもなんでも、そこにいる人誰一人残らず楽しんでほしい、喜ばせたい、笑顔がみたいという思いがありました。

おもちの代表を始めたときも、英語<イベント企画という頭でした。(今思うと情けないが)

そんな人間なのでイベント企画はいろいろやってきたつもりでしたが、自分を軸に考えたときに、余計な制約がはずれた素直な(あほな)自分が出てきました。

- ・大学会館から松見池まで流しそうめんしたい。
- ・水鉄砲合戦したい。

この二つが浮かびました。

心から面白そうだと思います。想像するだけでワクワクしました。

そして、これがおもちのときの私に足りなかったものだったと気づきました。

参加者を楽しませるためにはと考えることばかりが先行して自分を置いていってしまった。自分の中で決定的に違ったのは「これは絶対面白い。私ひとりでもやりたい。」という強い思いでした。それがこの企画のスタートでした。

しかし、私はただあほで楽しいことをしたかったわけではありません。あくまで、水鉄砲は私の理想をかなえる手段でした。

これも就活を通して気づいたもので、私を貫く価値観は「どんな違いも乗り越え、人と人をつなぐ」です。国籍も言葉も文化も年齢が違って、お互いが仲良くしようと思えば、あるいはそういうきっかけがあれば絶対に仲良くなれる。一つになれる。平和になる。私はずっとそう信じています。

わたしは、いろんな壁をこれでぶち壊して、みんなが一つになる・一人のこらず笑顔になっている景色を見たかったのです。

私は水鉄砲にその可能性を感じました。小さいころ、だれでも水遊びはしたことがあるはずですが、大人になってなることはほとんどない。国も年も関係なく、楽しめるはずだと思います。

正直「水鉄砲」という触れ込みで、私の真意を隠したといっても過言ではありません。

「水鉄砲」というキーワードで、普段まず交わらないような人たちが集まって、協力しながら(わざわざ)竹で水鉄砲を作って、それでみんなで子供みたいに遊ぶ。

おもちでは出会えなかった人を対象にしてみたかったのがあります。「国際交流」「子供と触れ合う」「ご年配の方に学ぶ」という売り出しではなく、あくまでコンテンツで売りたいかった。そこで今まで私が見たことがない、新たな化学反応が生まれるのではないかと考えていました。

これがわたしの本当の狙い、水鉄砲を通してやりたいことでした。

長い(笑)まだ、企画意図までしか書いてない(笑)(しかもこれだけではないが、前置きが長すぎるので割愛)就活の合間、そうした構想を練っていたのですが、本当に動き出したのは、6月中旬でした。

まず、仲間を集めるところからでした。ただなかなか集まらなかった。一つの大きな理由は、私自身、企画段階で、今までかかわったことのない人たちと動いてみたいと思っていたためです。新しい人と共にやることで学びたい、どこまでチームになれるのか試してみたい。そんな思いがありました。そんなとき、縁あって、一緒にやりたいと言ってくださったのがDONPAPA(T-ACTのお笑い団体)の方々でした。もともと、代表だった小林さんとは知り合いです。3月の報告会ですごい行動力をもった方だ…ということは感じていましたし、団体でやってることも面白くて私のツボでした。(回らない寿司をあえて回すやつとか、お笑いテストとか)

ただ、「今までかかわったことのない人たちと動いてみたい」というのは甘かったあとで気付きました。私対団体のみなさんという構図は今まで経験したことがない関係性で、どう関わっていけばいいのか分からない日々が続きました。多分、それはDONPAPAの方々もそうだったのかもと思います。企画をしていく前に、共にやっていく仲間とどう仕事をしていくのか分からなかったのです。正直、最後まで分からなかったです。どうすべきだったのか、次はどうするか。これは今後も私の課題だろうと思います。

そんな戸惑いも抱えながら、限られた時間(1か月半)でやるべきことはたくさんありました。(本当はもっとシンプルに考えられたのかもしれないが)計画はざっくりとは立てていたものの、先が見通せない&仲間とどうやっていけばいいのか分からないで、6月下旬~7月上旬は焦りやすい弱い自分に負けることが多々ありました。それでも、私が成長したのは、以前よりは辛いときに辛いと言えるようになったことです。頭の中が混とんとしてきたり、しんどくなってきたら、小林さんに相談してというのを週一くらいで繰り返していました。やるしかない・進むしかないこと、妥協しないこと、それでもできないこともあること、考えるべきことと考えなくていいことを分けること、優先順位をつけること…小林さんから教わったことは本当にたくさんありました。(本人に伝達済み)突然相談の話を持ち掛けても、いつも快く引き受けてくださった小林さんには感謝しかありません。

相談するとき以外でも、小林さんの考えるのも行動するのも早いところに刺激を受けていました。わたしは今までどんだけだらだら生きていたのかはっとさせられました。

小林さんを褒めてて話がそれてきましたが、今まで気付いた自分の弱さをできるだけ克服しようとしながら、この企画の準備をしていました。

また、心がおれそうになったときを越えられたのは、練習の際、この企画は私の理想に合っていると強く思えた瞬間が二度あったからというのも大きいです。

一度目は2回目の練習でした。あんまり集まれなかったけれども、留学生の友達や良くして下さった地域の方が来てくれたり、近所の小さい子たちを巻き込んだりして、いろんな人が混じって一つの空間を作っていました。そこで同じ経験を共有して、同じ感情を共有して。あの景気を見たとき、やっぱりわたしのツボはここだと思いました。

二度目は公園で私の友人を呼んで、ゲームの練習をしたときです。DONPAPAと私の友人が始めて交差したきっかけでもありました。私を媒介にいろんな人が繋がって、そしてみんなで笑顔を見せてくれて。嬉しいなあ、と思いました。

こうした瞬間も私を支えてくれていました。

あの景色をもう一度みたい、もっと多くの人と交わって一つになった景色をみたい。それが私の原動力でした。そして、広報開始、申込開始…と日々はあつという間に進んでいきました。毎日必死に動いてもやるがいっぱいあって、一人の人間ができることの限界も感じました。それでも、必死にやるという選択肢しかありませんでした。(これからは聞いてみる・頼るも覚えたい…)

ついには1週間前になって、いろいろこだわりたい気持ちを抑え、とにかく当日ちゃんと回すことに切り替えました。(今後はもっと先を見通して動ける自分になりたい…)そんなさなか、今年初上陸の台風が開催日に直撃するという悲劇が…(笑)あんなにずっと晴れてたのに…最悪できないで終わる可能性もありました。そのとき、これだけ懸けてきたのにできない…?と思いました。でも、一方で準備追いついていないし、英語も最近全然勉強できていない。正直、当日イメージ通りできる自信がない…というどうしようもなく弱い自分もいました。過去の準備不足・共有不足ゆえに失敗したトラウマがよみがえってきていました。でも、ここでまた弱気になったらかっこわるい自分のままだ。どんなに人が少なくても、自分の準備が足りないかもしれないでもやるという決意をしました。

天気予報をこまめにチェックしては振り回されるを繰り返し、自然にはかなわない…という基本的な真理も痛感しました。それでも、翌日にはできそうだという感じになっていきました。翌日はできそうという連絡をする際に「楽しみにしています」「順延の日もいけますよ」という声が力をくれました。楽しみにしてくれている人がいるのに、貴重な休みの時間をこれにかけてくれているのに、弱気な自分ではいられない。そう思わせてくれました。

迎えた当日、準備の間こそ、雨が降ったりやんだりを繰り返していましたが、イベント開始後は全く降りませんでした。ありがたいことに、天が味方してくれたのです。午後は日差しも強く暑すぎるくらいでした。

イベントはリハーサルもできていなかったのに、不安は多くありました。ですが、午前中の水鉄砲作りは私の想像以上に、良い交流の場になっていました。サポーターとして地域の方が3人入ってくださって、スタッフも説明したりアドバイスしたりしながら作っていきました。作った後、みんなが試しに使っていたのですが、その時のみんなのはしゃいでいる姿は忘れられないです。ああああ、私はこのためにやってきたんだと思いました。費やしてきた時間や労力、全部報われました。正直、ゲームより盛り上がっていたことは悔しいですが、なにより留学生も、日本人学生も、こどももおじさんも一緒になって水掛け合ってキャハハ笑っているのを見て幸せでした。その点においては、私の予測は間違っていなかったのです。

そのあとも、なんとか進めていって、なんだかんだほぼタイムスケジュール通りでした。本当に私の力ではありませんでした。イベント作りたくせに、いざ前に立つとプレッシャーに負けたりへまをするいつもの私とは違って、想像していたよりリラックスできて気持ちよく終わったことも奇跡です。

DONPAPAと友人の仲間も臨機応変に私の足りなかったところを動いてくれました。リーダーとしてまともに指示も出せなかったのですが、それぞれ考えて補ってくださいました。当日の暑さに柔軟に対応して、飲み物や氷、スイカも用意してくださいました。ゆいやんなんて、前日足怪我したのに来てくれてやれる範囲でやってくれたし…きっと私が気づいていないところでやってくださったこともたくさんあるはずですよ。

延期したのにも関わらず来てくださった方々（これのために2日あけておいてくださった方々）、29日ならいける！と来てくれた方々、いろんな物を貸してくださった方々（つないでくださった柴田さんも）、知恵を貸してくださったT-ACTの方々、通いすぎて顔なじみになった学生生活課の方々、急に連絡してもサインしてくれた鈴木先生、いきなりポスター持っていたのに、対応してくださったつくば市内の飲食店・公共施設の方々、何度も練習に誘ってうざがられていたかもしれない友人・知人、たまに進捗報告して応援してくれた両親。

そしてもちろん、一緒にあの時間を作ってくれたDONPAPAと同期と知り合いのおじさんの連合チームのみなさん。

リーダーとして大変頼りなかつたり、共有不足や意見交換不足でもやもやさせていたりしたのではないかと今思います。余裕がなくてすいませんでした。。。

本当にさまざまな方の後押しが重なって、あの時間がありました。私は一人ではなかった。どんな形であれ関わってくださったみなさん、わたしのわがままに協力して下さって、夢をかなえる応援をしてくださって本当にありがとうございました。

この恩を返していきたい、返せる自分でありたいと強く思います。

参加者への影響

①仲間の変化

私の本気度が伝わったのか、少しずつ動いていく人が増えていきました。準備でみんなで集まることや遊ぶ練習を楽しみ始めた人もいました。一番うれしかったのは、「関わられてよかった」と言ってくれた人がいたり、私を貫く価値観である「どんな違いも乗り越え、人と人をつなぐ」ことに共感してくれた人がいたりしたことです。私の想いが届いた人もいるんだと思うと、胸が熱くなりました。

②参加者の変化

おそらくこれだけ多様な人が一つのイベントに参加して、何かをするということはほとんどないと思います。最初戸惑っていた人もいたように思いますが、終りに近づくにつれて打ち解けていっているように見えました。

未来のプランナーに伝えたいこと

やりたいことが明確に見える人はいますぐ動いてみてください。その経験があなたを強くするはずですよ。そして、そもそも「やりたいこと」が見つからないという人も多いかもしれません。わたしもそうでした。それでもたまたまt-actに関わっていたことをきっかけに、アクティブな仲間に出会い、いろんな経験をしながら自分というものができてきたときに「やりたいこと」が見つかりました。

もし、サークルや勉強とか一応やってるけど、本気になりきれないという人がいたら、その人はきっと自分だけの理想を持っているはずですよ。だから、いろんな活動はやってるものの違和感を感じるし、なんだかやりきれないのだと私は思います。考えてみてください。今までの自分を振り返ってみてください。きっとあなたのツボがちょっとずつ見えてくると思います。あなたの自分らしさを探す旅を応援しています。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

黒田さん、飯島さん、加納さんには大変お世話になりました。困ったときに相談するといつもヒントをくださいましたし、常に応援してくださいました。支えてくださって本当にありがとうございました。

自分は何のくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● 物つくば (18021A)

T-ACT プランナー 比江森 友太 (物理学類1年)

活動目的

物理学という学問をより多くの人に馴染み親しみやすいものとし、また多岐に渡る物理学の分野、またその魅力を発表・紹介することで、物理学がどういう学問なのかを知ってもらい、また物理学の面白さを共有し、そして今後のお互いの学びに対するモチベーション向上に繋げる為。

活動計画

- ・複数人が物理学に関する発表・講演を行う。第1部と第2部に分け、第1部では物理未履修の方にも理解できる内容を一人あたりおよそ30分以内で、第2部ではおよそ1時間以内の持ち時間で物理学において専門的な内容を取り扱う。
- ・開催をある程度のスパンで定期的に行い、お互いの研究内容の発表や登壇者、聴講者を含めた繋がりを継続し輪を拡げる。

【形式】

発表制限時間の中で、発表者がそれぞれ物理学に関連した興味のある内容や分野、専攻していることもしくはその魅力などについて、スライド、もしくは黒板等を用い発表を行う。内容は物理に関連してさえいればそれ以上は問わない。各発表には10分程度の質疑応答の為の時間を設ける。

【登壇・参加者】

登壇者については筑波大学在學生、もしくは学外の方いずれも問わない。各部においてそれぞれ3人ずつ、計6人を予定している。聴講者には制限を設けず、入退自由で参加しやすい雰囲気の構築を心がける。聴講者についてはおよそ30人ほどの集まりを望みたい。

【スケジュール（簡易）】

定期的を実施する中で基本的なスケジュールを以下に設定しておく。人数、時間などは、その開催回における登壇者の人数、また進行度合いなどによって変更されることもある。

| | |
|-----------|-------|
| 1215 | 開演 |
| 1220 | 第1部開始 |
| 1220~1300 | 1人目 |
| 1310~1350 | 2人目 |
| 1400~1440 | 3人目 |
| 1450~1530 | 4人目 |
| ~1545 | 第1部終了 |
| 1600 | 第2部開始 |
| 1600~1655 | 1人目 |
| 1700~1755 | 2人目 |
| 1800~1855 | 3人目 |
| 1900 | 閉演 |

第1回の開催は7月8日に行う予定である。

活動場所

第1エリアのプロジェクター使用可能な広めの教室。

活動期間

平成30年6月14日~30年12月13日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：石山隆光（応用理工学類2年）

P：谷口裕介（計算科学研究センター）

備考

- ・予定希望人数、最低希望人数はいずれも当日に集まる人数を想定したものである。

活動報告

実際の活動内容

物理学に関する内容の講演を行った。

物理未履修のかたでも理解ができる内容で統一した第1部と、より専門的でマニアックな内容を取り扱う第2部に分けて、様々な物理学の分野における面白さを様々な切り口から発表した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒85%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

予定していたタイムスケジュールよりも90分以上早く発表が進んでしまい、後半の方で時間を持って余ってしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

本来発表する予定であったが人数などの都合上から発表を断念することになっていたオーガナイザーの石山さんが急遽発表することにし、発表にかかる時間を延長させた。しかし、それでも90分以上時間が余ってしまった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

古典物理から現代物理に渡って多様な物理の発表を通じて、物理学を学ぶことへのモチベーション、また物理学を学ぶ人どうしのコミュニケーション、また輪の構築・拡張に貢献することができたと感じる。

未来のプランナーに伝えたいこと

計画と実行は時間に余裕を持ってやりましょう。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5

● 地理つくば (18022A)

T-ACT プランナー 前田 慶陽 (国際総合学類1年)

活動目的

最近、T-ACT を活用して「〇〇つくば」と題する研究発表の場を共有する動きが見受けられます。そこで、地理分野に関しても同様に日ごろの研究成果を披露する場を作りたいと思いました。

活動期間

- ・7月14日は中止になりました。
- ・1月21日に初回の開催を予定しております。

活動内容

- ・スライド発表
- ・展示ブースによる来場者への個別説明
- ・各地のお土産試食会

【スケジュール (想定される基本的な流れ)】

13:00 開演
13:10~13:40 1人目
13:50~14:20 2人目
.
.
.

全員の発表が終了次第、個別質問タイムにて展示発表

活動場所

登壇者が各自準備を行うので、基本的には発表本番までは特別な場所を必要としません。本番ではBiViつくばのサテライトオフィスをお借りします。

活動期間

2018年6月25日~2019年1月21日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O: 宮本紫帆 (比較文化学類1年)、大森雄基 (情報科学類2年)
P: 井出里咲子 (人文社会系)

活動報告

実際の活動内容

地理に関するスライド発表 (6名)

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか? ⇒60%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

サテライトオフィスは占有できないので、全体を一つの空間としてコーディネートできなかった。動画を流そうとしたら、音声の配線がよくわからず10分程度発表が中断してしまった。

BiViのWiFiが拾えなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

音声に関しては試行錯誤しているうちに正しい配線ができた。

通信環境はスマートフォンのテザリングを使用したけど、途中で通信が止まるなどの難があった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

日ごろから「こういう勉強をしよう」と思っても「いつかしよう」で終わっていたような、そういった勉強に着手するととてもよいきっかけになった。また、30分話し続けるためには想像よりもはるかに多くの準備をせねばならず、その準備と発表を通して、研究内容そのもの知識のみならず、スライドの作り方、発表の構成など、プレゼンテーションの技能全体が高まった。「これくらいの発表量だとこれくらいの時間が必要になる」といった感覚も身についた。また、反省点としては、発表者どうしが相互に進捗をマネジメントするための機会がもっと必要であった。発表者それぞれが最終的にはとても良いものを用意できたが、ほとんど全員が直前にバタバタと仕上げる格好になってしまった。リハーサルもせずぶっつけ本番の形になってしまったことも非常にまずかった。特に機材の扱いは絶対に確認しておかないといけないと痛感した。

参加者への影響

発表者に関しては、こういった発表が初めての人が多く、自分の力量を知るよい機会になったと思う。また、今回の発表者はいわゆる“地理らしい”ことではない、たとえば地学や経営学との共通領域のような分野を取り上げた人が多かったので、聴講者にとっては「地理」の守備範囲の広さを実感することができたのではないかと思う。

未来のプランナーに伝えたいこと

運営者が無理にでも定期的集まる機会を作ったほうが結果的に楽かもしれません。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

ビデオカメラなどの機材を容易に借用できることは大きなメリットだと思った。また、様々な準備において教員の的確な助言がいただけたことは心強かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3

●「きょうだい」って何？ きょうだい支援を考えてみよう！（18023A）

T-ACT プランナー 青木 萌（障害科学類2年）

活動目的

「障害」を取り巻く諸問題の一つとして「障害のある人とその家族」に対する支援の在り方（家族支援）がある。しかし、その中には「当事者」「保護者」に対する視点は十分存在しているが、家族構成の一員である「きょうだい」（障害や病気の兄弟を持つ人）への支援という視点が欠落している現状がある。

きょうだいたちは幼いころから「ケアラー」として家族を支える一員であるが、年齢以上の役割を求められてしまい、子どもらしく振る舞うことができないことがある。

また「同胞（障害のある兄弟）」や親に対して複雑な感情を抱き、モヤモヤしてしまうが、その気持ちを親をはじめとして誰にも相談できずに一人で抱え込んでしまうこともある。

そのような場合は、きょうだい自身が大人になって生きづらさを感じやすくなり、将来についてや自分の人生についてもぬぐい切れない悩みを抱えていることが多い。

このような思いを抱えているきょうだいが多くいるにもかかわらず、「きょうだい支援」の認知度と普及率がとても低いように思われる。

きょうだいを持ちやすい不安や葛藤などの複雑な気持ち、そしてきょうだいへの支援の存在と重要性を多くの人に知ってもらいたい。

またこれからのきょうだい支援の展開を一緒に考えていける仲間を増やしたい。

活動計画

6月～8月 企画準備

- ・会場検討
- ・広報
- ・参加者募集
- ・つくば限定企画検討
- ・精神衛生に関する検討（学生相談に相談）

9月上旬 企画実施

9月末 反省及び次回イベントに向けた検討

全体のタイムスケジュール

12：00 会場準備

13：00 清田さん来場

13：30 開場

14：00 プログラム① 講演会

16：00 プログラム② きょうだい児カフェ体験会

18：00 イベント修了

イベント内容

第一部 NPO 法人しぶたね代表 清田様による講演会（2時間程度）

大阪で小学生きょうだいに向けた支援を行っているしぶたねの代表である清田さんから、きょうだいを持ちやすい気持ちやきょうだい支援の必要性について講演していただく。

第二部 つくばオリジナル企画 きょうだい児カフェを体験しよう！

つくばきょうだい支援の会ふたばが3月に開催した「きょうだい児カフェ」について誰でも参加できるスペシャル版を行う。またカフェを通して、これからのきょうだい支援に関して参加者とともに考えていく。

きょうだい児カフェとは…きょうだい児カフェはきょうだい同士で集まって、トークカードに書かれたお題（例：きょうだいについてどう思っているか、将来についてなど）に対して順番に話をしていく座談会

実施日時：9月9日（日）

参加費：学生500円、一般1000円

第2部 きょうだい児カフェ体験会について

<目的>

きょうだい支援の実際に触れてもらうとともに、第1部で学んだことについて様々な立場の人が意見交換を行い、きょうだい支援についての理解を深める。

<内容>

- ・講演会の感想（思ったことを自由に）イントロダクション 10～15分
- ・トークカードの体験 45分
 - ①最近嬉しかったこと
 - ②自分の好きなこと、得意なこと

- ③きょうだい支援に興味を持ったきっかけ
 - ④きょうだい児に対するイメージ
 - ⑤身近にきょうだいにたいして、どう接していきたいと考えますか？
 - ①・②…きょうだい自身が自分語りができる場所を作るために、きょうだい児カフェで実際に行った内容。
 - ③～⑤…きょうだい支援に対しての思いを共有するため
- ・きょうだい支援の将来について（こういう支援があったらいい、など） 30分

活動場所

筑波大学 春日キャンパス

活動期間

平成30年6月30日～30年10月1日

対象者

学生及び教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：吉本萌（障害科学類2年）、山口和紀（障害科学類2年）

P：大村美保（人間系）

活動報告

実際の活動内容

プログラム①

NPO 法人しぶたね理事長の清田様より、きょうだいが持ちやすい気持ちやしぶたねが実際にきょうだいに対して行っている支援について、分かりやすくご講演していただいた。その後、「つくばきょうだい支援の会ふたば」の結成のきっかけやこれからの活動について話をした。その後の質疑応答では参加者の方から感想や質問等をたくさん頂いた。

プログラム②

きょうだい児カフェ体験会として、3月にふたばが開催したカフェの体験会となる参加者同士の交流会を行った。参加者のほとんどが初対面という中でも、トークカードを用いて、和気あいあいとした交流会にすることができた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ①講演会で使用する資料が前日に送られてきたため、T-ACTでの印刷が間に合わなかったこと。
- ②春日キャンパスの会場まで迷った人が多数だったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ①中央図書館で印刷を行った。
- ②当日スタッフの人達にバス停と駐車場、教室前に待機してもらい案内をもらった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

0からイベントを企画して開催することの大変さを身をもって知ることができた。とても大変ではあったが、その分終わった後の充実感は言葉に表せないほどだった。貴重な経験をさせてもらったと思う。

また報連相の大切さに改めて気づかされた。

参加者への影響

アンケートより、「イベントに参加してよかった」「これからの活動応援している」といった温かい言葉を頂いた。またきょうだい支援について関心を持った、もっと知りたいといった声も上がり、良かったと思う。

未来のプランナーに伝えたいこと

イベントを余裕を持ちながら開催するには、ゆとりある計画時間と3人以上の信頼できる人手が必要なので、その準備を抜かりなく行うことが大切だと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

初めての企画ということで、丁寧に分かりやすく何から何まで教えて頂きました。また企画が煮詰まったとき、親身に相談にのって下さったりと、とても心強かったです。T-ACT を利用したこそ、今回無事にイベントを開催することができたと思っています。本当にありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



「きょうだい」って何？ きょうだい支援をきくとみょう！

つくばから“お笑い”を発信したい！（18024A）

T-ACT プランナー 荒井 怜奈（生命環境科学研究科博士前期課程1年）

活動目的

【企画発案のきっかけ】

2014年から私たちは毎年冬に、誰でも参加できるお笑いの大会「T-1グランプリ」を開催してきました。我々の当初の目的は、つくばという地には若者が多いのに、エンターテインメント施設が少ないという現状を打破するために、多くの人を巻き込んでつくばを「お笑い」で盛り上げよう！というものでした。活動を始めた1年目は参加者が10人にも満たなかったのですが、4年目には参加者が100名を超え、この4年間を通して多くの人々を企画に巻き込むことができました。また、2018年上半年期に行った「筑波大学に『お笑いサークル』を作ろう！」では、「つくばお笑い集団 DONPAPA」という団体をつくりあげ、月に1回の居酒屋で行われる音楽イベントでのMCや、つくばのチャリティ団体からのお笑いライブの依頼をいただき、つくばをお笑いでどんどん盛り上げられることができています。

このように今までは、つくば“を”お笑いで盛り上げてきましたが、今回はつくば“から”お笑いを盛り上げたいと考えて今回「つくばから“お笑い”を発信したい！」という企画を発案しました。これを達成するために以下の企画を具体的に想定しております。

【全国統一大学生お笑いテスト】

今年で4年目になる企画です。これはお笑いを1つの科目と捉えたテストであり、問題に対する回答が面白ければ面白いほど点数があがるというものです。一昨年までは筑波大学内でのみ配布、回収を行っており、去年からつくば外に配布、回収をはじめました。しかし去年はまだ岐阜県と愛知県までしか到達できていませんでした。なので、今年は北は北海道、南は沖縄まで、この「全国統一大学生お笑いテスト」を届けることで、つくば発のお笑いコンテンツを全国に発信していきたいと考えております。

具体的には47都道府県に存在する大学内のお笑いに関わるサークル（例：北海道大学落語研究会）にテストの回答を依頼し、日本郵便のレターパックライト（360円/パック）でテストを30枚ほど郵送し、回答して頂いたテストの画像をメールで送っていただこうと思います。そして、集まったテストの採点をし、どの県がもっとも点数が高いかを決定し、全国おもしろ都道府県のランキングを作りたいと考えております。最終的には得られた優秀な回答と、ランキングをまとめたフリーペーパーを作成し、配布をする予定です。

【つくばお笑いグランプリ2018の宣伝のためのライブ】

つくばお笑いグランプリ2018の一ヶ月前の10月に筑波大学内に宣伝を大々的にするためにお笑いライブを行います。目的としては同じ大学の学生が舞台上で漫才・コントをしている姿を見てもらい、観覧者である学生に「自分もお笑いができるかも！」と感じてもらって、つくばお笑いグランプリ2018へのエントリーを増やしたいと思います。

【つくばお笑いグランプリ2018】

日時：11月11日（日）会場：つくば市立ノバホール小ホール ※予約済 11月11日午前9時～午後10時日程

- 9：00～14：30 会場設営 & リハーサル
 - 9：00～12：00 会場設営
 - 12：00～14：00 リハーサル
- 14：30～17：00 本番
 - 14：30 開場
 - 15：00 開演 & オープニング
 - 15：20 前半～5組
 - 15：50 10分休憩
 - 16：00 後半～5組
 - 16：30 閉会式優秀賞者への表彰
 - 17：00 片付け開始
 - 18：30 完全撤収

1組5分を持ち時間とし、漫才・コントなどお笑いを披露します。誰でも参加することができる大会で去年は筑波大学生、他大学の学生、一般の方、プロの芸人さんがエントリーフォームを通して7組、エントリーをされました。

観覧者は筑波大生、つくば市民の方を予定しております。なお、参加費、入場費は無料です。

今年の目標は2つあります。1つ目はつくば市の参加者を200名以上にすることです。

2つ目は協賛を取る手法を確立することです。今年は優勝賞金を過去最大の5万円に設定するため、1口3000円で、つくば市内の飲食店などの店舗に協賛をお願いしようと考えております。協賛していただけた店舗様へはフリーペーパー内での名前の記載などを予定しております。団体として初めての試みですので、T-ACTのコンサルタントの先生方のご助言をいただければと思っております。

活動計画

一週間に一回のミーティングを開催する。

【7月】企画承認終了後

- ・『つくばお笑いグランプリ2018』エントリー開始・受付（以降、継続）
- ・『第4回全国統一大学生お笑いテスト』の問題公表・配布・回収（以降、継続）
- ・企業協賛募集（以降、継続）
- ・つくば市の居酒屋での音楽イベントでのMC、この際に『つくばお笑いグランプリ2018』の宣伝もさせていただく（以降、継続）

【10月】

- ・(10/6) お笑いライブ（お笑い集団 DONPAPA の会員による漫才、コント、フリップ芸など）

【11月】

- ・(11/11)『つくばお笑いグランプリ2018』開催 ノバホールにて（既に予約済み）

【12月】

- ・全国統一大学生お笑いテストの優秀回答をまとめ、フリーペーパーの作成（以降、継続）

【1月】

全国統一大学生お笑いテストの優秀回答のフリーペーパーを配布

活動場所

ミーティング→筑波大学内のセミナー室などつくばお笑いグランプリ2018→ノバホールなど

活動期間

2018年7月25日～2019年1月25日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：川合福太郎（社会学類1年）、荻原宏太（工学システム学類1年）、長谷部紫苑（生物資源学類1年）、木崎由実子（芸術専門学類2年）、前川正樹（人文学類2年）、池上雄紀（生物資源4年）、小林陽一郎（数理物質科学研究科博士前期課程2年）、大草有里枝（国際総合学類4年）川崎俊輔（生命環境科学研究科博士前期課程2年）、森誠（生命環境科学研究科博士前期課程2年）

P：林良樹（生存ダイナミクス研究センター）

活動報告**実際の活動内容****【7月】**

- ・『つくばお笑いグランプリ2018』エントリー開始・受付（以降、継続）
- ・『第4回全国統一大学生お笑いテスト』の問題公表・配布・回収（以降、継続）
- ・つくば市の居酒屋での音楽イベントでのMC、この際に『つくばお笑いグランプリ2018』の宣伝もさせていただいた

【8月～9月】

- ・協賛の相談と電話でアポ取り、営業。いずれも1～4人で集まり、所要時間1時間程度

8/1、8/7、8/8、8/9、8/21、8/22、8/24、8/25、8/29、8/30、9/1、9/3、9/4、9/5、9/21、9/23、9/27、10/3、10/9
→合計19日間で協賛金を集めた

【10月】

- ・(10/6) お笑いライブ（お笑い集団 DONPAPA の会員による漫才、コント、フリップ芸など）
- ・つくば市の祭りにて、イベントの広報を行った。

【11月】

- ・当日のリハーサルを数回行った。
- ・当日に使う、美術作成
- ・(11/11)『つくばお笑いグランプリ2018』開催ノバホールにて

【12月～】

- ・全国統一大学生お笑いテストの優秀回答を決定中
- ・協賛店への報告書作成中

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

筑波大学の学祭が終わってから1週間後に本番だったので、美術を作るのが大変だった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

メンバーで力をあわせて作りきりました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

- ・初めてのプランナーとして、協賛のシステム作りに主体的に行動できた。5人のチームで目標金額を達成できたのが誇らしかった。この経験からタイムスケジュールとお金の管理の能力を身につけられた。
- ・運営側のスタッフが楽しめるように意識した。例えば、1m長のキリンの被り物を一緒に作ることで、新しいメンバーとの親睦を深めることができた。さらに、普段はメンバーは嫌がるのだが、キリンを被ることで、ピラ配りへの積極性が高まっていたのがよかった。

参加者への影響

川合「司会として場を盛り上げるという貴重な経験ができたほか、当イベントの準備の段階からつくばの様々な方と接することができ、つくばのことを以前より知ることができました」

荻原「つくば市を盛り上げる一大イベントに参加できてよかったです。非常に長い時間をかけて準備をしたので、本番でお客さんが非常に盛り上がり達成感を感じました」

川崎「とても盛り上がり、演者やお客さんだけでなくスタッフ側にとっても楽しい企画になったと思います。成長できた部分は、ピラ配りなどでいろんな人に話しかけることを通じて人見知りなどを少しは改善できたと思っています。」

大草「当日のお手伝いとしてピラ配りや案内をさせていただきました。微力ではありましたが、自分にできることは何だろう？と考えて動くことができました。少しでも関わることができてよかったですし、楽しかったです。」

木崎「大きなイベントのお手伝いをするのは初めてだったので、新鮮で良い体験ができました。いろんなお仕事を通して、自分で考えて行動する力が少しついたと思います。」

池上「自分は当日の運営からお手伝いさせていただいたが、スタッフ側も楽しむことのできる空気感があり、非常にありがたかった」

小林「5年目になる企画だったが、初めて協賛を募り、沢山の社会人と企画を繋げることができたことに充実感を得て、社会人になる心構えができた」

前川「多くのお客様の前で、司会やネタをやることができ、貴重な体験をすることができた。また、出場者などとも関係を深めることができる良いイベントを運営することができて良い経験になりました」

森「大きなイベントの運営スタッフという貴重な経験ができて光栄でした。キリンピラ配りを通して、色んな人とコミュニケーションを取る力や物事に挑戦する力が身につきました。たくさんの人と楽しく関わることができて、闇に沈んでた心が救われました」

長谷部「つくばに来て、初めて大きなイベントに関わった。協賛をいただくにあたり社会人として必要なマナー、スキルを手に入れることが出来た。ピラ配りによって他人とのコミュニケーションを得ることが出来た。当日は照明を担当し、場を作っていたことを実感できた」

未来のプランナーに伝えたいこと

忙しくても、計画をきちんと立てれば、良い企画を作り上げることができると思います。忙しさを理由に諦めず、頑張ってください！

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

学内にあるT-ACT推進室用のピラ置き場に、「全国統一大学生お笑いテスト」を置かせて頂けたこと。また、たくさん印刷をさせて頂き、ありがとうございました！

今後どうぞよろしく願いいたします。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



第4回小中学生将棋大会 (18026A)

T-ACT プランナー 梅田 大聖 (社会工学類2年)

活動目的

参加者を小中学生に限定した将棋大会を開催し、若い棋士たちに日々の鍛錬の成果を試す場を提供すること。また、ボランティアとして参加する大学生たちに子供とのふれあい・イベントの企画運営の体験という学習機会を提供すること。

活動計画

事前の募集で32人の参加者を募り、当日は5回戦のスイス式トーナメント戦になる将棋大会を行う。事前準備は筑波大学将棋部が中心となり行う。過去大会のノウハウを活かし、プログラムの策定、広報、参加者の募集などを計画的に実施する。筑波大学 T-ACT を通じた大学生ボランティアも募集し、当日は大学生10名程度のボランティアとつくばボードゲーム愛好会の市民ボランティアにより、受付・審判等の運営を行う。

平成30年6月 (広報活動開始)

7月初旬 (募集開始)

8月初旬 (募集締め切り)

8月11日 (イベント実施日)

12:30~ 受付開始

13:00~13:30 一回戦

13:40~14:10 二回戦

14:20~14:50 三回戦

15:00~15:30 四回戦

15:40~16:10 五回戦

16:20~17:00 エキシビジョンマッチ

10月 (反省会・報告書作成)

活動場所

つくばイノベーションプラザ 大会議室

活動期間

平成30年6月1日~30年10月31日

対象者

学外者

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O: 小野元 (システム情報工学研究科博士前期課程1年)、大森想 (地球学類2年)、川越敦 (工学システム学類3年)、桑原正宗 (化学類2年)、小山寛人 (社会学類3年)、中山香介 (数理物質科学研究科博士前期課程2年)、西沢奏 (芸術専門学群1年)、平松樹 (応用理工学類3年)、森賢太郎 (応用理工学類3年)

P: 寺田康彦 (数理物質系)

活動報告

実際の活動内容

筑波大学将棋部の部員が主催者となって小中学生限定の将棋大会を開催した。

ホームページで登録という形で参加者を集め、参加費1000円を大会当日に徴収した。会場はつくばイノベーションプラザの大会議室を借りた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか? ⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

1. 大会の細かい規定について一つ周知を忘れており、参加者が少し揉めることがあった。
2. 記念品の賞状に記載ミスがあった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

1. 最初の対戦が終わった段階でその規定を参加者全員にアナウンスした。

2. 後日、正しく記載された賞状をお詫びの品とともに郵送で送った。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自分がプランナーとなってイベントを企画するというのは今回が初めてで、計画段階では気づかなかった問題点がイベント当日に見つかるなど改善点が多く見られた。また、今回の企画は規模としては小さいものだったが、それでも企画実施にあたって様々な人やお金が動いているというのをプランナーという立場になることで改めて認識した。

保険加入など世の中の仕組みについて学ぶ機会も得られるいい体験だったと思う。

参加者への影響

イベント本番はオーガナイザーとして運営の協力を尽力してくれた。トラブルが起きた時もすぐに連絡をくれるなど、部員同士の連帯感もより一層強くなったと思う。

未来のプランナーに伝えたいこと

何かイベントを企画して計画を立て、それを実行するというのはそう容易いことではなく、時には失敗してしまうこともあると思う。しかし、その経験も全て自身を成長させてくれるきっかけになると思うので、ぜひ頑張ってください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

指導教員の方々が親身に話を聞いてアドバイスをくださったので、何か困ったことやよくわからないことがあった時に気軽に相談しに行くことができたのは良かったと思う。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● 筑波大学非常用備蓄品倉庫って知ってる (18027P)

T-ACT プランナー 菅野 昭 (総務部リスク・安全管理課)

活動内容

筑波大学では、未曾有の東日本大震災後、学内に非常用備蓄品倉庫を常設し、非常発生時へ備えて飲料水、ドライフード等々、学内に15か所設置している。

年に1、2回賞味期限(5年保存)が切れる前に飲料水、ドライフード等々を防災訓練参加教職員・学生に配布している現状である。

そこで、いざという時に備えて、学生にも備蓄品の選定などまで関わってもらいゆくゆくは学生の意見を参考に備蓄品そのものを考察する方向である。

さらに、このような活動を通じて、コミュニティに求められる災害に対するマネジメントの一端を体験的に学んでいただきたい。

また、備蓄品倉庫の設置場所、保管しているもの理解を深めていただきたい。

最後に備蓄品の補充品については、東北被災地域を支援する意図からも被災地の中小企業から購入し、大学として地域貢献度を高めることも目標にある。

参考：大学地域貢献ランキング・・・筑波技術大学は掲載があっても本学該当なし。県内常総市は取扱い企業が探せなかった。

活動計画

- 7月～8月 興味、関心があり協力してもらえる学生の公募
(全学類・研究科の正規生 10名程度)
- 8月～9月 備蓄品倉庫の下見
(リスク・安全管理課とオーガナイザーでの定期的な意見交換)
- 10月 備蓄品倉庫へ搬入する時期の確定、消費期限が切れる備蓄品洗い出し
- 11月 企業から新規購入した備蓄品を倉庫へ運搬搬入作業
(企業～数回に分けて2か所へ納品 本部北、体育芸術地区)
- 12月 活動内容の振り返りを行い、次年度開催に向けて反省会
(オーガナイザーへの非常用備蓄品贈呈を検討)

活動場所

本部棟4階 総務部リスク・安全管理課前、打合せテーブル
予約が取れない場合、本部棟内会議室

活動期間

平成30年7月30日～30年12月10日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：川崎俊輔(生命環境科学研究科博士前期課程2年)

P：木村めぐみ(リスク・安全管理課)

活動報告

実際の活動内容

未曾有の東日本大震災後、学内に非常用備蓄品倉庫を15か所常設し、非常事態発生時に備えて飲料水、ドライフード等々を備蓄している。年に1、2回賞味期限(5年保存)が切れる前に飲料水、ドライフード等々を防災訓練参加教職員・学生に配布している状況である。

そこで、いざという時に備えて、学生にも備蓄品の選定までに関わってもらい学生の意見を参考に備蓄品そのものを考察する。

さらに、このような活動を通じて、コミュニティに求められる災害に対するマネジメントの一端を体験的に学ぶために、プランナー・オーガナイザー・パーティシパントと共同作業を行った。

また、備蓄品倉庫の下見を含めて設置場所、保管してある物品等の理解を深めていただいた。なお、備蓄品の補充品については、東北地方被災地域を支援する意図からも地元中小企業から備蓄食料品を購入し、大学として地域貢献度を高める目標達成に貢献する。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒60%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

非常用備蓄品を購入する上で被災地域の取扱い企業を見つけ出すこと。

また、大学への納入実績がないことから納品、搬入までのプロセスに困難した。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

未曾有の東日本大震災後に硬式野球部が東北地方に被災地支援を行っていたことにより、本学 OB からの紹介で地元の中小企業を見つけられた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

リスク・管理業務に4月～着任し、事前の防災について、新聞・マスコミ報道等に過敏になり、できることは事前に前に進むことの大切さを体験している。

参加者への影響

本学学生にとって、当たり前に関防訓練参加で防災備蓄食料の供与があったことが、5、6名からオーディエンスされることでサークルのメンバー200名、研究科の先輩、後輩に伝えてもらうことを必須とし、尽力いただき今後期待したい。

未来のプランナーに伝えたいこと

これは手始めで、本学学生であれば違った尺度からさまざまな発想が湧いて、実行していただきたい。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

期間限定、スポット的に活動ができることが素晴らしいのであるが、学生にとって T-ACT の活動を年次毎にアンケート等を取り、改善・改良することも必要ではないでしょうか。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒4

Library for all (LiFA) (18029A)

T-ACT プランナー 福嶋 一菜 (知識情報・図書館学類1年)

活動目的

きっかけ：図書館概論の授業で「国境なき図書館」の活動を知った。国境なき図書館とは、メディアに触れる機会の少ない国や地域に Ideas box と呼ばれるキットを持っていき、その国の人々に本やタブレットなどのメディアを提供する NGO 団体である。その後、同学類の友人の「学園祭で、国境なき図書館の真似じゃないけどキットみたいの作ってやるの楽しそう」というツイートを Twitter 上で発見した。また、プランナー福嶋は「本」を介したコミュニケーションを取る企画を作りたいと考えており、実現化の話を持ちかけた。

目的

- ・大学生が短時間でも読書に触れる機会の提供
- ・地域の人と大学生の「本」を介したコミュニケーションの場の提供
- ・様々な人が「新しいこと」を知る機会の作成
- ・堅苦しくない形での「読書推進運動」への貢献

活動計画

企画概要

企画において行うことは大きく二つある。一つ目はコミュニケーションの場において必要となる、Ideas box を基にした移動可能なキットを作成することである。二つ目は、実際に参加者が「本」を介したコミュニケーションを取るためのイベントを開くことである。

【キット作成】

キット作成期間：9月中

キットについて：キットはイベント時に午前の部と午後の部で空間の雰囲気を変化するように作成する（例：午前の部では参加者が喋りやすいように、午後の部では読書しやすいように等）。空間の雰囲気を変化させることで午前の部は本嫌いでも参加しやすく、午後の部は読書しやすいようにする。

【イベント詳細】

開催予定日：11月23日（金）

対象：性別、国籍、年齢、本嫌い等を問わない全ての人

場所：筑波大学内の屋内。現在は情報メディアユニオンのユニオン講義室（情報メディアユニオンの204）、大学会館、体育館等から選択することを検討している。

内容：イベントは一日かけて行うものとする（スケジュールは後述）。大きく午前の部（Matsuri）と午後の部（Silent）でイベントの主旨を変える。

午前の部においては、実際に「本」を介した人と人のコミュニケーションを図る。以下のワークショップのなかからいくつか選択し、組み合わせる。

- ・ピブリオバトル
本来のピブリオバトルのほか、以下のような参加者形式に種類を分ける
- ・「キャラへの愛を叫べ！」…参加者が自分の好きな登場人物への思いや、好きなポイントを語る。
- ・「他学へ薦める『この一冊』」…学生の参加者が自分の所属する学類生以外は読んでいなさそうな本を紹介する。
- ・「作者を超えろ！『俺のが面白い』」…読み終えた本の内容に対して「自分ならこう言う内容、オチにする」と言う内容を語る。

参加者は事前に企画の公式 SNS（Twitter、Instagram 等）や市のイベント広報誌等にチラシを置かせてもらうことで募集するものとし、参加者に準備をしてきてもらう。

- ・想像力のリレー（ヨシタケシンスケ著：『あるかしら書店』参考）

まず、筑波大学の文芸部などに協力を依頼し文学部学生が作成した本の表紙、題名を企画運営側が提示する。参加者は与えられた情報から本の内容を想像し、紙に記入する。記入後、紙を1冊の本にまとめキットに収納しそれぞれの「想像」を共有する。興味が湧いたら、参加者は午後の部で基となった本を読むことができる。

- ・POP作成

午前の部に参加した参加者、自分が薦めたい読み物がある人がそのPOPを作成する。作成後、共有する。

参加者が承諾すればイベント終了後、LiFA 公式の SNS 等で取り上げる。その他イベント内容を検討中。

午後の部においては、参加者は自分の飲み物とお菓子を持参し読書をする。午前の部で紹介した本等も読めるように事前に準備をする。読むものは「本の形をしたもの」とする。「本の形をしたもの」は絵本、漫画、雑誌等を含む。これは、本嫌いの人でもイベントに参加しやすくすることを目的として設定したものである。また、途中退出、読み物の変更は自由である。

スケジュール

9月：キット作成

10月：イベントに向けて準備
 11月23日：イベント開催
 10時～11時 午前の部（Matsuri）ビブリオバトル
 11時～12時 想像力のリレー
 13時半～15時 午後の部（Silent）
 15時半 イベント終了

活動場所

キット作成：オーガナイザーの家など

イベント開催：筑波大学内の屋内。現在、春日エリア内のユニオン、大学会館、体育館等を検討している。

活動期間

2018年9月1月～2018年11月23日

対象者

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：中村紗彩（知識情報・図書館学類1年）、佐藤祐吾（知識情報・図書館学類1年）、有林沙央（知識情報・図書館学類1年）、小野寺晃汰（知識情報・図書館学類1年）、土谷真子（知識情報・図書館学類1年）、坂本遥彦（知識情報・図書館学類1年）

P：後藤嘉宏（図書館情報メディア系）、吉田右子（図書館情報メディア系）

活動報告

実際の活動内容

スケジュールに時間がかかったため開始が11時からとなった。

また、参加者が集まらなかったためスケジュール通りに進めるのではなく、参加者が参加し次第やりたいものを選んでもらう形式となった。

行った内容は、企画書に記入した内容のほかに本に関するテーマで大喜利を行う「文学大喜利」を行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒30%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

人が中々集まらなかったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

途中で外に出て、イベントを行う旨を伝えた。絵本の読み聞かせを伝えたところ、親子連れの家族が何人か集まった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

一言で言うと、苦い体験でいい経験になった。

まず、雙峰祭と企画を同時進行で進めることに無理があったように思う。雙峰祭の規模を知らない中で出店したため、収入はギリギリ黒字のようなものであった。また、雙峰祭は提出書類や出席義務のある会議が多かったため企画をよりよくするために十分な時間をかけられなかった。

次に、自分の能力の至らなさに歯がゆくなるが多かった。一番歯がゆさを感じたのは、仕事の分担ができないこととオーガナイザーのやる気をうまく引き出せなかったことである。つくづく、自分は管理者ではなく企画提案者に過ぎないことを思い知らされた。団体行動ではそういった役割を担って行くべきだと感じた。

参加者への影響

参加した人々には豆本という存在や、想像力のリレーを通して新しい本との触れ方を伝えられたと思う。

また、絵本の読み聞かせではこどもとの触れ合いを通して参加者だけでなく、オーガナイザーも練習と本番との差を知ることができたように思う。

未来のプランナーに伝えたいこと

人に仕事を振るのは大切です。それが、企画運営として一番重要です。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

企画実施のうえで助かった点はいくつもある。まず、サポートスタッフの方々には色々とアドバイスを頂いた。わからないことが多かったためとても心の支えになった。精神面でも話を聞いてもらえて助かった。また、広報の面ではやはり無料で印刷機が利用できるのは心強かった。途中で印刷制限がついたものの、十分な量が確保されていると感じた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒2

● プロジェクト√ (18030A)

T-ACT プランナー 三田村 美穂 (国際総合学類4年)

活動目的

本企画の目的は、筑波大生が筑波大学出身の OBOG の方の多様なキャリアや生き方・価値観に触れて自己のルーツを発見し、将来について考えるきっかけづくりを提供することです。この企画を始めようと思ったきっかけは、私自身が就職活動を通して多様なキャリアに触れ、自己のルーツ（過去）を辿る大切さを学び、多くの人とその経験を共有していきたいと思ったからです。最終的な目標は、自己の生き方や価値観を真剣に考えキャリアを積まれた先輩方の考えに触れ、グループワークを通して自分の言葉で自己のルーツを掘り下げ、自己理解が深められることにあります。

活動計画

【イベント概要】

- ・日時：11月22日（木）18：30～20：45
- ・場所：筑波大学中央図書館2F チャットフレーム C
- ・企画内容：イントロ、動画上映、講演、グループワーク

【イベント当日のスケジュール】

- ・18：15 社会人の方は中央図書館スターボックス前に集合
- ・18：30～ イン트로ダクション、社会人の方のご紹介
- ・18：45～20：00 インタビュー動画上映（一人あたり5分以内）、講演（一人あたり10分以内）
- ・20：00～20：45 グループワーク
- ・20：45 イベント終了

【当日までのスケジュール】

- 9月 インタビュー対象者の決定及び取材
現在、数名の社会人の方と交渉をしています。10月までにインタビュー対象者を決定する予定です。
- 10月 動画編集、宣伝・広報、インタビューのリハーサル
ポスターやピラ配り、Facebook を使った宣伝・広報を開始致します。
- 11月 宣伝・広報

【社会人インタビュー】

当日お越しになれる社会人の方については、当日学生と対話できる形でお話して頂く予定です。遠方の方や当日お越しするのが難しい社会人の方については、事前にインタビューに伺い、撮影した動画を当日上映する予定です。質問項目については現在検討中で以下の8つの中から5つを選ぶ予定です。

- ①なぜ、今の仕事をしようと思ったか
- ②学生時代はどんなことをしてきたのか
- ③今まで経験してきた仕事の中で最も楽しかったこと、最も大変だったことは何か
- ④今の自分が仕事を頑張るモチベーションは何か
- ⑤これから5年後、10年後に成し遂げたい夢は何か
- ⑥自分の人生を通して大切にしている信念は何か
- ⑦自分にとって幸せ・いきいきしている状態とは。また今の仕事でそれを感じる瞬間
- ⑧他でもない自分が今の仕事をやる意味

【グループワーク】

当日1グループ4、5人のグループを作って頂き、グループワークを行います。グループワークの内容は、社会人の方のお話を聞きながら学生がメモをしたシートをもとに印象的だった言葉や考え方を個人で整理した後、グループ内で意見交換をします。学生が「なぜこの言葉、考え方が印象的だったのか」を考えると、その考えに至る過去の出来事が必ずあり、それこそが自己の価値観や考え方を形成したルーツに当たると考えています。自分の中にあるルーツを再発見し、将来を考えるきっかけを作りを提供します。

現在第二弾の企画も検討中ですが、日時や内容に関しては未定です。

活動場所

中央図書館

活動期間

2018年9月1月～2019年2月28日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：大草有里枝（国際総合学類 4 年）、伊藤春花（体育専門学群 4 年）、岩本怜士（体育専門学群 4 年）、川村直也（体育専門学群 4 年）、木村開（国際総合学類 4 年）、木嶋公亮（国際総合学類 4 年）、川合真緒（国際総合学類 4 年）

P：白川直樹（システム情報系）

活動報告**実際の活動内容****【イベント概要】**

「多様な価値観や考え方に触れて、自分のルーツを発見しよう」をコンセプトに11月22日に中央図書館においてイベントを実施しました。

- ・企画名：プロジェクト√（ルーツ）
- ・日時：11月22日（木）18：30～20：45
- ・場所：筑波大学中央図書館2F チャットフレーム C
- ・企画内容：イントロダクション、インタビュー動画上映、社会人の方のパネルディスカッション、グループワーク

【インタビュー動画、パネルディスカッション】

- ①仕事を選んだ理由と人生のモチベーションを一言で
- ②自分がその仕事をやる理由、続ける理由
- ③嫌な状態、ワクワク・生き生きしている状態・瞬間（5W1H）
- ④人生のターニングポイントとなった出来事
- ⑤将来やりたいこと、またその実現にむけて日々大切にしていること

の5つの質問に対し、社会人の方にそれぞれ話して頂きました。5つの質問項目の意図や目的に関しては、過去の出来事や経験と絡めながら社会人の方の“価値観”や“考え方”が最も伝わりやすいという点を重視して選びました。

【グループワーク】

1 グループ2～3人でグループをつくり、インタビュー動画やパネルディスカッションを通して、社会人の方のお話を聞きながら学生がメモをしたシートをもとに、印象的だった言葉や考え方を個人で整理し、グループ内で「なぜこの言葉、考え方が印象的だったか」など意見交換をしました。

【イベント当日までの流れ】

6月頃にイベントの構想を立て始め、T-actの職員の方に相談し始めました。具体的な内容や計画もこの時期に徐々に計画し始めました。7月頃には、運営メンバーを集め、月に3回ほど中央図書館でミーティングをしながら、運営メンバー内でコンセプトを共有しました。8月頃にも引き続き、コンセプトを確認しながら、社会人の方との交渉を始めました。9月頃には、イベントに協力して頂く社会人の方が確定し、打ち合わせを始めました。と同時に運営メンバー内では、動画撮影や実際のグループワークの練習も始めました。10月頃には、つくば市内や東京にいる社会人の方にインタビューをしに活動したり、中央図書館で学生を6名ほど集め、グループワークのリハーサルを行いました。11月頃には、ポスターやビラなどを使った宣伝・広報活動を始めました。また、運営メンバーを始め、当日イベントに協力して頂いた学生の間で当日のリハーサルや打ち合わせを始めました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

イベント当日において、音響のトラブルがあったり、アナウンスミスで会場が混乱してしまうことがありました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

音響トラブルは、マイクなしで対応し、アナウンスミスは、各班ごとに運営メンバーが個別で説明することで解決しました。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

様々な人と触れ合い、良い方面でたくさんの刺激を受けられた体験となりました。私自身これまでイベントを企画したことがありましたが、これほどたくさんの方に協力して頂いて、自分が主体的に動いた経験はありませんでした。実際に今回の企画を行ったことで私自身にいくつか変化がありました。一つ目は、人とのつながりを

より大切にすることになったことです。今回の企画では、T-act 関係者様を始め、社会人の方や、大学でお世話になっている先生方、大学の友人や知人の方など本当に幅広い人たちに助けられました。そのため、今度は自分が誰かのために動きたいと思うようになり、これまでの人とのつながりを大切に、また新しい人とは積極的に交流を図るようになりました。二つ目は、行動力がついたことです。今までは、考えてばかりで行動が追いついていませんでしたが、企画を行ったことをきっかけに、「迷ったらまずは動く」という行動力が身につきました。行動してみることで新しい発見も多くありました。三つ目は、自分の思いや考え方を大切にすることになったことです。今回の企画を通じて、改めて思いの大切さを実感しました。様々な壁がある中でも自分の「やってみたい」という気持ちを大切に、挑戦していきたいと思うようになりました。

参加者への影響

参加者からは、人との出会いの大切さ、行動することの大切さを学んだという声が多く、また企画を通じて、自分の知らない一面を知ったり、今の自分や理想について考えが深まったなど新しい発見を得た学生も多くいました。

未来のプランナーに伝えたいこと

- ①自分と関わる全ての人に感謝の気持ちを忘れない
- ②自分の気持ちを大切に。何があっても最後までやりきる気持ちが大切。
- ③情報共有が大切。どんなに些細なことでもラインやメールなどで情報を共有する。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

- ① T-act の職員の方々が真摯に相談にのってくれること
- ② T-act で活動している他の団体の方と交流できること
- ③ペンや紙などの備品の貸し出しを行っていること

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● インプロをやろう！ (18032A)

T-ACT プランナー 岩川 光一郎 (教育研究科修士課程1年)

活動目的

インプロとは、舞台上で台本なしで演じられる演劇のことである。初めて出会った人間が国籍や思想や宗教が違っても演じることのできる、言語・非言語などの豊かなワーク（活動）を含む活動である。

このインプロには大きく2つの方向性がある。1つは、本来の目的である台本のない演劇の上演に向けた演劇としての方向性である。2つ目は、前述の豊かなワークを、コミュニケーションや教育などに応用していく方向性である。

そこで、対象者を大まかに、1. 教育に興味のある学生 2. 演劇系の部活動、サークルを行っている学生と定める。

集まったメンバーで、インプロをある程度の期間体験し、深めることでインプロとは何かを理解していきたい。

活動計画

活動は次の流れで行う。

1. ワークショップ (1回目11/22 (木)・2回目11/27 (火)、3回目12/4 (木) 時間帯は、平日6限終了後18:30~20:30 場所は、文系修士棟2F 8B210教室) 第1回目 「オファーとアクセプト」

目的: 人と関わること。コミュニケーションとは何かについて、インプロのゲームを使って知る。非言語(一部言語使用)でのコミュニケーションを行うことによりコミュニケーションの要素がいったい何なのかを身体で理解する。

内容: 実際には無い見えない物(小さいボール・大きくて赤い玉 etc.)を参加者でキャッチボールする・拍手を回す・円を作り「あなた」と呼びかけ、受け取った相手が「はい」と答えて呼びかけた者が相手に向かって歩く、その間に呼ばれた者が「あなた」と他の参加者に呼びかけ相手の「はい」を聞いて歩く

参加者が得て欲しい体験: コミュニケーションは、働きかけ「オファー」と受け取る「アクセプト」の連続で成り立っていて、「オファー」は相手の「アクセプト」があって初めて成り立つということ

第2回目 「イエスアンド」

目的: 仲間のアイデアを大事にして自分のアイデアで世界を膨らませる。言語を使用した活動を行うことにより相手のアイデアを尊重して自分のアイデアを付け加えることにより楽に自分のアイデアのみでは到達できないアイデアを得ることができることを知る

内容: あるお題について「知ってるよ」と答え話を続けさらにそれに対して「知ってるよ」と言って続ける。・「あなたは〇〇な人ですね」という問いかけに対して「私は〇〇な人です」と受け入れるワークに続けて「私は〇〇な人です」だから「□□なんです。」と話を続ける。など、相手のアイデアについて否定せずに乗っかるというワークを行う。

参加者が得て欲しい体験: 自分のアイデアを大事にしがちだけどパートナーのアイデアを取り入れて尊重することで自分の思い描いていたこととはかけ離れていてさらにすばらしいアイデアに到達できるという体験を得て欲しい。

第3回目 「ストーリーテリング」

目的: 仲間と物語を作りお互いが楽しい時間を作り出す。「前回のイエスアンド」を用いた言語的な関わりにより、自分たちだけのストーリーを作ることができるということを体験する。

内容: 「ワンワード」お題に従って二人のプレイヤーが交互に1文節のみしゃべりストーリーを作っていく。このとき、たとえば「海に行く」に対して海に行くことについて理由をつけてなかなか海に行けないということに対して、私たちは現状維持して自分を守るという機能があることを実感する。・「シェアードストーリー」4人のプレイヤーで一人がディレクターになり、残りの3人がお題に従ってストーリーを話す。話すプレイヤーの指定はディレクターが指揮をし、一つのストーリーを作っていく。

参加者が得て欲しい体験: 自分のアイデアのみでコントロールできない状態に自らを置くことで新しいアイデアが生まれるということを身体で理解する体験。

以上のワークショップを、提案者の岩川のファシリテーションで行う。2. 継続者によるインプロ研究(1.のワークショップの後、11月~12月3回/月 計6回ほど)

1. のワークショップで継続的にやりたい意思の者とその都度興味を持って集まったメンバーで行う。参加者相互の希望に添ってお互いの活動を決定していきたい。

基本的に、週1回の頻度で、基本アイスブレイクのワーク+1つ題材になるインプロのワークに取り組む。

1・2の活動を行い今後の a. インプロでのショーを行うパフォーマンスを行う b. インプロをアクティブラーニングに応用させるなどの参加者の方向性を決める。その後のインプロのパフォーマンスチームや研究グループなどにつなげていきたい。

活動場所

文系修士棟 2階 8B210 (20:00には入り口が施錠されるので、参加が20:00すぎる場合は、岩川のメールまで直接ご連絡ください。)

活動期間

2018年10月1月～2019年1月31月

対象者

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O: 大林潤子 (教育研究科修士課程2年)

P: 茂呂雄二 (人間系)

備考

ワークショップに関する予算は、会場費以外特に必要としない。学内の会場に費用が発生する場合にはその実費を参加者で均等負担として考えている。ファシリテーターはプランナー (申請者) なので特に、日当等は無しで行うことができる。

また、プランナーは、岐阜県高等学校の現職教員であり、高校演劇の顧問である。インプロのワークショップファシリテーターとしての経験としては、10年ほどあり、毎日の部活動の指導と、毎年各1回の地区・県でのワークショップの経験があります。

活動報告

実際の活動内容

インプロワークショップを3回行いました。以下に概要を書きます。

3回の計画は、連続で何かをやるという形ではなく各回独立で参加可能な形態で、インプロを2時間で知るには、という視点でワークの組み立てを行いました。

第1回ワークショップ (11/22 (木) 18:30～20:30 (2h) ※途中10分の休憩) コミュニケーションの要素 (①始める②受け取る③続ける) をボールを使った、「ハートビート」相手に呼びかけて動く『『あなた』『はい』』言葉を使わないで、拍手を回す「拍手回し」などをやってみて、それぞれのワークについてリフレクションを行う。その後、個々のワークを混ぜてやってみました。

休憩をはさみ、「話す」ゲームとして、複数のペアで一斉に声を出し、自分のパートナーが何を言ったかあてて行う。

「聞く」ゲームとして、2人の人に耳元で違うお話をしてもらい、何を話したかについて振り返ることを行う。リフレクションで実は、話すゲームは「聞く」ワークで聞くゲームは「話す」ワークであることを確認した。

最後に、Dixitというカードゲームのカードを使って、占い師に悩みを聞くという演じる活動を行った。

第2回ワークショップ (11/27 (火) 18:30～20:30 (2h) ※途中10分の休憩) コミュニケーションの要素として、相手に呼びかけて動く『『あなた』『はい』』周辺視野を使って反応する「木こり (ランバージャック)」を行い、リフレクションをする。

<ワークをやるときに気を付けてみてほしいこと>直観を信じる

失敗を恐れないチャレンジするイエスアンドするということを提示して説明する。

「クイックドロウ (Two dots)」という、2人組で2つの点から顔を書き名前をつけるワークを行う。

リフレクションで、相手とどのようにかかわったかということ共有し、イエスアンドという、概念について説明する。

次のことを考えないことを気を付けてもらうように話し、2人組で「何やってるの」という、何か日常の動きをして、もう一人に「なにやってるの?」と話しかけてもらい、自分がやっていることと、異なることを言って、言われた人は言われたことをやる。

「ブラックボックス」という、空想で、相手に箱の中から物を出してもらってそれが何かを言うという活動を行う。バーチャルリアリティーができるようになってきた物が見えるようにやってもらう。

「ワンワード」という2人で一言ずつ話をして、話をつくるというワークを行う。2人で1人の人を演じるので、周りのものがバーチャルリアリティーとして見えるといいという話をしてやってもらった。

「占い師に悩みを聞く」ワークを行い、ワンワード×2組で、占い師と悩みを言う人に分かれて行った。第2回目は、リフレクションを非常に充実して行った。

第3回ワークショップ (12/6 (木) 18:30～20:30 (2h) ※途中10分の休憩)

<ワークをやるときに気を付けてみてほしいこと>を示しました。

「ウッシュパウバン」という、言葉とともに相手にパスをするというコミュニケーションゲームを行いました。

このワークは、珍しく仲間の提案（オファー）を拒否で受けることのできるワークであるということから、拒否についても考えました。

「木こり（ランバージャック）」を行いました。

シンクロとか、合意という話の流れで、「ミラー」という、2人組で鏡の中の人と実物を演じるワークを行いました。

役割を、最初は固定する。次に、合図で変わる。さらに次に合意してどちらと決めずに動く。と変化させました。このワークで、合意って意外と難しいことではないというリフレクションがありました。

「ワンボイス」という、7人一組で、同時にしゃべり1人の人間を演じるワークを行いました。

「占い師に悩みを聞く」を行いました。

「ワンボイス」を用いて、「占い師に悩みを聞く」をやりました。7人が悩みを打ち明け、7人が占い師として答えました。

第3回はかなりファシリテーターとしての私にとっても、参加者にとってもチャレンジングなワークになりました。

他人と、どのように繋がれるか、合意はどのように行うのかを説明するではなく、体験によって各人の感覚で知ることができたような気がします。

それに、付属して、リーダーシップとフォロワーシップについても、いろいろみんなで考えることができました。とても、楽しく学びの多い第3回のワークショップになりました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

基本的に1人での活動だったので、広報（ポスター作製・ポスター貼付・撤去・チラシ配り）が忙しくて、手が足りなかった。実際のワークショップの実施時間帯に、遅刻して来ていただいた参加者の対応の手が足りなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

広報に関しては、とにかく気合で乗り切りました。

ポスター作製に関しては、夏に学情の方で企画されていた Adobe のイラストレーター・フォトショップの講座にあらかじめ参加していたのがかなり自分の助けになりました。

チラシ配りは、精神的につらかったことを共有する仲間がいなかったけど、同時に配っている他の団体の方たちと話してつらさを共有したりして乗り越えました。

遅刻者への対応は、最善ではなかったような気もしますが、ワークショップのタイミングを見て、少し手を止めて対応しました。ですが、会場への来場で迷われたりした場合が出た場合は対応しきれなかったのではないかと思います。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今まで、高校生を相手に演劇の稽古の一環としてインプロワークショップを行うことが多かったが、今回、様々な参加者とインプロワークショップを行って、様々な発見ができた。

改めてインプロという活動は、自己開示を全くすることなく人をつなぐ活動であるということ。実際にやってみるに至るまでの心理的な障壁がとても低いことを改めて感じる事ができた。

また、参加者のリフレクションから、「インプロ」の活動で気を付けていることというのは、学校教育の目指すことと真逆の要素をたくさん含んだ活動であるということに気が付いた。

もしかしたら、学校の中で「インプロ」の活動は根付きにくいかもしれないということを感じた。

今回、T-ACTの活動を、やってみようと思ってやりきることができたのは私自身には非常に良い経験になった。

特に、普段インプロワークショップを行うというワークショップの面では慣れていたが、そのために人を集めるということは、自分の経験にはなく、考えられるすべての手段を使って広報をするということによって、様々な人をお願いをしたり働きかけをするということが大変であるが、自分の活動に対して、自信や責任を持つということにつながったと感じた。

やる前は全部の能力が備わっていないと無理かと思ってたけど、おじさんでもやろうと思う気持ちをなくさなければ、いろんな人が直接でも間接でも助けてくれるんだということが分かった。

また、学類生の授業でプレゼンさせていただいたり、T-ACTの活動をラジオで話をする事ができたり、活動開始当初には予想できなかった出来事がいろいろできて、本当にインプロ的に活動が進んだのが面白かった。

参加者への影響

参加者にアンケートをお願いしたので、参加者の変容がよく見えます。

インプロをあえてあまり説明せずに募集を行った今回のワークショップにどのようなイメージを持って参加して下さったかというのも分かり、ワークショップを受けてもらってやはりインプロは楽しいし受け入れてもらえる活動だということにも自信が持てた。

参加者のそれぞれが、こちらが提示した要素以外にもいろいろなことに気が付いて持ち帰っていただけたのではないかと感じられる感想を多数貰えた。

以下に、各回のアンケートの結果の抜粋を載せます。(参加者には、個人を特定できない範囲で研究や報告に使用しますと確認してあります。)

<第1回アンケートより参加者の感想>

1. インプロを体験する前のイメージはどんな感じでしたか？

即興演劇は何かを演じるというイメージで、そこには〇〇を演じないといけないという使命感があるイメージ
急に役を与えられずと続ける、演じるイメージ

まったくイメージがわからない本当に役に立つのかわからないよくわからないけどなんか面白そう…

2. 実際にインプロを体験してみてどうでしたか？楽しい、またやってみたくて思いました。

自然な感じで仲良しになることができる。

知らない人ともコミュニケーションをとって協力的にできたのは良い経験になったと思います。

自分が人と話すときにちゃんとアイコンタクトをとったり、相手を思いやる姿勢が大事だと感じた。

3. 他にインプロの企画があったら参加してみたいと思いませんか？平均4.7点/5点満点

4. その他感想等ご自由をお願いします。

もっとインプロの勉強してみたいと思いました。ありがとうございました。

他にもインプロの事例や、研究内容について興味を持った。うそをついて話すやつがおもしろかった。

他の友達にも紹介したいと思った。

<第2回アンケートより参加者の感想>

1. インプロを体験する前のイメージはどんな感じでしたか？もっと演劇要素が強いものだと思っていました。

もっと演技をずっとと思ってました。体験して終わりになってしまう

何をやるのか、何が生まれるのかに対してきんちょうして身がまえてしまいそう。インプロって何だろう。緊張する…とっていました。

2. 実際にインプロを体験してみてどうでしたか？

自分一人では思いつかないような発想が得られて面白かった。振り返りをすることで、自分が何を考えているのかわかる

ほぼ反射で動く感じでした！ドキドキしました。

考えないことが素敵な作品を生み出すことがわかった。でも、考えないことは難しかった。思いついたものを吐き出すと相手が必ず返してくれて、それが、吐き出す前はどうなるか全くわからないかったが、作品の重要な要素になっておもしろかった。

単純に楽しかった。知り合いじゃない方がやりやすい。

3. 他にインプロの企画があったら参加してみたいと思いませんか？平均4.8点/5点満点

4. 本日の内容で何かお気に入りのものはありましたか？

2人で絵を描くもの

2人で物語を作るものブラックボックス

木こりのゲーム(?)は非常に面白かったです。

5. 現在のご自分の活動や生活にインプロは何かの役にたちそうですか？就活のグループワークに役立ちそう

(反応が早くなりそう)

直観の大切さがわかったので、決断のときに役立ちそうです

「お笑い」の稽古の前にやるなど、少し活用してみようと思いました。

子供たちと接する上で、瞬間瞬間に意識をむけてコミュニケーションをとるのに役立ちそうだと思います。

6. その他感想等ご自由をお願いします。

2時間があっという間に過ぎました！

とても楽しかったです。また参加したいです。

初対面の方と2人でやるワークをすると、会ったばかりなのに一緒に作った作品を通じてすごく親しくなった感じがして楽しかったです。

初めましてで、学生から社会人までいろんな background の人が集まった空間の中でのインプロは、「人を知ること」と「インプロ」がかけ合わさって面白かったです。

<第3回アンケートより参加者の感想>

1. インプロを体験する前のイメージはどんな感じでしたか？

演劇のイメージ発声・演技など技術的なことをやるイメージでした。

何をやるんだろうと少し不安でした。初めての人とたくさん話さなくてはならないのかなと思っていました。知らない人と関わることの不安があった上手くできるか不安だった

勇気がいる緊張する

2. 実際にインプロを体験してみてどうでしたか？

皆でつくりあげていく感覚がとても楽しかったです。自分の想像をこえていくものが次から次へと出てきてわくわくしました。

言葉を介さなくても、初めての人と自然に交流することができました。複数で1つの事をやる事の難しさを身をもって知った。

意外に緊張しない

周りの人の目や一挙一動で考えていることや気持ちを「今」の視点で見られておもしろかった

3. 他にインプロの企画があったら参加してみたいと思いますか？平均4.9点/5点満点

4. 本日の内容で何かお気に入りのものはありましたか？

7人で1人役（ワンボイス）が楽しかったです。予想外の看護学するめ専攻に笑いが止まらなくなりました。

数人で1人になるワークショップ。0から1を自分だけで生むのは難しいし、限りがあるが、誰かの1音で自分の発想が生まれて音を発することができた。

“ミラー”という企画が楽しかった。相手に自分の動きをさせるのも相手の動きをまねするのも相手とうまくコミュニケーションをとる必要があったので日常生活に役立ちそう。

5. 現在のご自分の活動や生活にインプロは何かの役にたちそうですか？

自分の考えを表出することや、他人のアイデアを受け止めて、コラボレーションすることの楽しさを知ることができました。実生活でいろいろな人と協働していく時に役に立つと思います。

何かを協力してつくることにはかせそう。自分だけで突っばしる前に一度周囲を見わたす余裕の大切さを実感した。

自分は他人についていく方が多いので、お互いにリーダーをやっていくという経験ができ、それが、役に立つかもしれません。

6. その他感想等ご自由をお願いします。

楽しかったです。また、数人で占い師やりたいです。

色々な専攻や職業の人とインプロのWSに参加して、様々なアイデアがとびかかっていて楽しかった。とても楽しい時間でした。ありがとうございました。

様々な学類・学年の人と話せてたのしかった。

未来のプランナーに伝えたいこと

自分の企画に対して、やりたい気持ちがあれば必ずやり遂げられると思います。やりたいことだから大変な面もあったけど、楽しかったし、本当に充実したい思い出になりました。

気持ちの次には、TODO（時期とアクション）を具体的に、作成してチェックしていくときちんと最後まで進めると思います。

自分はできなかったのですが、飛び込みや思いつきで必要になるものに関しては、一緒に企画を進める仲間をつくっておくと、各人が余裕（時間的・精神的）を持つことができるのでいいと思いました。

是非、オリジナルの思い出をたくさん作ってください。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

おじさん一人で、やりたいことをやるという企画でしたが、本当にたくさんの方に参加いただいて、ワークショップができました。

私自身が「インプロ」というものを筑波大学でやったら、どういうことになるのかということで、“教える”ということではなく“紹介する”という立場であったので、紹介するなかで、参加者の皆さんがどんどんいろいろなことを感じたり、気づいたりしてくれるということが、自分の「インプロ」への新しい気づきがあり、大きな学びになりました。

企画をして、実行に移すということが、こんなに大変なことなのかと思いました。特に、参加者が実際に足を運んでくれるかどうかに関しては先が見えないので恐ろしかったです。そう言う意味では、本当にこれまで知り合った多くの方々に助けていただきました。どんなことも自分だけで成り立つわけではないということが身に沁みました。

T-ACTの事務局に対しての要望は、特に何もありません。これ以上を求めるとわがままになるくらい全て必要なことを提供していただきました。…と思いましたが、活動報告を作っていて、この入力フォームの項目の多さと、入力欄を広げないと中身が見えない作りは良くないです。見渡せないのも、何を書いて何を書いていないかが把握できなくなってしまいました。大したことではないですがそれくらいです。

自分はこのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● アニメ心理分析入門 (18035P)

T-ACT プランナー 田中 崇恵 (人間系)

活動目的

『アルプスの少女ハイジ』のハイジはなぜブランコに乗っているのか、『千と千尋の神隠し』の千尋はなぜトンネルをくぐるのか、『新世紀エヴァンゲリオン』のOPで碇シンジはなぜ左を見つめているのか、『魔法少女まどか☆マギカ』のママさんはなぜ早々に死ぬのか…。アニメを見てこのような疑問を持ったことはあるでしょうか？この企画では、アニメの表現について精神分析やユング心理学などの知識を用い心理学的に分析してみます。つまり、アイテムの象徴表現、物語の構造分析などこれまでとは違ったアニメの「見方」を皆さんで体験してみようというものです。アニメを表層の理解で済ませるだけでなく、1つ1つを分析しながら見ていくとそこには深く多彩な意味の世界が広がります。ものの見方は1つではなく、いくらかでもあるということを実感してもらうことが目標です。新たな視点を手にした時、自分や世界がまた新しい姿に感じられるかもしれません。(保健管理センター学生相談室「キャンパスライフセミナー」として開催)

活動計画

【活動日程】

○2018年10月広報開始(申し込み制、先着30名)

○2018年11月28日(水)ワークショップ当日

《プログラム》

・受付13:15~

・前半の部(講義)13:30~14:30

プランナーによる講義。アニメ分析に役立つ心理学の概念を提示し、象徴解釈、構造分析、ナラティブの理解などについて様々なアニメの具体例を通して学ぶ。

(休憩)

・後半の部(グループワーク) 14:45~16:30

前半の講義を踏まえて実際に短編アニメを視聴し、グループ毎に分析する。自由なディスカッションから生まれる新たな「見方」を体験することを目指す。最後に皆の前で発表してシェアリングを行う。

【準備等】・広報のためにポスター、チラシを作成。

・講義資料の準備はプランナーが行う。

・グループの発表は、0版ポストイットもしくはパワーポイントの形態をグループで選択してもらう。そのために必要なパソコン、0版ポストイット、その他文具は保健管理センターの備品を使用するため、必要経費はかからない。

活動場所

大学会館3階 第3会議室

活動期間

2018年10月23日~2018年11月28日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O:野口優子(心理学類1年)、坂戸奎太(心理学類2年)

活動報告

実際の活動内容

本企画は、アニメの表現について心理学的に分析し、参加者とともこれまでとは違ったアニメの「見方」を体験してみるというものであった。

アニメを表層の理解で済ませるだけでなく1つ1つを分析しながら見ていくこと、またほかのメンバーと自由に意見を交わしていくことで、ものの見方の多様性や奥深さを実感してもらうことを目標とした。

○2018年11月28日(水)ワークショップ当日

《プログラム》

・受付13:00~

・前半の部(講義)13:30~14:30

プランナーによる講義。アニメ分析に役立つ心理学の概念を提示し、象徴解釈、構造分析、ナラティブの理解などについて様々なアニメの具体例を通して学んだ。

・後半の部（グループワーク）14：45～16：45

前半の講義を踏まえて実際に短編アニメを視聴し、グループ毎に分析した。

自由なディスカッションから生まれる新たな「見方」を体験することを目指した。最後に皆の前で発表してシェアリングを行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒95%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ・PCやプロジェクタなどの機器の不具合によって進行が滞ったこと。
- ・もともとタイムスケジュールがタイトだったことと上記の理由によりさらなる時間の遅れ。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・機械が得意そうな子に助けもらった。
- ・実際に時間を超過させて対応したが、これは反省点。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

- ・学生さんたちのニーズがどれほどのものか未知だったので、どの程度の内容をどのように伝えるかという部分は手探りでしたが、パーティシパントの皆さんはそれぞれに興味をもち積極的に参加してくださりととてもいい体験になりました。今後もいろいろ改善できそうなところも見え、私自身も大変刺激になりました。
- ・自由にまた面白い考えを他者とやりとりできる力に感激し、筑波大生！まだまだ捨てたもんじゃないぞ！と思いました。
- ・時間配分や当日の進行で皆さんにご迷惑をおかけすることもあり、どんぶり勘定はいかんと戒めの気持ちを持ちました。

参加者への影響

- ・アニメや心理学について新たな発見をたくさんしてもらえたようで大変うれしく思います。
- ・自分の意見を自由に言うことの楽しさ、それを受け止めともらえるうれしさ、自分以外のものの見方の面白さを十分に感じていただけたようです。
- ・同様／発展形の企画をまたやってほしいという声も結構いただきましたので、どんどんこういう企画が増えるといいなと思います。

未来のプランナーに伝えたいこと

- ・好きなことを思い切ってやってみると、自分の活動のさらなる展開にもつながります。
- ・具体的な内容も大事ですが、「こういうことを伝えたい」「こういうことを体験してほしい」など活動の目標をしっかり持つと計画も立てやすいですし、達成感も得やすいかなと思います。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望など

- ・ポスター・チラシの印刷などは大変助かりました。
- ・自主性を重んじてくださったので、自由気ままにやらせていただきました。
- ・黒田先生は様々な気遣いをくださって心強かったです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

つくば MVP Vol.3～あこぎな土曜日～ (18036A)

T-ACT プランナー 飯沼 天空 (比較文化学類2年)

活動目的

つくば MVP 活動の一環として、雙峰祭でのステージパフォーマンスを目指す。

昨年は全員でバンド形式で練習をしたが、当時の反省や活動方針を踏まえ、少人数セッション形式をとる。1人または2人で、自由にのびのびと音楽を楽しむことを目標にする。

「つくば MVP (ミュージック)」は「つくば Music Variety Project (つくば音楽多様性プロジェクト)」の略。自分一人でギターの練習を始めたが、時々誰かと演奏することも楽しそうだと考えることがある。その時に、例えばドラムは軽音部でロックをやって、バイオリンはオーケストラでクラシックを演奏する、というようにそれぞれの楽器で演奏する楽器の組み合わせや曲のジャンルが固定されていることに思い至った。しかし、エレキギターでパッサを演奏することも、琴でピートルズをやってみることも不可能ではないはずだと考えた。そこで、様々な楽器(声、手拍子など、「人の身体」も含め)を一堂に会し、皆で一つの楽曲を作り上げることができたら、観客とも一緒に今までにはなかった新しい音楽の楽しみ方ができ、演奏する側も新たな刺激が得られるのではないかと思った。

1年目の2017年は、雙峰祭でのステージを目標に活動してきたが、あいにくの天候のために残念な結果となってしまった。

活動計画

火、水曜日：セッション①練習

月、土、日曜日：セッション②練習その他の時間：個人練習

・プランナー一人で演奏する楽曲の他、プランナー以外の参加者2人のそれぞれとプランナーの2名でセッションを行う。よってセッションは2組になる。上のセッション①②はそのどちらかを示す。

・11月3日(土)(雙峰祭本祭1日目) 13:30~14:30@松見池ステージ)：本番

活動場所

- ・練習は教室を使用、あるいはカラオケ店や楽器店のスタジオを使用する(費用自己負担)。現状確保できている場所はないので、参加者同士で相談して都度決定。10月20日前後から教室を使用できるよう準備する予定。
- ・本番：松見池ステージ

活動期間

2018年10月9日~2018年11月3日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O：長部世理菜(比較文化学類2年)、クレイグ聡良(生物資源学類3年)

P：小川美登里(人文社会系)、馬籠清子(人文社会系)

活動報告

実際の活動内容

カラオケや音楽スタジオを利用して、週2回程度練習をした。音楽スタジオは本番前日に使用した。11月3日(土)(雙峰祭本祭1日目) 13:30~14:30、松見池ステージでステージパフォーマンスを行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒40%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

練習場所の確保。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

前回までは教室使用を余裕をもって申請していたが、今回は直前になって動き始めたので練習したいときにできるような環境が整っていなかった。カラオケや音楽スタジオを毎回利用することで解決した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今までステージをともに作りたいと思っていたがなかなかタイミングが合わなかった知人と、今回初めてパフォーマンスができた。企画としては今までよりも規模を縮小したものになったが、その分参加者同士のコミュニケーションは密に図れたと思う。

参加者への影響

上記のようなことがあるので、参加者との今後の活動について建設的な関係を作ることができた。

未来のプランナーに伝えたいこと

経験の浅いうちは、いきなり大々的な企画を打つのもいいけれど、一度少人数で十分実現可能な企画を立てて活動してみるといい経験と今後の試金石になると思います。特にステージ系の企画は経験数が重要だと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

今までの積み重ねがあったので、本番までの進め方にはある程度の計画性と自信を持つことができた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

平成30年度茨城県警察大学生サポーター（17029V）

受入団体名：茨城県警察少年サポートセンター（13005G）

活動内容

警察では少年の非行防止を図るため、関係機関・団体・地域社会と協力をして、学習支援や各種スポーツ活動などによる立ち直り支援を行っています。特に大学生ボランティアは、少年と年齢が近く、これらの活動を通じて信頼関係が構築され、少年の立ち直りに重要な役割を果たしています。

※活動例

- ・街頭補導活動
駅周辺等のパトロール、ゲームセンター等への立寄りを行い、怠学、喫煙等の不良行為少年等を発見した場合には、少年への声掛けや指導を行います。
- ・非行防止教室の補助
少年サポートセンターの職員と共に学校などで、少年達の規範意識を育むための活動を行います。
- ・非行少年の立ち直り支援（学習支援など）
少年サポートセンターの職員と連携し、少年に対する助言、指導等（学習支援を含む）を行います。
- ・その他街頭キャンペーン等

活動期間

4月1日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：1人
（内訳）

- ①2018年11月18日
少年の立ち直り支援活動（農業体験・蕎麦の収穫）
- ②2019年1月27日
少年の立ち直り支援活動（体験活動・蕎麦打ち）



農業体験

活動報告

●受入団体担当者

- ①つくば市内の畑地において、立ち直り支援対象少年と共に蕎麦の収穫作業を実施。
- ②①において収穫した蕎麦を使い、立ち直り支援対象少年やボランティアと共に蕎麦打ちと昼食会を実施

●学生参加者：讚井知（システム情報工学研究科 博士後期課程2年）

活動の成果

立ち直り支援対象の少年たちと、蕎麦の収穫、蕎麦打ち体験などをともにを行った。初めて支援対象の子と初めて顔を会わすときは、どのような話しをしたらよいか迷うこともあったが、何気ない会話を交わし、時間をともに過ごすだけで打ち解けていくことができた。また、警察の方と一緒に視調式に参加させていただき、県民の安全安心のために尽力されている姿を目の当たりにする機会を得て刺激をうけた。

今後の課題

この活動のような人と人の交流についてのボランティアは、回数を重ねることにより信頼や親しみが形成されるので、なかなか継続して活動に参加することができないと、関係性が壊れてしまうことがあるのが難しい点であると思う。



美味しい蕎麦を打てました

第12回つくば路100km徒歩の旅2018 (17034V)

受入団体名：つくば路100km徒歩の旅運営協議会 (16021G)

活動内容

- ・100km徒歩の旅とは、毎年夏、茨城県南地域の小学生4-6年生が、学生・社会人スタッフとともに4泊5日をかけて100kmを歩き抜く体験型学習事業です。事業理念として「ひとづくり・まちづくり」を掲げ、子どもたちの「生きる力」の醸成、若い世代のリーダーシップの育成、地域コミュニティの活性化、家庭教育の重要性の再認識という4つの事業目的の下、活動しています。
- ・学生スタッフは、子どもたち全員が完歩を達成し、大きな成功体験を得てこれからの人生の大きな糧とできるよう、そのサポートを行う立場にあります。その一方、本番では子どもたちに背中を見せる存在として、1年を通して様々な研修に取り組んでいます。

★ミーティング

日時：毎週日曜日午後1時～5時

(秋・冬はミーティング回数が減ります)

場所：取手市内、守谷市内、筑波大学など

★100km本番

日時：2018年8月7日(火)～11日(土)

場所：取手市、つくばみらい市、守谷市、土浦市、つくば市など茨城県南



活動期間

4月1日～9月30日

参加学生

T-ACT ボランティア：12人

活動報告

●受入団体担当者

今年は12名の筑波大生が学生スタッフとして参加した。子ども支援室(6名)、救護室(1名)、マネジメント室(3名)、総務情報室(2名)に所属し、それぞれの役割に全力で取り組むことができた。子どもたちの完歩のために力を発揮できたことは勿論のこと、学生自身の成長や地域・保護者とのつながりを実感し、それぞれが大きな糧を得られた。

●学生参加者：石田智己(教育学類 1年)

活動の成果

夏休みに小学校4～6年生の子どもたちと4泊5日かけて100kmを歩くというもの。学生スタッフには5日間を通して、子どもたちに成長や変化のきっかけを与えることが求められ、本番において、子どもの成長を実感することができた。また、普段の研修では人前で話すことが多く、プレゼンなどに慣れた。

今後の課題

子どもと接するという経験が不足していると感じた。他のサークル活動やボランティア活動を通して、子どもとの接し方を磨いていきたい。また、教育的な知識や、組織についての知識の不足も同様に感じた。来年に向け、講義の内容やつくば路という組織についてきちんと学んでいく必要がある。

●学生参加者：池田晃一(医学類 5年)

活動の成果

子どもに100キロ歩き抜くという成功体験を与える。また、研修や準備を通じて、成長し、より社会に出て活躍する人材になる。

台風で二日間中止になり、子どもは50キロしか歩けなかった。

ただ、私自身としては、カッコいい仲間と囲まれて活動出来て、すごく成長出来たような気がする。

今後の課題

本番前は、みんなの成長のために、みんなに仕事があるようにする。そのため、みんなかなり忙しくなる。だからこそ成長に繋がるのかもしれない。

●学生参加者：中藤麻里絵（日本語・日本文化学類 4年）

活動の成果

本年度、私は宿泊地設営の部署を担当した。主な活動内容は、お借りする施設や市役所等への申請・打ち合わせ、部署内のタスク進捗管理、食事・トラック・物品等の手配、行程表の作成等である。本番が台風で一部中止になる等問題やアクシデントにも多く見舞われたが、目標達成度としては70%、得られた成果としては部署内の雰囲気が良いまま滞りなく業務を終えたこと、様々な問題がありつつ致命的な問題なく終えられたことが挙げられる。

今後の課題

活動中に生じた問題や困難、課題としては、やはり人員不足による負担の増大が大きい。T-ACTへ団体登録したことにより認知度や活動の幅は広がったものの、最盛期の筑波大メンバーの数には至らない。今後も根強く活動をアピールしていくとともに、業務の効率化を図るべくきちんとした引継ぎを行うことが課題である。

●学生参加者：内藤朱里（社会学類 4年）

活動の成果

小学4～6年生の子供たちと4泊5日で100km歩くプロジェクト。子供たちの体調管理やけがをした時の対処などを行う救護係として活動した。この活動では、子供に100km歩き切るという成功体験を与えるという目的もあるが、同時に学生スタッフの成長も目指している。本番を通して子供たちの成長ももちろんであるが、自分たちの成長を感じることもできた。

今後の課題

けがや体調不良の知識は本番のために学んできたが、実際に子供たちの顔色などで体調を正確に判断するのは難しいことだと感じた。

●学生参加者：野口壮志（教育学類 1年）

活動の成果

- ・多様な人と関わりコミュニケーション能力の向上が感じられた
- ・答えのない課題に色々な人と協力しながら取り組む楽しさを知れた
- ・小学生と関わるのが将来にとって貴重な経験となった

今後の課題

- ・一緒にタスクをこなす人にどこまで気を遣うべきなのかということが分からなかった
- ・今後リーダーとなるための力不足を感じた
- ・小学生とずっと関わる上で体力を想像以上に必要とした



100kmの道中

●学生参加者：古藤直輝（人文学類 4年）

活動の成果

私は、今年は子どもの一番近くで歩き、成長をサポートする役割に就いた。4年目ということもあり、4年間の自分の中で最も良いアプローチができた。また、後輩スタッフの指導にも力を注ぐことができ、事業に貢献できたのではないかと思います。さらに、T-ACTをはじめ、別組織と関わった経験も非常に勉強になった。

今後の課題

今年は2、3日目が台風で中止となり、子どもたちや学生の成長や達成感は、例年よりも低いと言わざるを得ないと思う。どうしようもないことかもしれないが、事業の在り方や理念・目的を考え直すきっかけになった。

●学生参加者：匿名希望（教育学類 2年）

活動の成果

小学生が学生・社会人スタッフとともに100kmを歩き抜く体験型学習事業。数か月間の準備の甲斐あり、安全に行程を終えることができた

今後の課題

子どもたちとの接し方について、スタッフが十分な知識や経験を備えられていなかったこと。

●学生参加者：匿名希望（生物学類 1年）

活動の成果

小学4～6年生の子どもたちとともに5日間かけて100kmの道のりを歩み、子どもたちに成功体験を与える手助けすることを目的として活動を行った。

台風の影響で予定通りに全行程を終えることはできなかったが、参加した子どもたち全員が笑顔でゴールする様子をみとどけることができた。

今後の課題

活動中に台風が直撃し、5日間のうち2日間の行程が中止されたため、事前に計画していたことを大幅に変更しなければならなくなった。

様々な事態を想定し、柔軟に対応する力をさらに上げることが今後の課題である。



ゴールの様子

●学生参加者：匿名希望（人文学類 4年）**活動の成果**

茨城県南地域の小学生140人が100kmの道のりを歩くことで「生きる力」の醸成をする。

今後の課題

台風で本番のうち2日間は歩行中止となったことは事業において初の経験であった。今後は我々しか体験していないこの経験を次代につなげていく。

●学生参加者：匿名希望（比較文化学類 2年）**活動の成果**

昨年に引き続き2度目の参加となった今年、私が担当したのは総務情報室という役割でした。本番前は、班の構成を考えたりしおりを作成したり、その他にも事業を行うのに外せない様々な事務手続きを、本番中は子どもたちの様子を記録に収めるといった活動を行いました。どれも普通の学生生活を送る中では経験できないような活動ばかりで、失敗してはいけないというプレッシャーもありましたが、今年度の一切を終了したときは何とかやり切ったという達成感でいっぱいでした。

今後の課題

本事業は、子どもたちの生きる力を醸成することを目的の一つとして行われていますが、こなさなくてはならないタスクの多さから、子どものためになにができるのかを最優先に考えられなかったという反省点が私の中で残りました。何事にも余裕をもって物事の本質を見失わないようにすることが今後の課題です。

●学生参加者：匿名希望（芸術専門学群 1年）**活動の成果**

子ども達の成長のために100kmを歩き切る手助けをする。また、その感動を形に残して更なる成長の手助けをする。毎週のMTGや書類の作成などを通して、PCの操作やソフトの使い方などが身についた。集団行動のルールや社会人としてのマナーなどが知れた。

今後の課題

子どもに対してだけでなく、同じスタッフ間の中でも人との関わり方について考えることが多かった。年上の人と関わるが多く、技術や経験などの点で自分の未熟さが分かった。

一緒にサッカーしよう！ (18001V)

受入団体名：FC ジョイア (14006G)

活動内容

知的障がい・精神障がいをもつ社会人のサッカークラブです。NPO 法人つくばフットボールのサッカーコーチの指導のもと、毎月楽しく活動をしています。障がいのことを知らなくても、障がい者と関わったことがなくても、サッカーをしたことがなくても、問題ないです。私達と一緒に楽しんでください。一緒にボールを追いかけて、一緒に汗をかき、一緒に笑い、地域で暮らす私達のことを、少しでもわかってもらえたら嬉しいです。

定期練習会（毎月1回日曜日） 10：00～11：30（荒天中止）

2018年 4/8 5/13 6/10 8/12 9/16 10/14 11/11 12/2

2019年 1/13 2/10 3/10

活動期間

4月8日～3月10日

参加学生

T-ACT ボランティア：2人

（内訳）8/12 1/13 3/10 各1人

活動報告

●受入団体担当者

知的障がい・発達障がいのある選手と一緒にサッカーを楽しんでもらいました。コーチ・アシスタントコーチの説明を個別に説明したり、動きのモデルになったり、練習パートナーになったりしていただきました。選手達を励ましたり、褒めたり、声をかけてもらうと、選手達はモチベーションがアップし、笑顔になりました。

●学生参加者：HASSNA HANIF（生物学類 3年）

活動の成果

I wanted to join the volunteering to see how it feels to spend time with disable people. They are one of the most beautifully innocent people I have ever met. Indeed, as I was looking to learn something new from them, I did! I realized how they have no negativity within and how happy they are irrespective of their disabilities which inspired the core of my heart.

All in all, it is a fact that Japan has a lot of disable friendly facilities. I think that is very comforting for them!

今後の課題

I think very few of us gets to know or befriend disable people because they are almost segregated from us. I wish despite of such tough situations, we had more chances and environments to meet and enjoy more often, in which the disable people can also feel cared and happy with all of us together.



キックオフ



練習後の集合写真

外国人児童・生徒の学習サポート（18002V）

受入団体名：茨城 NPO センター・コモンズ（16003G）

活動内容

常総市には約4000人の外国人が住んでおり、市内には多くの外国につながる子ども達があります。来日直後で授業の理解が難しい子どもや、日常会話は問題なく話せてもサポートが必要な子どももいます。学習サポーターとして子どもたちに勉強を教えるボランティアを募集します。

コモンズでは、週一回放課後に行う「アフタースクール」や夏休み中の「サマースクール」を実施し、外国につながる子どもたちの学習支援を行ってきました。

<活動の概要>

場所：JUNTOS ハウス（常総市水海道森下町4335 関東鉄道常総線北水海道駅より徒歩5分）

日時：【小～高校生】毎週土曜（14：00～16：00）

日本語を教えるのではなく、基本的には子どもたちが持参する宿題を中心とした教科指導となります。

外国人に教えた経験や塾講師の経験などは必要ありません。外国や教育に興味がある方、子どもが好きな方などたくさんの方が関わってくださることをお待ちしております。

活動期間

4月1日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：3人

活動報告



●受入団体担当者

コモンズでは、毎週土曜日（14：00～16：00）に外国にルーツを持つ子どもへの学習支援「アフタースクール」（小中学生対象）を実施している。ボランティアさんには、子ども達の学習サポートとして活躍していただいている。毎週のように参加してくれるボランティアさんもおり、参加する子どもは、ボランティアの先生に会いに来るのを楽しみにしている。また、ボランティアさんも、学習サポートに加えて、子ども達との会話を楽しみ、子どもの母語を学ぼうとする姿勢を見せるなど、子どもとの信頼関係を築いてくれている。

●学生参加者：小西裕美子（教育研究科 修士プログラム1年） 活動の成果

毎週土曜日の14時から16時まで、茨城 NPO センター・コモンズが常総市の JUNTOS ハウスで主催する外国人児童・生徒の学習サポート事業に2018年夏から継続的に参加している。そこに集う小・中学生が、持参した学校の宿題をする際に、理解につまずいている箇所、図や例を多用して彼らの理解が進むように努めている。相手に応じてわかりやすく伝えるための工夫を、体験的に学ぶことができていると思う。

今後の課題

参加しているボランティアには当然、得意不得意分野があり、個性もあるが、子どもへの支援を考えると、多様なボランティアが存在していることが望ましい。私の場合、使える外国語は英語に限られ、中学校の理科を教える自信はない。自分の得意分野や個性を活かして協力できることが、それぞれにあると思うので、ボランティア層が厚くなることを期待したい。



発達障がい児と遊んでくれる人募集！（託児・キャンプなど）(18004V)

受入団体名：茨城 LD 等発達障害親の会星の子（15014G）

活動内容

私たちは、茨城県に住む、LD、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー症候群など発達障がいのある子どもたちを持つ親の会です。当事者支援のための勉強会や、療育キャンプなど当事者のための活動、発達障がいの啓発事業などを行っています。私たちの活動において特に当事者や兄弟児と交流して下さるボランティアさんを探しています。

本活動の目的は以下の通りです。

- 保護者の活動参加への障壁を取り除く
- ボランティアとの交流を介した当事者の社会性の向上
- ボランティア参加者にとっての発達障がい児（者）理解の場の提供

【内容】

1. 勉強会託児ボランティア 1か月に1回程度（不定期 主に日曜午後）
（活動内容）保護者勉強会の際の託児ボランティアスタッフ
2. 療育キャンプボランティア 7月16日（月・祝）および8月18日（土）
（活動内容）療育キャンプに当事者（15歳未満）とともに参加していただきます。ボランティアさんとの交流を通して非常に多くのことを子供たちは学び、毎年飛躍的な成長を遂げています。
3. 星の子総会ボランティア 6月17日（日）13:00～17:00
（活動内容）年に1度の総会の際に別室にて子供の相手をしていただきます。

活動期間

4月1日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：2人
（内訳）6/17、7/16、8/18

活動報告

●受入団体担当者

6月17日

星の子総会に伴う託児をご担当いただきました。ホワイトボードにアニメのキャラクターを上手に書いていただき、盛り上げていただきました。休憩時にはお買い物に同行いただき、子供たちの買い物を上手に助けていただきました。

7月16日

キャンプ事前レク。他の大学や社会人ボランティアに混ざって子供と仲良くなるためのレクリエーションを行いました。各自ニックネームをつけ呼び合うことで距離が近づきました。終了後はボランティア同士のミーティングに参加することにより、情報共有が進みました。

8月18日

デイキャンプに参加しました。事前レクで仲良くなった子供たちと楽しくカレーを作りました。あくまでも子供を主役に上手にリードしていただきました。

●学生参加者：関口瞳子（社会学類 4年）

活動の成果

発達障がい児の子どもたちが、親御さんたちが会議している間や別室で待機している間、見守ったり一緒に遊んだりした。子どもが好きなキャラクターの絵を描いたらとても喜んでくれたので良かった。また、実際に子どもたちと過ごしてみて、親御さんたちの大変さがより実感できたと思う。

今後の課題

初対面だったこともあり、最初はどのように対応したらいいか戸惑った。

塾に行きたくても行けない子どもたちのための無料塾 (18005V)

受入団体名：特定非営利活動法人居場所サポートクラブロベ (16006G)

活動内容

子どもを塾に行かせたいが経済的に難しい、塾の送迎ができないなど様々な理由で塾に行けない子どもたちのために、無学年教材を使用し、その子の学習状況に合わせた指導・学習をする無料塾を運営している団体です。

～経済的な理由で子供達の未来をあきらめさせない無料塾～

<対象>

小学生・中学生・高校生（ただし、経済的に塾に通いたくても通えない子。入塾面談時に伺います）

<日時>

谷田部地区：毎週 火・木 18：00～21：00

竹園地区：毎週 月 18：00～21：00

活動期間

4月1日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：12人

(内訳)

| | |
|----------|----------|
| 4月(4人) | 5月(11人) |
| 6月(13人) | 7月(20人) |
| 8月(18人) | 9月(18人) |
| 10月(37人) | 11月(41人) |
| 12月(22人) | 1月(17人) |
| 2月(17人) | 3月(18人) |



コーチ達の打合せの様子

活動報告

●受入団体担当者

- ・学習支援（谷田部教室、竹園教室、万博教室）
- ・ワークショップの開催
 - > テーブルゲーム交流会（8月）
協力団体：つくばテーブルゲーム交流協会
 - > ワークショップ「勉強をする必要について」(9月)
 - > 筑波大アフリカ留学生との交流会（10月）
 - > ワークショップ「競技ゲーム：ポッチャ」(3月)
- ・チャリティーバザーへの参加協力（4月、6月、8月、11月の計4回を開催）
協力団体：つくばテーブルゲーム交流協会・つくばお笑い集団 DONPAPA
- ・ボランティアフェスタへの協力（2019年1月）

●学生参加者：山口和紀（障害科学類 2年）

活動の成果

NPO 法人 ROBE では主に学習指導ボランティアとして参加しました。得られた成果はあると思いますが、言語化できていません。子どもたちと遊ぶのが楽しくて平均して週2階程度は参加していました。

今後の課題

家庭環境に支援が必要な問題があると考えられる子どもも多く、そういった児童をどう支援につなげるかという部分は、ボランティアを含めてNPO全体で話し合うべき、あるいは改善していくべきだろうと感じています。

●学生参加者：駒野樹（比較文化学類 1年）

活動の成果

地域の小・中学生を中心に、学校の勉強を教えたり、楽しくおしゃべりしたりなどした。私自身、将来は教員になることを志望しているため、今回の活動を通じて子どもたちとの関わり方や分かりやすい勉強の教え方等を学ぶことができた。

今後の課題

自分の教え方が子どもたちにあまり理解されない時があり、どのようにすれば勉強の内容を彼らのレベルに合わせて明瞭に伝えることができるか悩むこともあった。また、都合が合わずなかなか参加することができなかった。

●学生参加者：千葉裕平（人文社会科学研究科 博士前期課程1年）

活動の成果

活動内容：子どもたちへの学習支援、教材制作、支援内容の検討など。

目標達成度：継続的に（概ね週1回以上）活動に参加することができた点はよかった。

得られた成果：多様な背景の子どもがおり、さまざまなニーズを持っているなかで、どのように関わっていくのが重要なのかを考えるきっかけになった。

今後の課題

活動自体がまだ新しいものであるため、組織化されておらず、最初は戸惑うこともあった。自ら積極的に議論に参加し、子どものためになる活動内容を検討していった。

また、ボランティア資源に限りがあり、活動内容は十分とは言えない。より活動を充実させ、継続性を持たせるためには、積極的に関わるボランティアを今以上増やさなければならない。



ワークショップの様子

【スクールフェロー】養護教諭の活動補助、職員室での仕事の補助ボランティア（18006V）

受入団体名：茨城県県南生涯学習センター（12001G）

活動内容

茨城県県南生涯学習センターの生涯学習ボランティア支援事業（スクールフェロー）として、小学校の保健室及び職員室にて養護教諭のサポートを行う。

【活動例】

- ・ 検診に係る事務作業
- ・ 保健室来室児童への対応補助
- ・ 掲示物作成（保健室内）
- ・ 職員室での事務処理作業補助
- ・ 書類整理（保健関係）
- ・ 職員室でのインターホン対応

活動期間

4月25日～3月8日

参加学生

T-ACT ボランティア：3人

（内訳）各日程1人ずつ参加

4/11、4/18、5/2、5/9、5/9、5/16、5/23、5/25

6/1、6/8、6/13、6/15、6/20、6/20、6/22、6/27、6/29

7/3、7/4、7/10、7/11、7/17、12/10、12/17

活動報告

●受入団体担当者

健康診断の実施において人手が足りなかったもので、支援して頂きとても助かりました。また、何度も来ていただいている学生さんなので、児童の対応にも少し参加してもらったのですが、養護教諭には見せない児童の様子を見ることが出来て、私自身勉強になる部分がありました。

●学生参加者：匿名希望（看護学類 4年）

活動の成果

小学校の保健室で、来室した児童の対応、書類整理などの事務作業、保健室の掲示物づくり、健康診断の補助などを行いました。今回の活動では健康診断という学校保健における重要な行事に関わらせていただくことができ、将来に繋がる貴重な経験となりました。たくさんの子供がいる中でスムーズに健診を進めるための工夫や、初めての健診である1年生への説明の仕方など、学校の実情に応じてどのような工夫がなされているのか知ることができて良かったです。

今後の課題

集団行動が求められる場面で、どうしても不適応な行動をとってしまう児童がいました。発達障害傾向のある子ども等声かけの工夫や配慮が必要な子供もいるため、障害の特性など深い知識をつけ、子ども一人ひとりの実情や背景、性格など個別性に沿ってより良い支援を考えていけるよう、勉強していきたいと思いました。

龍ヶ崎市内の小学校で養護教諭のサポートボランティア募集！（18007V）

受入団体名：茨城県県南生涯学習センター（12001G）

活動内容

茨城県県南生涯学習センターの生涯学習ボランティア支援事業（スクールフェロー）として、小学校の保健室で養護教諭のサポートを行う。

【活動例】

- ・ 休み時間での児童との遊びを通じた対話
- ・ 校内の季節や健康課題に即したものや保健に関する掲示物作成

活動期間

5月2日～3月8日

参加学生

T-ACT ボランティア：1人

（内訳）各日程1人ずつ参加

6/4、7/11、10/3、11/2、11/20、12/19、2/27、3/15

活動報告

●受入団体担当者

養護教諭の子どもへの対応を見て学び、子どもたちの特性に配慮した言葉かけや手当てができるので信頼して子どもへの向かわせることができます。養護教諭や保健室の学校内でのあり方を真剣に考え、自分の立場でできることを模索しながら、親しみもあり、さらには慎重に子どもたちと関わってくれました。

事務的な作業もお願いしましたが、作業が丁寧でミスがないので本当に助かりました。

●学生参加者：匿名希望（看護学類 4年）

活動の成果

身体測定の補助、健康診断の記録整理、掲示物の作成、児童への救急処置、保健室登校児童への対応、保健室頻回来室児童への対応などを行い、養護教諭の職務や子どもたちへの実際の対応を学ぶことができた。養護教諭として求められていること、必要とされる資質能力について実感することができた。

今後の課題

養護教諭として、学校現場で求められていることが、多様化しているということが実感できた。その背景には、子どもたちの健康問題の多様化・複雑化がある。そのような課題に対応するためには、養護教諭として、子どもたちを取り巻く環境を含めた児童生徒の総合的理解と多様な知識が必要であると考えた。

高校生の「知りたい」をサポートしてください！(18009V)

受入団体名：土浦一高 SGH 推進室 (17003G)

活動内容

土浦一高では、高校2年生が興味のある分野について調査・研究を行っています。しかし、高校生の活動範囲や視野は非常に限られているのが実情です。そこで、筑波大の学生様の多様な視点から、高校生の素朴な研究テーマにたいしてアドバイスをしてください。

高校生の研究テーマの範囲は多様ですが、それに対する専門的な知識は不要です。自身の研究テーマや、知っている調査手法を応用し、話をしてください。どんな小さなアドバイスであっても、高校生にとって非常に刺激的なディスカッションとなります。

活動期間

5月21日(月)

- (1) 12:00~12:05 高校生グループと顔合わせ
- (2) 12:05~12:30頃 ランチ交流
- (3) 12:30~13:20頃 研究アドバイス・図書館見学など

※(1) 学生ボランティア1人に対し、5名程度の高校生

※(2) については、適当な場所へ移動し、ランチをとりながら自己紹介や大学生活について話すなど、交流を図ってください。

※(3) 高校生が研究テーマについて話しますので、必要なアドバイスをお願いします。必要に応じて、図書館で参考書を一緒に探してください。

参加学生

T-ACT ボランティア：12人

活動報告

●受入団体担当者

(1) 高校生グループと顔合わせしていただきました。

(2) 大学構内で交流ランチをしていただき、高校生グループから研究テーマについてお話しし、当日の調査の方針を決めました。

(3) 各グループに分かれ、ヒアリング調査や、留学生の方へのインタビュー調査などを行う際に、ボランティア様より最適な場所をご案内いただいたり、インタビューに適したご学友をご紹介いただくなど、全般的にサポートしていただきました。

●学生参加者：高橋和生(障害科学類 3年)

活動の成果

土浦第一高等学校の生徒さんの研究テーマに基づき、筑波大学での調査に関するアドバイスを行った。高校生とコミュニケーションを取りながら、楽しく取り組むことができた。一方、自分の専門分野と異なるテーマであったため、適切なアドバイスができていたかどうか不安な面もあった。

今後の課題

高校生の研究テーマや調査したい内容が曖昧であったため、もう少し時間があつた方がより深い内容を調査できたように思う。また、大学の教授から話を聞きたいという場合には事前のアポイントメントがないと難しいため、準備がもう少し必要であった。事前に研究テーマを伝えていただくか、長い時間の活動であるより実のある活動になったのではないかと感じた。もしくは、長期的に研究のお手伝いをする等の活動であっても、高校生と大学生の両者にとって意義のある活動になるのではないかとと思う。



高校生の取材の様子

●学生参加者：小川真穂（障害科学類 3年）

活動の成果

高校生の役に立てたかどうかかわからないが、積極的に大学生にインタビューができた様子でとても良かった。研究内容だけでなく、学生の先輩として悩み相談をされたりして、少しでも力になれてたら良いと思う。

●学生参加者：和田多香子（障害科学類 3年）

活動の成果

高校生の「思考力を向上させる教育システムの開発」に関する研究に協力した。教育学類生、外国人に話を聞きたいとのことだったので、ニコニコ（人間学群生控え室）への案内と、言語教育が専門の大学院生にインタビューを行った。

今後の課題

大きな介入を求められることがなかったので、私自身はあまり話せなかった。

●学生参加者：大草有里枝（国際総合学類 4年）

活動の成果

留学生の紹介、留学生と T-ACT の橋渡しができた。

今後の課題

もっと英語を話すような積極性があると嬉しい。

●学生参加者：McDonald Chimaliro（教育研究科 研究生）

活動の成果

Guiding high school students in their research.

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

Talk to japanese high school student Visit the university.

今後の課題

Little bit difficult to understand what they want to say.



活動の様子

「ボードゲームのひろば」(18011V)

受入団体名：つくばボードゲーム愛好会 (12002G)

活動内容

私たちは児童館が学区内ない春日小学校地区で、週1回、放課後に低学年児童を対象に、“将棋・オセロ・チェス”などのボードゲームで遊ぶ会を開催し、地域の小学生の居場所作りに貢献しています。

学生同士で親睦を深めるのも学生時代の特権ですが、大学から一歩外に出てみるだけで、市民や親子連れと交流できる場所は見つかりません。いつか身近な問題として、社会での働き方、親子関係、子育てを考える一つのきっかけにしたいと思い、T-ACT 社会貢献活動（ボランティア）に団体登録しました。学生、地域の方でも参加できます。一緒に“地域の子育て”に参加しませんか？

日時：毎週水曜日15：00～17：00（長期休み以外）

場所：春日交流センター（大会議室）茨城県つくば市春日2-36-1

活動期間

4月11日～3月20日

参加学生

T-ACT ボランティア：10人（参加団体 将棋部）

（内訳）合計40回合計51人

| | |
|-----------|-----------|
| 4月（3回）3人 | 5月（4回）6人 |
| 6月（4回）5人 | 7月（3回）6人 |
| 9月（4回）4人 | 10月（5回）4人 |
| 11月（4回）9人 | 12月（3回）1人 |
| 1月（3回）4人 | 2月（4回）2人 |
| 3月（3回）7人 | |



小学生との真剣勝負！

活動報告

●受入団体担当者

園児～小学生の子ども達及びその保護者たちにオセロ、将棋、チェス、囲碁などの指導や対局を行っていただきました。

筑波大学将棋部、筑波大学教育学類2年生、T-ACT、筑波学院大学オフキャンパスプログラムなどの大学生ボランティアさん方のおかげで、怪我もなく楽しい活動を行うことができました。保護者の皆さんからも、家ではなかなか相手をするのができないが、ルールを教えてもらって家でも将棋を家族でできるようになったと大変好評でした。

子ども同士でトラブルがあったときに主催者が対応していると、それ以外の子どもたちのほうが騒ぎ出してしまうことがあるので、人手がある、目が届くのは大変助かりました。

7年間、大変お世話になりました。

（詳しくはFacebook「つくばボードゲーム愛好会」で活動報告をしています。）

●学生参加者：大草有里枝（国際総合学類 4年）

活動の成果

放課後に小学生の子たちとボードゲーム（オセロや将棋）で遊びました。私より子供たちの方がずっと強くて、驚きました。久々に子供たちと触れるなかで、どのように関わるかを考えられてよかったです。



活動中の様子

●学生参加者：梅田大聖（社会工学類 2年）**活動の成果**

小学生に将棋やオセロなどボードゲームを教えたほか、時には勝負の相手にもなった。

ボードゲームの楽しさを味わってもらうとともに、ボードゲームを通じて子供たちや部員たちとの親睦を深めることができた。この活動を通して、部員たちも子供たちとの接し方を学ぶことができた。また、相手に緊張感を与えないようにどのような話し方をすれば良いかなど、部員たちのコミュニケーション能力を高めるいい機会にもなったと思う。

今後の課題

子供たちがボードゲームに対するモチベーションを保ち続けられるような工夫がいると感じた。あまり負け続けるとやる気をなくしてしまうので、うまく手加減するなどして勝つことの喜びを知ってもらえるようにしたい。

●学生参加者：瀬谷浩樹（知識情報・図書館学類 3年）**活動の成果**

小学校の放課後に、子供たちにボードゲーム（将棋、オセロ、チェス等）のルールを教えることや子供たちの対戦相手になることが主な活動内容であった。得られた成果としては、このボランティアに参加する前は子供と接することに苦手意識を持っていたが、その苦手意識を克服することができた。また、活動中に、団体の代表の方や子供たちの保護者の方から感謝のお言葉を頂けたのが嬉しかった。

今後の課題

参加しているボランティアの人数に対して、遊びに来る子供たちの人数が多すぎるという問題があったと思う。それによって、子供たち全員に目を配ることが難しい場面が多々あった。この問題の解決策としては、より様々な場所でボランティアを募集する、筑波大学を含む周辺大学の関連サークルに声をかけてみるなどが挙げられると思う。

つくばサイエンスツアー小学生対象工作実験教室 (18017V)

受入団体名：つくばサイエンスツアーオフィス 一般財団法人茨城県科学技術振興財団 (13002G)

活動内容

「つくばサイエンスツアーオフィス」は、ノーベル賞受賞者 江崎玲於奈のもと科学技術の普及啓発を図ることを目的に、つくば市内の約50か所の研究機関とつながる公共の機関です。

小学生を対象に簡単な工作や科学実験をとおり、驚きや感動を提供し科学・技術に対する関心を高めてもらうことを目的としています。

【日時・イベント名】

- ★8/7 (火) チョウのはねの鱗粉転写実験 + 研究機関見学
 - ★8/17 (金) 磁石でふしぎ?おもしろ体験! + 研究機関見学
 - ★8/22 (水) カプトムシの標本を作ろう! + 研究機関見学
- その後も、月1、2回イベント実施の予定があります。

【内容】

- ★午前中は講師を招いて「科学実験教室」、午後はつくばサイエンスツアーバスを利用し「研究機関」を見学します。
- ★見学施設は、「国土地理院 地図と測量の科学館」、「筑波実験植物園」、「筑波宇宙センター」、「産業技術総合研究所 地質標本館」のうちの2施設を1日で見学します。

活動期間

8月7日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：1人
(内訳) 8月17日、12月9日

活動報告

●受入団体担当者

小学生対象の工作実験教室「磁石でふしぎ?おもしろ体験!」、「手作りカイロで暖まり、カイロのしくみを考えよう!」の際に会場の準備や参加児童の実験補助、つくば市内の科学館見学時の引率や記録写真の撮影など、イベントの運営補助として活動して頂きました。

8月に参加した学生が楽しかったということで、10月に次回開催の問合せがあり、12月のイベントにも参加して頂きました。大変助かりましたので、また来年度も参加して頂きたいと思います。

●学生参加者：塚原浩平 (応用理工学類 4年)

活動の成果

午前中の工作教室と午後のサイエンスバスツアーを通してサイエンスバスやつくば市内の研究所を知ってもらうのが目的。小学生は保護者とともに工作教室を楽しむことができ、ボランティアとして参加した学生自身も機会がなければ行かないような市内の施設を訪問できるため、ボランティアをしながらも得るものが多かった。

学生の方も実験を楽しみながらボランティアができるので、とてもおすすめ。参加者の中にリピーターの方がいてうれしかった。

今後の課題

参加する小学生の学年がバラバラなので、皆が同じ程度工作教室を楽しめたかが不安。



第17回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦2018）語学ボランティア募集！（18020V）

受入団体名：第17回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦2018）実行委員会（18005G）

活動内容

茨城県では、第17回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦2018）を、10月15日から19日に、つくば国際会議場をメイン会場として開催します。茨城県での世界湖沼会議の開催は、1995年に第6回世界湖沼会議を開催して以来、23年ぶり2回目となります。

世界湖沼会議は、湖や沼をとりまく環境問題について、世界各国の研究者、市民、行政担当者等が一堂に会して情報と経験の交流を図る場として、昭和59年に滋賀県で始まったもので、概ね2年毎に、世界各国で開催されています。

今回の第17回会議では、7月末時点で、海外45カ国2地域から350人以上の外国人の参加登録がされていることから、語学ボランティアを募集します。語学ボランティアは、会議通訳とは異なり、世界の人々と会話する絶好の機会となり、海外からの参加者のガイドとして会議参加のお手伝いをさせていただきます。

【10月15、16、18、19日】

- ・展示会での出展者、スタッフと外国人との会話のサポート（多目的ホール）
- ・会場案内等（つくば国際会議場内）

【10月16、18日】

- ・おもてなしプログラム（着付け体験等）での演者、スタッフと外国人との会話のサポート（エントランスホール）

【10月19日】

- ・主催者取組展示（11：00～14：00）での、発表者と外国人との会話のサポート（202会議室）
- ・霞ヶ浦セッションポスター展示（12：00～14：00）での、発表者と外国人との会話のサポート（大ホール前ホワイエ）

活動期間

10月15、16、18日 9：00～17：00

10月19日 9：00～12：00

参加学生

T-ACT ボランティア：2人



フォトセッション

活動報告

●受入団体担当者

フォトブース：外国人を中心に400人を超える参加者向けに、霞ヶ浦等や茨城県内の観光地を背景にした合成写真を撮影し、写真及びデータを提供。機材操作のサポートや案内などをスタッフや他のボランティアと従事した。

展示会、ポスター展示：42企業・団体による69小間の展示会や、霞ヶ浦に関するポスター36枚の前で、出展者やポスター発表者と外国人参加者との間での会話サポートに従事した。

会議1か月前の夏休み中の応募開始、また、夏休み明けの会期中にも関わらず、ボランティア活動に従事いただき、大変助かりました。



展示会の様子

●学生参加者：大草有里枝（国際総合学類 4年）

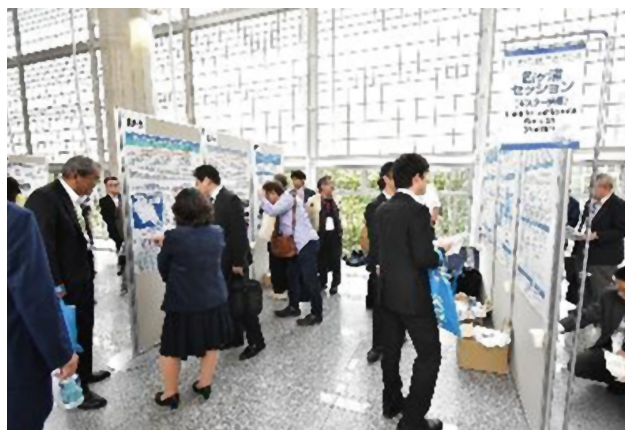
活動の成果

フォトブースで写真撮影のお手伝いをしました。多くの方が立ち寄ってくださり、楽しんでくださっていました。今回初めて語学ボランティアをやってみましたが、他のボランティアさんとの交流もできてよかったです。

●学生参加者：匿名希望（生物資源学類 4年）

活動の成果

イベントに協賛している企業等の出展ブース、およびポスター発表における出展者と外国人参加者のコミュニケーションの補助を行った。しかし、ブースに足を運ぶ人の大半は日本人でありボランティアはあまり必要がなかった。ボランティアとしての活動機会は少なかったが、出展者のお話を多く聞くことができたので、イベントへの参加意義は感じられた。



霞ヶ浦セッション（ポスター展示）

第11回 子どものための救命教室 (18021V)

受入団体名：NPO 法人子どものための救命教室 (16020G)

活動内容

3歳～小学校3年生までの子どもたちを対象に、救命教室を開催しています。

救命教室の中で、子どもたちに「いのちとはなにか、生きているとはどういうことか」を考え、救命の基礎を体験してもらいます。いのちの大切さを知り、自分やまわりの人を尊重できる子どもたちが増えることで、それぞれの心の成長や、社会全体の安全性、救命率の向上を目的としています。救急医の監修をうけながら活動しています。

教室は1回完結、小学1～3年生の約20人が参加予定。

プログラムは、総合ガイド1人と医師1人で進行します。

子どもたちは4つの小グループにわかれ、それぞれに数名のボランティアの方に担当していただきます。ボランティアの方は、総合ガイドの進行に合わせて、教材を子どもたちに渡したり、子どもたちに声をかけて進行を補助していただきます。内容は子どもたちの理解度に合わせて構成されていますので、医療の知識や経験のない方でも無理なくご参加いただけます。また救命教室には、医師が必ず参加します。看護師や救命救急士が同席することもありますので、現場の声を聞くこともできます。

プログラム終了後は、消防署内見学を行います。

活動期間

10月14日(日) 9:00～11:30

【場所】つくば市中央消防署 3階 多目的ホール

9:00～9:30 ミーティング

10:00～11:00 救命教室開催

11:00～11:30 消防署内見学

終了後、解散

参加学生

T-ACT ボランティア：1人

活動報告

●受入団体担当者

小学1～3年生約30名を対象に行う救命教室にご参加いただきました。集合時間より早くご来場くださり、会場設営や参加者受付に積極的にご協力くださいました。プログラム中は数人の子どもたちを担当し、進行役の補助、子どもたちへの声かけに細やかにご対応くださり、安心しておまかせすることができました。

●学生参加者：森田美咲（心理学類 3年）

活動の成果

受付補助や救命教室の進行の補助を行いました。

実際に自分の脈を測ったり、人間・動物の脈数を比較したり、119番通報の仕方など、「命」や「救命」について子どもと共に学ぶことができました。個人的には、ワークショップの作り方や子どもへの接し方、難しいことをどうやって子どもに伝えるかなど、スタッフの皆さんの姿から学ぶことがとても多かったです。

今後の課題

後ろの方にいる子どもが輪に入れるようもっと積極的に声をかければ良かったなと思います。



消防署内を見学



活動の様子

☆スクールフェロー☆養護教諭の児童の健康管理にかかる教育活動サポート（18023V）

受入団体名：茨城県県南生涯学習センター（12001G）

活動内容

茨城県県南生涯学習センターの生涯学習ボランティア支援事業（スクールフェロー）として、小学校の保健室で養護教諭のサポートを行う。

【内容】

検診の補助、掲示物の作成、児童対応の補助、事務手伝いなど
平日 9：00～16：00

活動期間

9月14日～3月1日

参加学生

T-ACT ボランティア：1人
（内訳）2/18、2/25

活動報告

●受入団体担当者

来室者が30名近くいる中で、スクールフェローの学生に、子どもからの聞き取りや記録の補助をしていただけたのは大変ありがたかったです。保健室登校児童や委員会児童とも積極的に関わりを持つようとし、子どもとのコミュニケーションも上手にとってくれました。養護教諭志望ということもあって保健室での活動に意欲的で、スクールフェローを通じて一生懸命学ぼうとする姿勢もみえました。

今回は計2回でしたが、1年を通して定期的に来ていただくことが可能であれば、さらに活動内容も広がり、学校としても大変ありがたいです。

●学生参加者：匿名希望（看護学類 3年）

活動の成果

保健室に来室した児童の対応や、健康観察の結果の入力、保健室登校の児童とのかかわりなどを実施させていただきました。様々な理由で保健室を利用する児童とのかかわり、養護教諭の役割や自身のこれからの課題を見つけることができました。

今後の課題

休み時間などの保健室利用者が多い時間では、緊急性の高い児童から対応していくために、瞬時に判断する能力を身に付けていかなくてはならないと感じました。また、心の不調が身体症状として表れている児童に対する、会話の技術・工夫を学んでいきたいと思いました。



活動の様子

外国籍子ども学習サポート教室 (18024V)

受入団体名：非営利ボランティア団体 伴の会 in Tsukuba (18010G)

活動内容

外国からつくば市に転校してきた子どもは、日本語が不自由で、コミュニケーションの難しさや文化の違いに、学校での学習と生活に戸惑うことが多くあり、学校で満足な学習ができないこともあります。私たちの校外学習サポートにより、安心感を持てる居場所を作ることで、子どもがのびのびと自己表現したり、不安な気持ちや緊張を取り除くことができます。子ども達の心身の健全な成長を見守るとともに、日本一の教育都市に貢献し、安心で魅力ある「国際都市つくば」を目指して活動しています。

毎週木曜日 (18:00~19:00)

日曜日 (15:30~16:30)

吾妻交流センターで市内外国籍小中学生日本語学習、宿題をサポートしたり、絵本の読み聞かせしたり、カルタやパズル遊びなどを活動します。

活動期間

9月20日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：3人

(内訳)

11/8、11/22、12/6、12/9、12/13、12/20、12/23、1/10、1/17、1/24、1/31、
2/7、2/14、2/21、2/24、2/28、3/14、3/21

活動報告

●受入団体担当者

- ・小学生の算数プリント、漢字プリント、学校宿題などの学習を丸付け、説明などのお手伝いをしていただきました。
- ・本ボランティアの主な目的である外国籍の子どもたちに居場所を提供すると言う意味で、勉強以外の活動においてもゲームなどを通して、子どもたちに優しく対応していただきました。
- ・留学生の方は、英語を活用し、外国籍の子どもにとって安心できる居場所もなったのではないかと感じました。
- ・学生さんは、活動内容をよく理解していただき、子どもたちに優しく、笑顔でサポートし、素晴らしいと思いました。学生からボランティア活動を参加する経験は、今後に活かしたいと話していたので、本当に嬉しくなりました。
- ・活動の参加によって、他のボランティアとの交流は、年代、国を超えて交流ができたと感じます。





●学生参加者：HASSNA HANIF（生物学類 3年）

活動の成果

I feel greatly honored and humbled to be able to serve in such a volunteering act where I can support foreign kids that come to Japan and needs some emotional or educational help. It is an excellent idea I believe. Because it is very important for the foreigners who are new to Japan to have such facilities, which will make them comfortable and will prepare them to blend in beautifully with the Japanese society within their capabilities.

今後の課題

I wish Japanese students also aided their help in this volunteering. Since for now, there are only few Japanese teachers who are extremely kind...

However, I feel like if there were more Japanese students to volunteer along with us, the kids could experience real communication and understand the Japanese youngsters as well! I believe they would love to get to know Japanese people more along with other foreigners living in Japan.

●学生参加者：Alawi Aseel Waleed（生物資源学類 3年）

活動の成果

日本の学校に通っている外国の子供たちは言語のバリアを超えるため精神的に励まないと行けないことが分かった。それで、子供たちが安心できる環境を作る必要性を中心してどのように楽しみながら学習したら良いのか学んだ。子供たちは様々な国から来ているので、母国ではない日本語教育の知識も少しでも身についた。個人的に子供たちを教える楽しさも味わえた。

今後の課題

母国語ではない言葉を楽しく子供たちに教えるのに少し難しかった。日本語教育の必要性も分かって、自分の日本語能力をより高めようと思った。子供たちに日本語の言葉を分かり易く覚えられるような教え方を身に付けていきたいと思う。

●学生参加者：匿名希望（グローバル教育院 学士課程1年）

活動の成果

ボランティアの内容は海外から引越して数年しか経っていない生徒への漢字の指導や宿題の手伝いなどで。主に国語を中心に指導し、新小学一年生から中学生までの生徒がサポート教室に参加しています。一方的に教えるだけでなく、子供達が自分から辞書を使って言葉を調べてわからないところを質問してくれるため、海外から日本へ引越してきた人々がどういうことに対して疑問に思うのかを知ることができて非常に興味深かったです。個人的には日曜日ののに毎週参加して積極的に辞書を引く子供達の姿に感心しました。

今後の課題

活動中、特に大きな問題はありませんでしたが、みんなでゲームをしていた時二人の小学生が外国語で会話をし始めたため他の子供達が状況を把握できていないことはありました。サポート教室ではなるべく日本語を使うように指導していくと良いのではないかと思います。また、主に漢字を中心に学習していましたが長文にチャレンジしたり、理科や数学など、他の教科も指導したりすると良いのではないかと思います。

NPO 法人チャリティーサンタつくば支部 運営スタッフ募集 (18026V)

受入団体名：NPO 法人 チャリティーサンタつくば支部 (18005G)

活動内容

NPO 法人チャリティーサンタの大きな活動の一つとして、12月24日クリスマスイブにサンタクロースのご家庭訪問を実施しています。訪問金として一家庭2,000円を頂き、このお金がチャリティー金となり、世界中の子どもたちや日本の貧しい子どもたちの為に使用されています。運営スタッフは、24日にサンタになるボランティアの方や、訪問するご家庭の保護者と連絡を取り合ったりして、社会貢献につながっているこの活動を支えています。

また、運営スタッフはNPO 法人チャリティーサンタのビジョンでもある、サンタクロースを通して、「誰かの為に何かしたい」が行動できる人を増やし、世界中の子どもたちが笑顔になれる社会を目指していきます。

◎12月24日に向けての準備

- ・保護者、ボランティア、本部との連絡
- ・ボランティアへの説明やサンタ講習会の開催など
- ・10月からは2週間に1回のペースでスタッフミーティングを実施

◎12月24日～3月まで

- ・活動報告会、反省会の実施
- ・12月以降は月1回のペースでスタッフミーティングを実施

その他にも不定期（約2か月に1回）でパネルシアターを開催

活動期間

10月1日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：9人

活動報告

●受入団体担当者

ご家庭訪問時の保護者へのプレゼント作成に主に携わっていただきました。

何をプレゼントするかなど、一から考えてもらい、プレゼント作成時には他のスタッフ（社会人）に教えていて、主体的に動いていました。ミーティング中も意見を出すだけでなく、周りの意見を踏まえて、発言していたので周りが良く見えていたと思います。訪問当日も、当日ボランティアとコミュニケーションをとり、楽しく活動していたと思います。

●学生参加者：高田和音（芸術専門学群 3年）

活動の成果

クリスマスイブの日に、ご依頼のあったご家庭に訪問して、子どもたちにクリスマスプレゼントを渡しました。基本的にサンタの格好をするのは男性なので、私はご家庭への連絡等サポートに回りましたが、お子さんや親御さんが笑顔になってくれたのがとてもうれしかったです。家族の大事なひと時を思い出深いものにできたのではないかと思います。

今後の課題

団体に所属するメンバーがそれぞれ忙しく、人手がまだまだ足りないと感じました。人数がいればもっとできたことが多々あるように思われます。



子供達に笑顔を届けました

ディキャンプクラブ (18031V)

受入団体名：茨城 YMCA (18013G)

活動内容

幼児から小学生、また中高生も含めた子どもたちを対象に、生きる力を養うための野外活動（ディキャンプ・宿泊キャンプ）を企画・運営しています。

現在170名の登録がある日帰りの活動「ディキャンプクラブ」は、各対象（年齢）によって定期的開催されています。幼児は家族と離れて初めてのお出かけに挑戦。小学生は所属の小学校を越えて出会うお友だちと一緒に冒険。また中高生はつながりのなかで仲間と共に語りながら、地域のため、年下の子どもたち のために活動します。

すべての活動で、お友だちとの関係づくりや様々なチャレンジを通して、心と体を育てることを目的としています。子どもたちが様々な体験を通して成長していく姿を、見守り、応援して、寄り添っていく役割が大学生のボランティア「リーダー」です。子どもたちの成長の道しるべとなり、心と心を通わせて、一緒に遊んで泣き笑い、おもいきり感動する。そんな存在は子どもたちにとって一生心に残る、憧れのお兄さん・お姉さんとなっています。

専門的に子どもたちとの関わりを学んでいなくても大丈夫。活動前にはミーティングを通して子どもたちの心理について学んだり、安全な環境の作り方について仲間と共に考えたりと、リーダーたちにとっても自分の力をのばしていける機会を持っています。筑波大学以外にも広がる仲間の輪は、学生生活を送る上で社会とつながる豊かな機会となり、たくさんの刺激になることでしょう。

一番大切なことは、子どもたちと「共にあゆむ」存在であること。小さな歩幅に自分の歩幅を合わせて、低い目線に自分の目線を合わせて、初めて見える世界がここには待っています。そう、一瞬一瞬に優しく寄り添ってくれるボランティアリーダーとの出会いも、この活動の大切な目的なのです。

活動期間

2月1日～3月21日

参加学生

T-ACT ボランティア：3人

（内訳） 延べ6人

2月11日（月・祝）

2月23日（土）

3月3日（日）

3月21日（木・祝）

活動報告

●受入団体担当者

活動する際に大切にしている「グループワーク」の道しるべの役割として、5～6名の子どもたちのグループに1～2名の担当制でついてもらいました。子どもたちと一緒に遊ぶこと

はもちろん、安全を守りながら、新しく出会うお友だち同士の心をつなぐための関わりをお願いしました。

何回も活動に参加してくれている学生たち。子どもたちの可能性を信じて、挑戦する背中をそっと押してあげようという関わり方をしてきている姿にとっても感謝しています。全体の進行をさりげなくサポートする姿も頼もしさにあふれています。

子どもたちはもちろん、お預かりしている保護者の方たちからも大人気のボランティアリーダーたち。まっすぐな瞳で子どもたちに愛情をたくさん注いでくれた思いは、保護者の皆様にも伝わり、リーダーたち自身の成長を見守る輪が広がっています。

これからもたくさんの学生がYMCAに出会い、豊かなつながりのなかで日々の彩りが溢れていくことを願っています。



新聞ハウスを制作しました

●学生参加者：細川怜椰（情報学群知識情報・図書館学類 3年）

活動の成果

1年生のころからYMCAでの様々なプログラムに継続して参加していますが、今回の活動ではグループリーダーとして小学生のグループに入り、一緒に新聞紙ハウスを作りました。「グループごとに素敵なハウスを作ろう」という活動だったため、基本的には子どもたちの主体性を見守りながら一緒に新聞紙を丸めたり貼り付けたりしていました。時々リーダーの方が夢中になっていたりもしましたが、リーダーが夢中になっている姿を見せることで子どもたちの意欲を引き出したのではと考えています。

学年も学校も違う子どもたちのグループワークをどのように支えるのか、プログラムに引き込むにはどのような働きかけをするのがいいのかなど、子どもたちの楽しさと成長を手助けする良い経験になっていると感じています。通年で参加していると子どもたち1人1人の成長も見えるので、子どもの成長についても考えるきっかけとなりました。

今後の課題

グループの中で起きる衝突や意見のすれ違いに対してどのような声掛けをしていくべきか、常に考え続けていますが難しい面だなと感じました。ただ楽しいだけではなく、プログラムによって子どもたちにリーダーとして何かを伝えていけたら、とも思いました。今回はグループリーダーとして参加しましたが、プログラムを進行するプログラムリーダーとして参加するときには今回感じたことを活かせたらと思っています。



子供達と一緒に楽しくつな引き

●学生参加者：山下恵太（人間学群教育学類 3年）

活動の成果

今回参加した活動では、元気いっぱいな4人の小学生と一緒に新聞紙で小さなおうちを作りました。子どもたちの発想力や思いっきり楽しむエネルギーには常に感心させられます。また、継続してプログラムに関わることで、子どもたちの成長を肌で感じるができるという魅力があると思いました。小学校教員を目指す者としては、子どもたちが持つ力とエネルギーを活かしながら、常に寄り添っていける教師になりたいと考えようになりました。

今後の課題

対象の年齢・学年が広いため、それぞれに合わせた接し方や話し方を工夫するが必要になってきます。また、YMCAに集まってくる子どもたちは十人十色、様々な個性を持った子どもたちなので、関わり方で悩むこともしばしばありました。そうした経験を活かし、アドバイスをもらいながら、これからの活動や教師になるための学習につなげていきたいと思っています。

2018年度 実施状況報告

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）は、学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を、新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで、学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である（図1）。その始まりは、2008年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援—学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生—」にある。学生支援GPが終了後も、筑波大学の人間力育成支援事業の一環として続けられている。

T-ACTには、学生が企画立案し展開するT-ACTアクション、教職員が企画立案し展開するT-ACTプラン、地域活動団体が実施する社会貢献活動に学生が自発的参加をするT-ACTボランティア（2012年度スタート）の3種類の活動がある。

T-ACTが支援する諸活動は、学生・教職員・地域による共創的コミュニティをベースに、半年以下の単発的・短期的活動であるため、アクティブな流動性をもつことを特徴としている。学生は、それらの活動を通して、様々な活動へ積極に加わる参加力、経験から感じ取る体験力、他者と関わり協調するコミュニケーション力、人をまとめ率いる統率力、ビジョンを具現化し創造する企画力といった「人間力」を養うことになり、自主性と社会性を備え、将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。また、2018年度よりT-ACTアクションの支援対象として、ビジネスにつながる活動も含めるようになった。すなわち、プレ的なビジネス体験を支援し、ビジネスに関するノウハウを体感しつつ、さらに発展的な支援につなげるという機能も担いつつある。

筑波大学内におけるT-ACTの周知率、関心度は『つくばアクションプロジェクト2017年度活動報告書』（T-ACT推進室、2018）に記載のある通り、2017年度の時点で十分に高い数値を示していた。そのため、本報告では詳細については割愛する。

本報告では2018年度のT-ACTの支援活動についてのデータをまとめる。なお、データは2019年3月までにT-ACT推進室で把握できたものに限られる。データの出自である学生からの活動報告等の資料は、提出されるタイミングが様々であるため、2018年度の活動の全てが本報告の執筆時点で出揃っていないわけではない。したがって、本報告のデータは今後更新されることがある。また、過去のデータも掲載しているが、これらは過去10年分のものを掲載することとする。

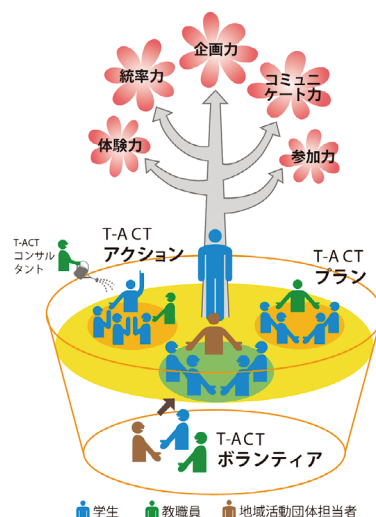


図1 共創的コミュニティ形成によるT-ACTの展開と学生の成長

1. T-ACTで申請された企画等の状況

2018年度のT-ACTアクション・プランの企画申請数は71件（アクション68件、プラン3件）であり、そのうち49件（アクション46件、プラン3件）が承認された（図2）。申請された企画における、プランナーは68名（重複者を除く実数は62名）であり、そのうち教職員のプランナーは3名であった。なお、プランナー数がアクション・プラン企画申請数よりも多いのは、2017年度に申請された企画が2018年度に承認されるなどによって、年度の申請数と認められる企画数の齟齬から生じている（図3）。学生オーガナイザーは208名（実数は189名）、教職員パートナーは65名（実数は53名）であった（図4、図5）。企画のパーティシパントは各企画によって報告された参加者の概数を足し合わせた数のみを報告する。2018年度のパーティシパントの報告された総数

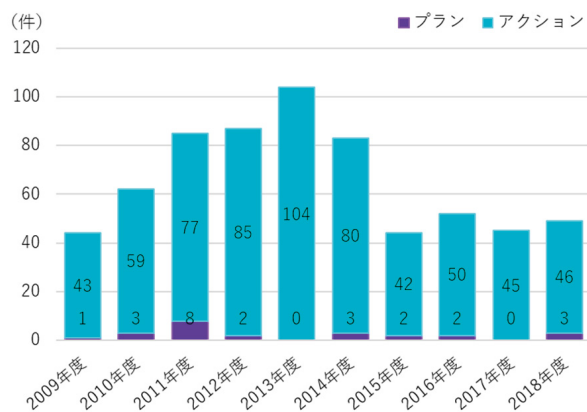


図2 アクション・プランの企画承認数の変遷

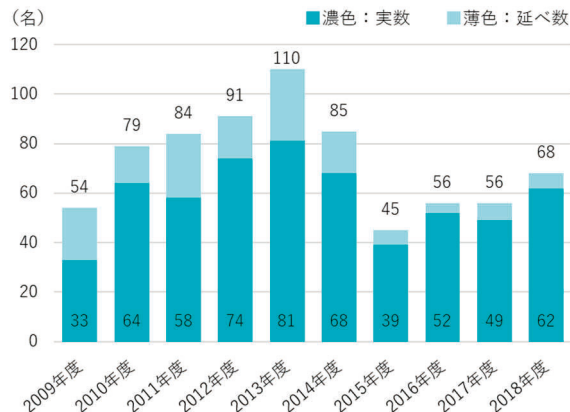


図3 プランナー数の変遷

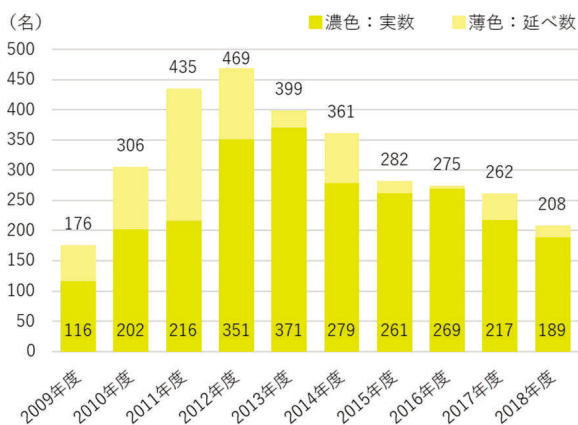


図4 学生オーガナイザー数の変遷

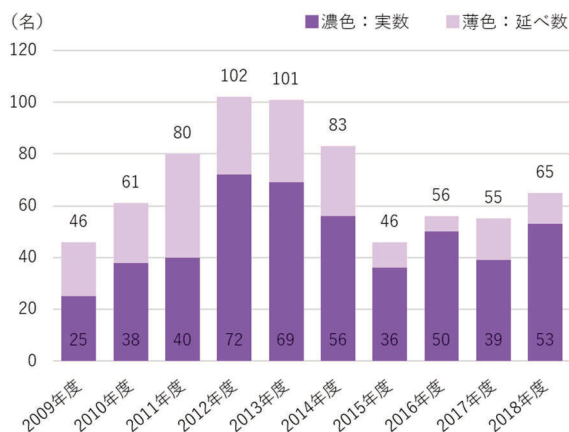


図5 教職員パートナー数の変遷

は1894名であった(図6)。T-ACT ボランティアにおける登録団体数は39であり、団体登録がなされた上での承認活動数は32件であった(図7)。T-ACT ボランティアからの活動参加者は83名であり、T-ACT ボランティアとは別に活動の情報を得て参加している学生も3名いることがわかっている(図8)。

申請数および承認数は2017年度から増加した。すなわち、企画の数は増えたのだが、一方で企画運営側であるオーガナイザーは減少した。運営側の人数は、一つ一つの企画規模によって適正な数があると考えられる。コンサルタントによる主観的な報告に過ぎないが、2018年度は大規模な企画の数は少なく、小規模から中規模で行う活動が多かったと見受けられ、その影響がオーガナイザーの減少につながったと考えられる。なお、単純にオーガナイザーの総数を承認企画数で割った、一企画ごとの平均オーガナイザー数は4.24名である。チームワークに適する1チーム単位での上限人数は6~8人と言われており(West, A. M., 2012 高橋訳, 2014『チームワークの心理学 エビデンスに基づいた実践へのヒント』p.36より)、企画を一つのチームと見て考えると適切な人数を確保しているとも考えられる。一方で、多くの企画が一つのチームで足りる規模の企画に留まっているということもできる。今後、企画の規模や質を高めることを志向するならば、企画の規模に合わせた適切な人数設計を前提としつつも、より運営側として参加する学生が増えるよう、積極的に巻き込む方策を考えていくことも重要と考えられる。

パーティシパントの総数は、2017年度に比較して大幅に減少した。パーティシパントの総数は学生の報告に大きく依存しており、年度によって数字に大きなばらつきが出る。その理由の一端として、学生にとってはオーガナイザーやパーティシパントといった参加者の区分は難しく、あまり気にされていないといった口頭報告もあり、厳密な把握が難しいという実態が挙げられる。したがって、パーティシパント総数の単純な大小で企画そのものの良し悪しや、T-ACTの実績判断の指標とするのは妥当ではない(T-ACT推進室, 2018『つくばアクションプロジェクト2017年度活動報告書』より)。2017年度のパーティシパント数は、学園祭といった大きな発表・展示の機会を利用し、一般来場者の観覧参加を多く得た企画が例年以上に多かったことが主要因であった。対して2018年度

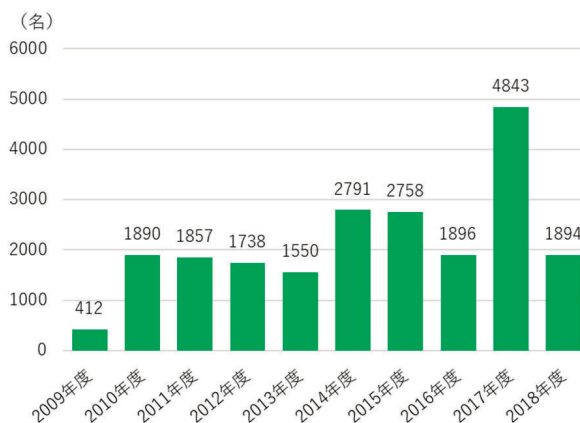


図6 パーティシパント報告数の変遷

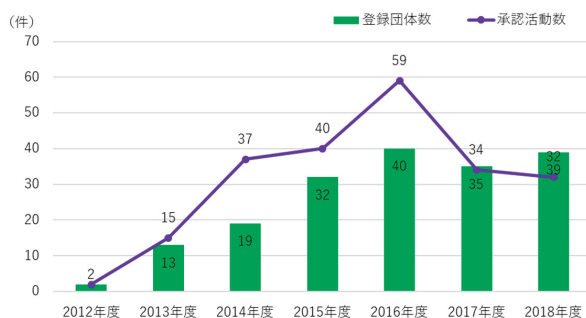


図7 T-ACT ボランティアの登録団体数と承認活動数の変遷

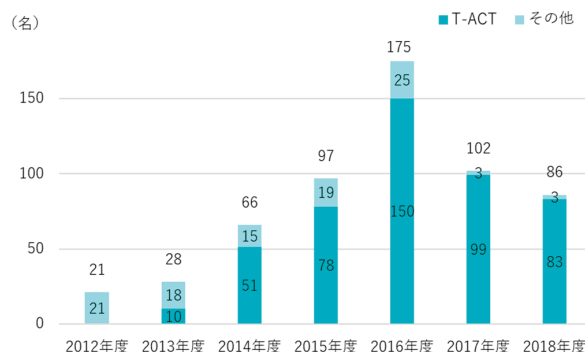


図8 T-ACT ボランティア登録団体で活動した学生数の変遷

は1000人単位での動員を志向する企画が少なかったため、例年相当の報告数になったと考えられる。

2018年度のT-ACT ボランティアへの登録団体や承認活動は2017年度と同程度であった。ボランティア参加者は2016年度、2017年度に引き続き減少が見られた。しかし、2018年度は2017年度まではT-ACT ボランティアとして活動していたものが、学生主体へと移り変わることでT-ACT アクションとして活動されるようになったものが2件ある。そういった活動の参加人数も加味すると、実際にボランティア活動に参加した学生は減少していないと考えられる。学生がボランティア活動を通じて社会での活動の経験値を得たり、人間力の育成を可能とするためにもT-ACTは、学生に対してボランティア活動の情報を周知するだけでなく、活動を通じて得られる成長や達成感を伝えていき、学生のボランティア参加に対する支援を続けていく必要がある。

2. T-ACT フォーラムの利用状況

T-ACT フォーラム来室者数の変遷を図9に示した。2018年度の延べ来室者数は1494名であり、実来室者数は803名であった。また、学生の来室目的の割合の変遷を図10に示した。2018年度のT-ACT アクションの新規申請に関する相談(A新規)が17.8%、T-ACT アクションの運営のための利用(A運営)が50.7%、T-ACT アクションへの参加に関する相談(A参加希望)が0.3%、T-ACT プランに関する相談(P関連)が0.3%、T-ACT ボランティアへの参加に関する相談(V新規)が2.6%、T-ACT ボランティア参加後の相談に関する利用(V運営)が1.6%、T-ACT サポーターの来室(サポーター)が6.1%、総合科目に関する利用(授業)が8.4%、その他の利用(その他)が12.3%であった。

2018年度のT-ACT ボランティアに関して来室した地域活動団体などの来室者数は71名であり、来室目的としてはT-ACT ボランティアの団体登録あるいは募集申請に関する「ボランティア募集関連」が最も多かった(図11)。

T-ACT フォーラムへの来室者数は2017年度に比較して減少したが、ほぼ例年通りの水準に戻ったと言える。T-ACT アクションに関する利用割合は昨年度までとほぼ同様であり、T-ACT アクションの促進にとってT-ACT フォーラムが重要な役割を果たしていることは変わらない。2018年度の特徴としては、T-ACT サポーター学生による利用割合が増加していることである。サポーター数は2017年度までの7名から、2018年度には20名まで増加しており、サポーターによるミーティングや談話などの気軽な利用が増えた。「その他」の理由で来室する学生も引き続きおり、そういった学生は「居場所」としてフォーラムを利用していることが伺えた。こういった、学生の安らぐ場としての機能は引き続き保ち続けている一方で、とりあえず「やってみたい」を相談しにきて、T-ACTの支援にはのらなくとも、他の適切な支援につながる学生も少数ではあるが見受けられる。たとえば、サークル団体の設立へと直接踏み出す学生もいれば、地域のビジネスコンテストに出場するためのアドバイスを受け、入賞を果たす学生、ビジネスプランを志向していたため本学国際産学連携本部やその開講授業へとつながっていった学生などがいた。T-ACTの活動として承認に至らない活動に対しても、その「やってみたい」を支援する機能が働いていると考えられる。

T-ACT ボランティアに関する来室者数の割合は微増している。2017年度以前はサークルといった団体がボランティア活動に参加する学生が多かったが、そういった学生がT-ACTの窓口を通してボランティア登録するようになったことが影響していると考えられる。学生団体としての活動に関係なく、T-ACTを利用してボランティア活動を行う学生は少なからずいることは確かであり、そういった学生の支援をより手厚く行っていくことは大切であると考えられる。ま

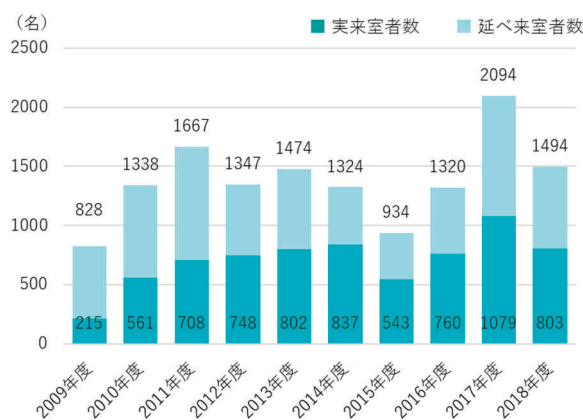


図9 T-ACT フォーラム来室者数の変遷

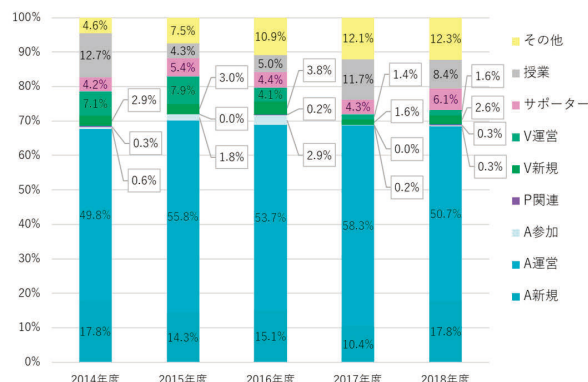


図10 T-ACT フォーラム利用目的の変遷

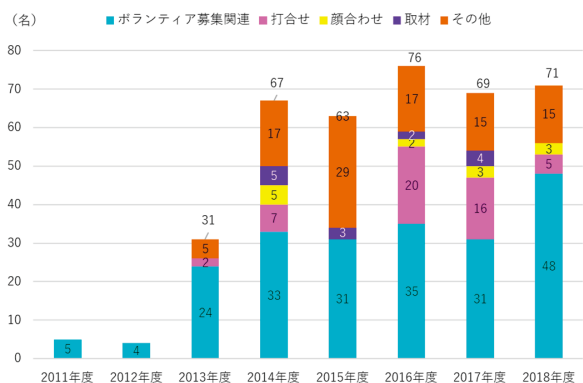


図11 T-ACT ボランティア来室者数の変遷

た、集計上の数値には表れない実態として、地域団体から T-ACT フォーラムに、学生の力を活用した地域活動の相談を受けることが増えている。こういったニーズにも真摯に対応することで、地域社会と筑波大学生をつなぐ機能を強化することが今後も求められるであろう。

総じて、T-ACT フォーラムは、T-ACT に関する活動を促進する機能だけでなく、学生が気軽にかつ安心して過ごせる「居場所」の機能や、学生および地域団体にとって新たな活動を創生するためのコワーキングスペースのような機能など、多様な学生支援機能を持ちつつあると言える。

3. T-ACT による人間力の成長

Web アンケートにおいては、活動終了後の人間力の成長に関する調査項目がある。参加力、体験力、コミュニケーション力、統率力、企画力の5つを人間力の指標として想定しており、それぞれを測定する項目は表1の通りである。

表1 人間力を測定する項目

| |
|--|
| 参加力：積極的に活動に取り組む力 |
| 活動の実現に向けて自分なりに努力できた 活動に積極的に関わることができた 活動の実行に貢献することができた 活動にできるだけ多く参加できた 互いに協力し合いながら、活動を進めることができた |
| 体験力：活動の中で感じとり考える力 |
| 活動を通して、新しいまたは忘れていた自分の長所に気づくことができた 活動を通して、自分の改善すべき点を知ることができた 活動を通して、喜怒哀楽を感じることもできた 活動を通して、なんらかの新しい発想を得ることができた いろいろな出来事を見聞きできた 活動に参加して、いろいろと考えさせられる体験ができた |
| コミュニケーション力：他者と関わる力 |
| 他のメンバーに対して自分の意見を伝えることができた 他のメンバーと積極的に関わることができた 自分の気持ちを伝えることができた 他のメンバーの意見に耳を傾けることができた |
| 統率力：メンバーをまとめる力 |
| 他のメンバーに対して公平に接することができた 孤立したメンバーがいなくどうか注意を払うことができた 指示を出し、効率よくメンバーを動かすことができた 活動の目的、あるいは目標を達成させることができた リーダーシップを発揮することができた |
| 企画力：創造し計画し実現する力 |
| 活動に関して様々なアイデアを発想することができた 活動を実現するために適切な計画を立てられた 活動を実現する際に生じる問題点を予測しておくことができた ある程度計画通りに活動を遂行できた 活動に関係する情報を多く集めることができた |

5つの人間力についての回答結果は図12から図16までに示した。また、「自分について考えさせられる体験ができた」という、自己理解の深まりについての項目の結果についても図17に示した。2018年度の調査対象は94名であり、そのうちプランナーが34名、オーガナイザーが39名、パーティシパントが21名であった。

全体で見ると、いずれの項目も「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合が65%を越えており、T-ACT への参加によって人間力の成長や自己理解の深まりを得られる学生が多いことを示している。役割別で見ると、パーティシパントとしての参加よりもオーガナイザーとしての参加の方が、オーガナイザーとしての参加よりもプランナーとしての参加の方が、人間力の成長や自己理解の深まりを得られている傾向があるのは例年通りである。また、参加力、体験力、コミュニケーション力に比較して、統率力、企画力の達成度が低いという結果も過去の傾向と同様である。

プランナーといったより企画において重要な役割にいる学生の方が、総合的に見て豊かな体験ができている。体験型の学習機会を提供している T-ACT ならではの特徴であろう。各人間力を見てみると、統率力、企画力といったより高次の力であると想定されるものの方が達成が難しい傾向にある。しかし、そういった難しい力も、T-ACT に参加することで、そして役割をステップアップしていくこと、徐々に達成できるようになると考えられる。T-ACT に参加することによって、過半数の学生は人間力の成長や自己理解の深まりを得られ、より企画への関わりが強い役割で参加することによって、その学びは大きくなることが示されたと言える。

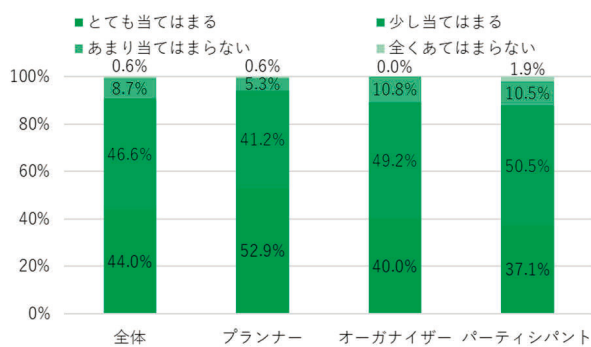


図12 T-ACT 参加時の役割と参加力の成長

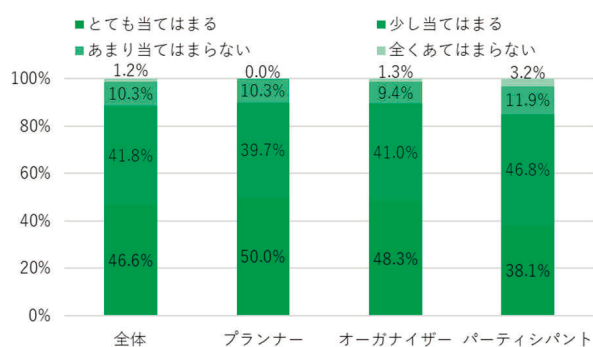


図13 T-ACT 参加時の役割と体験力の成長

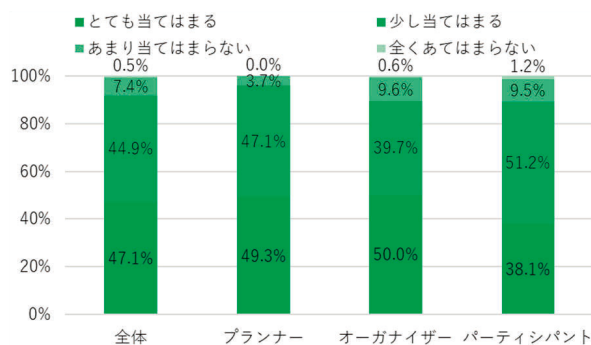


図14 T-ACT 参加時の役割とコミュニケーション力の成長

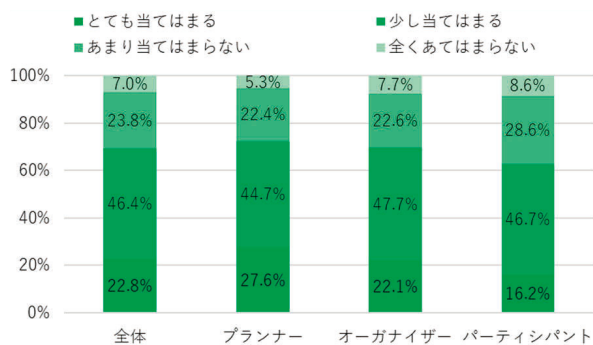


図15 T-ACT 参加時の役割と統率力の成長

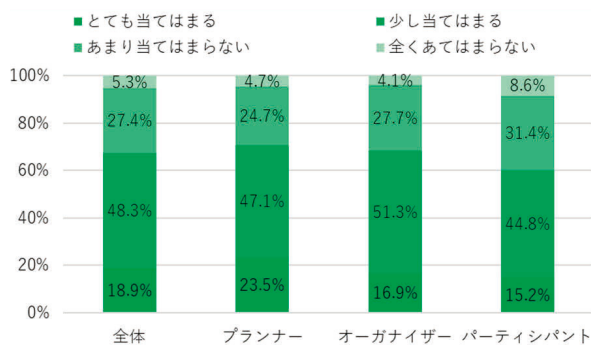


図16 T-ACT 参加時の役割と企画力の成長

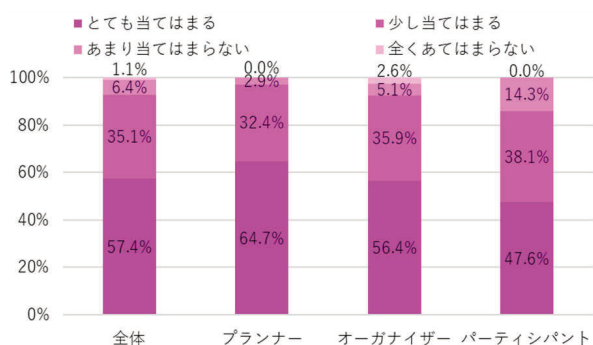


図17 T-ACT 参加時の役割自己理解の深まり

4. 公開シンポジウムの開催

T-ACT 推進室は、学生のさらなる活動の発展と地域参画を促進するため、筑波大学内外に向けて学生の活動と T-ACT の成果を発信し、意見交換や交流による関連組織との連携を図るイベントを開催している。それが公開シンポジウムと活動報告会である。特に公開シンポジウムにおいては、上記の目的の他にも T-ACT の支援体制を振り返り、今後の支援のあり方を考えるという目的も含まれる。以下に、2018年度の公開シンポジウムの報告を掲載する。

○ 開催概要

シンポジウム本会

日時：2018年12月12日（水）14：30～18：00

場所：筑波大学学生会館国際会議場

情報交換会

日時：2018年12月12日（水）18：10～19：00

場所：筑波大学学生会館第6会議室

○ 本会の様子

2018年度の公開シンポジウムは「社会からみた筑波大生 ～ T-ACT への評価と期待～」というテーマのもと、企業活動という面から見た社会と地域貢献という面から見た社会からの筑波大学への評価と期待を確認し、学生を社会に送り出す支援のさらなる充実を検討した。総合司会は T-ACT 推進室員 青柳悦子が務めた。参加者は筑

波大学生23名、筑波大学教職員24名、学外から11名、計58名であった。

シンポジウムは副学長（学生担当）佐藤忍の挨拶で始まり、はじめに T-ACT の支援体制についての説明と、T-ACT を活用した体育専門学群の在校生である伊藤春花および本学大学院の卒業生である川邊貴英氏からの活動報告が行われた。続いて、(株)日経 HR より多湖元毅氏（コンテンツ事業部編集部長）に「企業から見た筑波大学と T-ACT」というテーマで講演をいただいた後、つくば市より高瀬章充氏（スタートアップ推進室スタートアップ推進監）に「地域貢献から見た筑波大学と T-ACT」というテーマで講演をいただいた。最後に、これまでのプログラムに登壇した全員によるパネル・ディスカッションを、T-ACT 推進室員 土井裕人による司会のもと行った。

プログラム全体を通じて、T-ACT による支援によって、学生は座学だけでは身につけられない他者と交流をしながら何かを為すための実践的な力を大いに育むことができ、その学生生活を充実させることが可能であることを確認できた。そうして育まれた学生の力は、企業活動といった観点からも、地域貢献といった観点からも、社会に求められる力であるとの評価がなされた。また、学生の社会的な力を育むために効果的な支援制度として、T-ACT の支援体制やノウハウが広く社会に周知されることが望ましいという提案もなされ、T-ACT のこれまでの支援効果と新たな可能性を再確認できた会となった。今後は、T-ACT の支援制度の教育的な有効性を学内だけでなく学外へも発信することが重要である。



在校生による T-ACT での経験についての発表



高瀬章充氏による講演の様子



登壇者全員によるパネル・ディスカッション

5. 活動報告会および企画表彰

2018年度の活動報告会は、T-ACT アクション表彰と合わせて上半期、下半期の2回実施した。また、活動報告会にあわせて、活動の奨励を目的に、上半期、下半期それぞれの期間で終了した企画のうち、参加者の人間力をより高めたと評価される企画の表彰も行った。表彰対象としてノミネートされ、活動報告会にてプレゼンテーションを行った企画は、T-ACT 推進室員による選考で選出された。最終的な賞は、活動報告会でのプレゼンテーションに対する、活動報告会来場者の投票によって決定した（表2、表3）。また、下半期の活動方向会においては、T-ACT で活動する学生へのご支援をくださった教職員へのグッド・パートナー賞の贈呈、特に学生への教育的な配慮を行っていただいたボランティア登録団体への感謝状の贈呈も行った。

上半期の活動報告会は9月27日（木）（13：30～17：00）に、筑波大学サテライトオフィス（つくば市つくば総合インフォメーションセンター含む）にて開催された。下半期の活動報告会は3月22日（金）（14：30～18：00）に、筑波大学総合研究棟 A110公開講義室にて行われた。上半期には50名、下半期には47名が参加し、学生の活動を学内外に発信する良い機会となった。

表2 2018年度上半期に表彰された企画

| 賞 | 上半期 | |
|-----------------------|--------|---|
| | 承認番号 | 企画名 |
| 最優秀賞 サポーター賞 奨励賞 | 18020A | 竹水鉄砲合戦～夏の陣～ /WATER GUN FIGHT |
| 優秀賞 奨励賞 | 17030A | 響け！つくばの調べ ーみんなの力を結集し、ラター「マニフィカート」を演奏しよう！ |
| | 18004A | 大人になってから生きづらくなる「児童虐待」を 考える講演会を開きたい |
| 特別賞 奨励賞 | 17034A | TSI プロジェクト (Tsukuba × Social Innovation) 大丈夫～誰でも自分らしく働き、幸せに暮らせる社会へ |
| | 17039A | 第1回 アダプテッドスポーツワークショップ |
| サポーター賞 奨励賞 | 18003A | 超学生団体新歓 |
| 奨励賞 | 17038A | グローバルにボドゲ会 |
| | 17043A | これからの大学を考える ACADEMIC CAMP！ |
| ノミネート 以外の特別賞 | 17040A | マイノリティって何？～私もあなたも、きっとみんなも～ |
| ノミネート数 | | 8 |

表3 2018年度下半期に表彰された企画

| 賞 | 下半期 | |
|-----------------|--------|---|
| | 承認番号 | 企画名 |
| 最優秀賞 奨励賞 | 18005A | “Everyday Tsukuba Project” ～写真で迎える筑波大学～ |
| 優秀賞 奨励賞 | 17044A | ピアサポートでつながろう ーみんなで助け合えるキャンパスを目指してー Part2 |
| | 18024A | つくばから “お笑い” を発信したい！ |
| サポーター賞 奨励賞 | 18030A | プロジェクト√ |
| 奨励賞 | 18001A | 盆 LIVE2018 |
| | 18007A | 人つくば ver.2 ～人文学系有志発表会～ |
| | 18010A | あおぞら絵画遠足 ～日本を描きに出かけよう！～ |
| | 18015A | 学生プレゼンバトル2018 |
| | 18026A | 第4回小中学生将棋大会 |
| | 18032A | インプロをやろう！ |
| ノミネート 以外の特別賞 | 18023A | 「きょうだい」って何？ きょうだい支援を考えてみよう！ |
| | 18027P | 筑波大学非常用備蓄品倉庫って知ってる |
| | 18029A | Library for all (LiFA) |
| ノミネート数 | | 10 |

6. 地域連携への取り組み

○つくば市被災者支援ネットワークへの参加

つくば市被災者支援ネットワークとは、つくば市及び近隣地域で災害が起きた際の災害支援のあり方について、市民活動レベルから考えて地域が協力する体制を整えるため、つくば市市民活動センターが発起団体として開催された会議体である。2015年9月に起こったつくば市の隣接市である常総市での洪水災害を受け、つくば災害支援連絡会議という名称で定期的に開催されていた会議が、2018年度より暫定的に『つくば市被災者支援ネットワーク』と名称変更している。本学からはT-ACT推進室長 加賀信広、T-ACTコンサルタント 黒田卓哉、T-ACT ボランティアアドバイザー 飯島由香が参加した。現在、さらなる連携体制を構築するために、組織体の整理を進めている。

○つくば市との連携体制の強化

学生の地域社会での活動を活性化させ、より社会的実践的な力を身につけるための機会を学生が得られるように、つくば市における関連組織との連携強化を図った。特につくば市役所の関連部署（市民活動課、文化芸術課、周辺市街地振興室、こども未来室など）との連絡体制を整え、互いに有益と考えられる情報の交換、必要に応じて学生の相談のつなぎなど、実務的に協力できる体制を整えた。これによって、地域等を舞台として活動を行いたい学生が、より適切な関連組織につながりやすい体制を構築できたと言える。

編集後記

2018年度の活動を振り返って特に印象的であったことは二つあります。一つ、なんだかよくわからないけどT-ACTサポーター学生がたくさん増えたこと。二つ、T-ACTにおける体験は社会に出るからこそ役に立つ、大きな成長の糧になることが実感できたこと。

T-ACTサポーターは2017年度までの延べ人数が21人でした。10年かけてこの人数ですので、1年につき2人換算になります。2018年度はどうでしたでしょうか？ 終わってみたら、延べ人数が34人になっていました。1年で13人です。2019年度は4月の時点で、もう1人増えて35人になっております。「助けてほしいんだよね」と声を掛けると「いいですよ」「お世話になった分、お返しできれば」と返してくれる学生がこんなにもいること、涙が出るぐらい嬉しいです。各々無理のないペースでお手伝いいただいていますので、T-ACTフォーラムの利用具合も十人十色ですが、「T-ACTでは面白い人と出会えるから」となんだかんだ居着いてくれています。T-ACTフォーラムの刺激と緩さが絶妙に混じった空気感は、T-ACTのあり方を象徴しているように思います。サポーターのみんな、スタッフのみなさん、いつもありがとうね。

T-ACTを活用してくださった学生が卒業式に訪ねてくれることもあります。そんな学生さんの中には、T-ACTでの体験を通じて得たアピールポイントや、それを経て深まった自己理解をもとに、就職活動の荒波を越えていったと報告してくれる方もいます。2018年度に行われた公開シンポジウムにおいても、企業の就職状況についてのエキスパートや地域貢献・振興のエキスパートから「T-ACTは学生が社会に出る際、出た後にとっても役に立つ成長ができる場所」とお墨付きもいただきました。社会への結びつきという意味では、ビジネス体験を志向する学生への支援も広げつつあります。蛹たる学生が、社会人として大きく羽ばたけるためのお手伝いができている——そんな実感があります。「自分が納得できる進路を選ぶことができた」そんな表情で未来へと進む学生を見送れることは、なにより嬉しいものです。

学生が自分の人生を自分の力で選び取っていくための力をつける場所、そんな場所が今のようによいままでも学生に好かれるよう、これからも力を尽くせたらと思います。

T-ACT コンサルタント
黒田卓哉

今年度の活動は、これまで以上に地域団体と関わった、関わりたいという学生が多くなったと感じた1年でした。半期に一度開催している活動報告会で出会った学生がボランティアに参加したり、地域団体のイベントに参加をさせていただいたり…さらに、昨年度までT-ACTボランティアとして、地域団体の活動に学生が参加するという形であったものが、T-ACTアクションに変化した企画も見られました。企画を通して地域団体の方々に多くのサポートを受け、みんなで楽しんでいるという話を聞くとT-ACTはアクション・プラン・ボランティアという枠組みを飛び越えた企画となっているようです。学生自身が企画を運営する上で、学外とも良い関係を築きながら、どんな活動も楽しんでいることがT-ACTの存在意義は大きいと思っています。それも、直接かかわっていただいている地域団体の皆様はもちろん、広報などにも協力していただける地域の方々のおかげであると思います。本当にありがとうございました。

さらに、学生との繋がりを持つことを、多くの地域団体の方は希望している中で、であることが、T-ACTのスタッフとしてとても嬉しく感じています。

T-ACT ボランティアアドバイザー
飯島由香

2018年度 T-ACT 推進室員一覧

| | 所 属 | 職 名 |
|-----|------------------|---------------|
| 室 長 | 加賀 信広 人文社会系 | 教授 学生生活支援室長 |
| 副室長 | 杉江 征 人間系 | 教授 |
| 室 員 | 土井 裕人 人文社会系 | 助教 |
| | 大友 貴史 人文社会系 | 准教授 |
| | 松枝 未遠 計算科学研究センター | 助教 |
| | 中内 靖 システム情報系 | 教授 |
| | 後藤 嘉宏 図書館情報系 | 教授 |
| | 三輪 佳宏 医学医療系 | 講師 |
| | 李 燦雨 体育系 | 助教 |
| | 原 忠信 芸術系 | 准教授 |
| | 田附あえか 人間系 | 助教 |
| | 田中 博 計算科学研究センター | 教授 |
| | 青柳 悦子 人文社会系 | 教授 |
| | 唐木 清志 人間系 | 教授 |
| | 田中 崇恵 人間系 | 助教 |
| | 慶野 遥香 人間系 | 助教 |
| | 黒田 卓哉 学生生活支援室 | 助教 T-ACT 専任教員 |
| | 葛山 清光 学生部学生生活課 | 課長 |

2019年度 T-ACT 推進室員一覧

| | 所 属 | 職 名 |
|-----|------------------|---------------|
| 室 長 | 加賀 信広 人文社会系 | 教授 学生生活支援室長 |
| 副室長 | 杉江 征 人間系 | 教授 |
| 室 員 | 土井 裕人 人文社会系 | 助教 |
| | 大友 貴史 人文社会系 | 准教授 |
| | 松枝 未遠 計算科学研究センター | 助教 |
| | 中内 靖 システム情報系 | 教授 |
| | 後藤 嘉宏 図書館情報系 | 教授 |
| | 三輪 佳宏 医学医療系 | 講師 |
| | 李 燦雨 体育系 | 助教 |
| | 坂本 拓弥 体育系 | 助教 |
| | 原 忠信 芸術系 | 准教授 |
| | 田附あえか 人間系 | 助教 |
| | 田中 博 計算科学研究センター | 教授 |
| | 青柳 悦子 人文社会系 | 教授 |
| | 唐木 清志 人間系 | 教授 |
| | 慶野 遥香 人間系 | 助教 |
| | 黒田 卓哉 学生生活支援室 | 助教 T-ACT 専任教員 |
| | 葛山 清光 学生部学生生活課 | 課長 |

つくばアクションプロジェクト活動報告書

2019年6月発行

筑波大学 T-ACT 推進室

〒305-8577 つくば市天王台1-1-1

TEL 029 (853) 2222

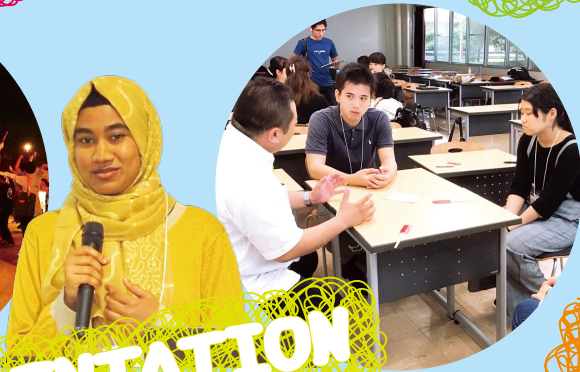


学生サポーター



DANCING!

PLANINGG?



PRESENTATION

AWARD!



DESCRIPTION

LEGEND



REPORT

T-ACT!